中央公論

本號目次

西藏風俗



(信徒大轉法輪機を廻轉す)



(人骨の喇叭)



(喇嘛僧小轉法輪機を持す)

中央公論
第十六年
第貳號

中央公論

解脫を解す

文學士　森内政昌

人間の本質は果して如何なるものなりやの問題は、古來幾多の哲人によりて考査究明せられたれども、或は甲と論じ或は乙と駁し、議論區々に岐れて容易に要約歸結し得可からざるの觀ありといへども大略二途を分ち得るが如し、即その一は理性(Ratio)を以て人間の本質なりとなすものにして、ヘイゲルの如きは其著名なる代表者として見るべく、他の一は情性(Voluntas)を以て人間の本質なりとなすものにして、ショウペンハウエルの如きは蓋その代表者の主要なる一人なりとす、或は之を理性といひ、或は之を情性といふ、吾人未だ容易にその何れか當れるやを判別するの智識を有せずといへども、近世の科學の敎ふる所と輓近の思索の傾向する所にして之を打算すれば、後者を以て人間のより根本的なる本質となすの優れるに非る乎を思はしめずんば非ず。

人間のより根本的なる本質は情性なり欲望なり意志なり、換言すれば人間はより根本的に一の慾求的實在(ein wollendes Wesen)なりとすれば、吾人一切の行動はその欲望を達するか或は之を抑壓するかの二途何れかに屬すべし、然るに欲望の到達は快樂にして欲望の抑壓は苦痛なることは普通の規則として見るべきが故に、普通の人間は一にその欲望を達し快樂を享有するを以てその行動の標的となすあるに至るは蓋し自然の趨勢のみ、然れども此世界の組織と此社會の事情とは、往々にしてその欲する所のものを遂せしめずその求むる所のものを得せしめざるが故に、苦痛と不滿足とは此生活に附隨して到底避くべからざる事實なりとす、而かも吾人々類は此苦痛此不滿足より脫離して常住の妙樂を希求すること蓋し大旱の雲霓に於けるよりも切なるものあり、是に於て乎吾人の問題はその欲望の遂せられずその希求の得べからざる時に於て、而かも主觀的に快樂を享有するを得るは如何にして可能なるや、換言すれば欲望の抑壓と快樂とは如何にして共存し得べきやの問題なり、吾人は之を稱して解脫(Salus)

の問題といふ。

眸を放つて社會に於ける幾多の施設を見るに一に欲望の到達を以てその目的となさゞるはなし、食はんと欲す、市に美肉あり肥粟あり、衣んと欲す、綾羅錦繡敢て得難きに非ず、住はんと欲す、大厦高樓加ふるに彫縷金工を以てするも亦可なり、行かんと欲す、陸に鐵路あり海に汽船あり、千里の行程僅數日を出でずして達すべし、所謂物質的の供給と設備とは日に月に駸々乎としてそれ盛なりといへども、然れども這般の施設は一に欲望の到達に便するのみにして、決して欲望の抑壓に資すべき道具に非ず、換言すれば積極的に吾人の欲望を到達して快樂を獲得する材料を提供すといへども、消極的に吾人の欲望を節抑して而かも樂々の地を見出すべき方法を指示するものに非ず、之を要するに物質的の文明は一方に於ては的皪たる有形的快樂の資料を吾人の眼前に配列すといへども、他の一方にありては之に對する欲望の阻碍され若しくは抑壓せらるべき場合に於ける解脱の方策を授くるあるなきが故に、物質的の文明は猶印度の魔神ヤーマーの如く、隻手を以て恩惠を撒きつゝ隻手を以て脅迫しつゝあるに比すべし、故に物質的の文化は確かに人生の半面に於て吾人の幸福を增進しつゝあるは決して拒むべきに非ずといへども、他の半面而かも最も主要なる半面の幸福は決して物質的文化の企畫すべき使命に非ざる事も亦明なり。

夫れ輓近の世紀に於ける文明は物質的文明なり、科學的文明なり、近世の劈頭に現はれたる科學的研究の曙光は、十九世紀に至りては既に日午の光明に達せしものといふべく、爲めに收得せる效果として、社會組織の各部分に於て幾多物質的幸福の增進を認むるを得べしといへども、人生の幸福は決してかゝる文明の完ふし得る所に非ず、之に反して如何に科學的の進歩するあるも、無算の民衆をして等しくその欲する所を得せしむるは到底期し得べからざるの事項なる以上は、欲望を抑壓して而かも主觀的滿足を享有するの方法を敎ふるものなかるべからず、換言すれば解脱即苦痛の離脱は有形的物質的材料の給供によりて客觀的に到達せらるゝを得べしといへども、是れ暫有的の解脱にして、眞の恒久的解脱は主觀的精神の修養によりて得らるべき光明なることを敎ふるものなかるべからず、而して之を敎ふるものは倫理と宗敎即是れなり。

宗敎は自己(Selbst)と絶對(absolut)との合一によりて

解脱に達するの道を說き、倫理は自己意志（eigen Wille）と總合意志（Gesammtwille）との合一によりて解脱に達するの道を敎ゆ、自己の受くる幸福も自己の禁むる不幸も、共にその中に神の妙音を見出しつゝ、自から樂むあるは宗敎的解脱にして、他人に善を施し他人の毀害を恕して、而も自から樂むあるは倫理的解脱なり、釋迦基督の解脱は之を宗敎的解脱と名くべく、孔子ソークラティスの解脱は之を倫理的解脱と名くべし、然れども此二種の解脱はその意識部內に於ける觀念連合樣式に多少の差異あるによりて分つといへども、而かも截然たる區分を設くべきものに非ず、反へりて互に相錯綜して明かに分つ可からざるを以てその本色とすべし、故に孔子ソークラティスの解脱にも宗敎的分子の認むべきものあると同時に、釋迦基督の解脱にも亦大に倫理的の分子あるは言を俟たずして明なり、之を要するに宗敎的解脱はその初め人類の欲望を自然秩序（Naturordnung）との衝突の解釋より始源せるものなれども、やがて社會秩序（Sozialordnung）との衝突をもその解脱を神に於て求め、神は吾人を「自然の惡」（natürliche Übel）より救濟するのみならず、又「倫理上の惡」（ethische Übel）よりも吾人を救濟する原理なりとして考ふるに至りたるものなるが故に、宗敎的解脱は勢ひ倫理的解脱をも之を含有すべし、之に反して倫理的解脱は吾人の欲望と社會秩序即總合意志との衝突より始原せるものなれども、その總合意志は遂には一の絕對そのものとして考へらるゝに至るものにして、韓圖にありては『實在』そのものなりとせられ、朱子にありては宇內に遍滿せる『理』なりとせられ、基督敎にありては言葉（memra）は終に宇宙を司配する『道』（Logos）なりとせらるゝに至りしが如く、倫理的解脱は遂には宗敎的解脱化するに至るものなり、たゞ吾人はその出立點の宗敎的意識よりするか倫理的意識よりするかにより、便利の爲めに二種の解脱を分ちたりといへども、既に解脱といふは即宗敎的意味にして、解脱そのものとしては決して區別せらるべきものに非ざることを記憶せざるべからず、請ふ吾人をして解脱そのものを暫く以上の二方面に分ちて考察する所あらしめよ。

先づ之を宗敎の方面より考察せんに、吾人々間は始めて此世界の空氣を呼吸し始めて母胎を離脱せる瞬間より、その潛在的欲望を顯在化し、或は欲し或は望み或は求むるあるものなり、而かもその欲望や多面的にし

て且無限なるが故は、到底主觀の完全なる滿足を得る能はず、故にその欲するものにして得べからざるあり、その求むるものにして到らざるあり、此に於て乎苦痛あり不滿足あり、而かも吾人は此苦痛此不滿足を脫離しその欲する凡てを獲得せんと欲す、此に於て乎以爲らく吾人の欲する所のものにして得られざるあるは、蓋し吾人の能力や不完全(impotentia)なるが故のみ、若し夫れ全能(omnipotentia)なる神に至りては、その欲する所のものにして得さるなく、その求むる所のものにして到らざるあるなし、吾人は此全能の神に信頼して、その冥護によりその欲する所を得べしと、祈禱供犧蓋し之よりして始まる、即此場合にありては人間は自己の欲望到達の爲めに、積極的快樂を得んが爲めに、神を描きたるものにして、まことフォエルバッハのいひけん如く、神は『欲望の實躰』(Wunschwesen)なりといふべし、即我に治すべき疾病あり、而かも治するの術を知らず、乃走りて神の救濟を祈り、我に得んと欲するの事物あり、而かも之を得るの道を缺く、乃走りて神の冥護に訴ふ、神もし之を聽き之を許し、その疾病にして癒ゑ、その事物にして我が掌中に歸すれば、乃ち暫時の解脫を得べし、然かれども此階級の宗教にありては、その目的は欲望の到達、積極的快樂の享有にあるが故に、到底完全なる主觀の滿足を得べからず、神に祈るもその效果なく、神に訴ふるも聽かれざるあるを如何せん、此客觀的樂天的解脫宗教に於ける矛盾は、遂に主觀的厭世的解脫宗敎に進ましむ、即吾人の欲望の到達を目的として神を立し、その冥護によりて以て主觀の解脫滿足を求めしといへども、その解脫その滿足の暫有的消滅的にして、眞の解脫に非ることを知るに至るや、吾人は主觀的に消極的に一切の欲望を消滅すれば反へりて眞の解脫を得べしと考ふるに至る、蓋し欲望(Kama)の存する所即苦痛の存する所なればなり、是に於て乎滅欲的苦行を目的とするの宗教は始まる、吠陀の樂天的神話の宗教の一轉して婆羅門の厭世的滅欲的宗教となり、モザイズムの比較的樂天的有神教は一轉してユダイズムの比較的厭世的有神教となり、遂にプリイチヤアをして「凡ては虛飾なり」(all is Vanity)と怨せしむるに至りしもの又故なきに非ず、然れども此主觀的厭世的解脫も亦その中に矛盾を包含せるものにして眞の解脫には非ず、何となればその苦行(Tapas)を行ひ聖律(laws)に服從して、自己の欲望を滅却するは蓋し一種の苦痛にして、その

苦行その履律の決して解脱そのものに非るや明なり、解脱はその苦行を終りその履律を完ふせる將來に於て之を求むべきものなり、故に婆羅門敎にありては解脱を完ふせしサンヤシン(Sannyasin)はその苦行を終りたる後に到達せらるものとなし、ユダイズムにありては『天の御國』(Basileia Tōn Ouranōn)は猶太民族の履律を完ふせし未來の日に於て之を期すべきものとなせり、即厭世的滅欲的の宗敎にありては解脱は遠き未來にありて、その生活の瞬時々々に解脱を見出すこと能はず、而かも吾人は吾人の生活の現在にありて常に解脱を見出さゝる可からず、是に於て乎吾人の宗敎意識は圓融的絕對的解脱宗敎の境域に入るべし、此境域に於ける解脱は即眞の解脱にして吾人は手の舞ひ足の踏む所に凡て解脱の妙趣を解するを得るなり、最初の階級にありて或は笑ひ或は泣きたりし主觀は、次の階級にありてはたゞに涙の中に救濟を求めたれども、此の最後の階級にありては喜憂の劇變なしと云へども、常に樂々の地をその胸中に藏するものにして、大乘佛敎の奧妙なる所、ルウテルの敎へし眞髓は、蓋し此點にありと思惟すべく、彼の小乘の敎ゆる所、ツヰンクリの說く所は、尙未だ泣きつゝあるの境涯を離脱せるものなりといふを得可からざるべし。

更に之を倫理の方面より考察するも正に宗敎の過程に酷似せるものあり、人間の此世に現はれし當初にありては、凡てその意識の內に發露するものは自己の意志(eigen Wille)のみ、此己の意志は客觀的の倫理的聖權なる風俗習慣若くは輿論に合一するか又は背戾するかによりて、或は倫理的滿足を得或は倫理的不滿足を生ず、然れどもその風俗習慣若しくは輿論の果して眞の倫理秩序そのものを代表するや否やを疑ふに至りては乃ち客觀的聖權は主觀的聖權となり、他律的倫理標準(heteronom)は自律的倫理標準(autonom)となり、良心は此に於て乎主觀部內に於ける至上の立法者となる、然れども吾人の性癖吾人の自己意志は未だ此立法者此主觀的總合意志と調和する能はざるものあり、乃ち倫理的意識の相鬪(Zwiespalt)は常に吾人を苦しむるなき能はず、蓋し此階級にありては自己意志即性癖は全く總合意志即良心に適合せざるが故に、自愛と他愛との衝突を免れざるものにして、例令その性癖を曲げて良心の指揮に從ふとも、その性癖を曲ぐるといふ點と、その良心に服從するといふ點よりいへば、確かに一種の苦痛を意味するものなることは韓圖の言に徴

するも明かなり、故にその服從「せねばならぬ」曲げ「ねばならぬ」といふ意識は、實踐上缺く可からざる必要のものなりといへども、未だ完全なる倫理的解脫の境涯に非ず、之に反して眞の倫理的解脫は所謂圓融的のものにして、その性癖その自己意志の修養と訓錬とによりて、眞心即總合意志と全然適合し、自愛と他愛との間に些の衝突だも存在せざるに至れる境涯にして、此境涯にありては自己の欲する所のものは即眞心の欲する所のものにして、人の爲めにするは即自己の爲めにすると同一軌の中に存すべく、其終極に達せんか、倫理意識の苦惱は洗滌し去られて、常に滿足の狀態を繼續すべく「義務なり」との感覺も亦意識以外に放逐せらるゝに至るべし、蓋し「義務なり」との感覺は、自己意志と總合意志との衝突なくしては存在す可からざるを以てなり、己れ爲すを「欲せざる」あり而かも爲されざる「可からず」此に於て乎WollenとSollenとの間に衝突あり撞着あり、故に義務感情も亦存在す、WollenとSollenと一致し自己意志と總合意志と合一す、即凡てのせざる「可からざる」ものは即「欲する所」のものなり、此境涯に到達すれば「可し」の觀念は遂に意識以外に消滅して、何れより考ふるも服從、權力、苦痛等の感念の存在せざることと證明也、吾人は之を倫理的解脫の終極となす。

之を要するに宗教の解脫は自己と絕對と合一し自己と客觀界の過程(自然的並に倫理的過程)と一致融合するに至りてその終極に達すべく、倫理の解脫は自己意志と總合意志即倫理秩序と合一融合するに至りてその終極に達すべし、而かも此解脫の終極に到達せんが爲めには、吾人は婆羅門の例に倣ひて苦行を脩するを必要とすべく、又韓圖の教ふる所に從ひて義務の觀念を以て自己の性癖を打破するを必要とすべし、然れども是れ彼岸の光明に達するの航路なるが故に、或は風濤舷を壓するの困難と、櫓を執つて努力するの苦痛とを忍ばざるべからず、而かもその到達すべき彼岸には、天光燦々として花咲き鳥謡ひ、風常へに靜なるあるを得て期すべきなり。

教育學風の變遷

久津見息忠

我國に於ては古昔教育學と云ひ得べきほどの學術あることなかりき。中世以後儒道盛に行はれ、子弟を教育

するの學者なきにあらざりしと雖、而かも其敎育の原理原則を、特に一科の學術として講說したる人あることなし。貝原益軒、室鳩巢、新井白石等の碩儒子弟敎育の事に關して、各意見を述べたりしものありと雖、是等亦敎育學と稱し得べきものにあらず。故に敎育學と稱し得るほどの一科學が我國に存するに至れるは、實に明治維新以後の事なり。新開國にして百事未だ全く整頓せず、敎育の事も亦甚だ完備大成するに至らざりし米國すら、我國民が維新の新紀元に入り、文明進步の旅行を爲さんとしたりし明治の初年に於ては、既に其大敎育家ホーレス、マンの詳傳、並に全集をケンブリッヂより出版せられたる時なり。世界に於ける敎育學の進運は、他の文物と同じく、既に斯の如く進步しつゝありしと雖、維新の曙光を見さりし間は、我國民は尙未だ敎育學なるものゝ、如何なる學術なるかをも知らずして過ぎし也。

明治の新天地は百事をして悉く新ならしめたり。敎育學なるものは、此時に於て初めて吾人の耳目に觸れたり。而して初めに入り來りしものは、米國流の而かもハリス大に著はれず、デ、ガーモーも亦未だ甚だ稱せられず、唯ノールゼント、ペーヂ等の盛なりし時の通俗的にして兼ぬるに僧侶的なる敎育學なりき。其敎育の目的を說くや、人をして誠虔畏敬あるものたらしむるにありとして、宗敎的敬虔心を養ふにのみ傾けり。是れ蓋し中世以來歐洲に流行せし敬虔派、人道派の敎育學の末流を酌めりしものに過ぎず。然れとも此學派の敎育說たる、邦人の間には多く喧傳するに至らずして已みぬ。之を敎育學風變遷の第一とすべし。次に入り來りしものは、英國流なるものにして、實利學派の思想を述へたりしもの、即ちスペンサー、ベイン、ジョホノット等の敎育學實に之が代表たり。其敎育の目的を論ずるや、人の生活に必要なる知識、學術を授くるにありとし、敎育を以て單に吾人が完全なる生活を遂ぐるの準備たるべきものと見し也、故に此說の傾向は物質的にして、誠虔畏敬の心を養ふ事を怠り、實利的にして公共的精神、文雅的思想を發達せしむることを忘れ、動もすれは即ち利己主義に陷ることを免れ而かも此學派たる、盛に行はれたり。朝野の敎育家が據て以て標準としたりし所の理論の多くは皆これなりき。今日の人士中物質的、利己的思想感情を有するもの甚だ少なからざるは、蓋し此敎育主義の流行せし一結果なりと見るも、亦誤りなかるべき也。之を敎育學

風變遷の第二とす可し。次に入り來りしものは獨逸流の學説なり。其代表者としてはヘルバルトを推さゝるを得ず。其教育の目的を說くや、道德性格の養成にありとし、敬虔派、人道派、實利派等各派の思想を調和して、以て科學的に教育の原理方則を說けるもの也。此學派たる、歐米に於ても頗ふる崇拜者ありて、一代教育學の極致は爰にありと迄に想はれたるものなればなる可し、我國に於ても亦一時は教育界を風靡せり。即ち教育學風は第三の變遷をなせし也。然れども是等の教育學一般の學風を概觀すれば、國家社會を中心點として偏に人を之に適合するものたらしむることを理むるを以て、教育の最大目的とするものに非ず。之に反して寧ろ個人各自の發達を目的とするもの、要するに個人的教育を主張するもの也。國家社會を万事の終局點とする思想よりすれば、頗ふる不滿足ならざるべからず。是に於て乎、或は阿世的動機より、或は頑迷固陋の見よりし、又或は國家主義の意見よりして、國家的國民的思潮に淫溺したる教育論者等は、此學派を目して非國家的なる僻論なりと曲解し、敢て批難を加ふるに至れり。之をヘルバルトを以て代表者とする教育學風の一頓挫とも云ふべき乎。

爰に眼睛を放つて近時歐洲に於ける教育學風の變遷を見るに、獨にウイルマン、トイシエル等あり、佛にギエイヨー、フーイエーあり、從來の教育學が個人的なるに反して、教育は國家的、社會的、國民的若しくは民族的ならざる可らざるを主張し、國家を中心點とし、人を總て之に適合するものたらしむるを以て、眞個教育の目的なりと說く新學風起れり。我國の教育學が從來個人的なるに對して、非國家的なりとの論難を加へたる論者は、必ずしも此獨佛の新學風に聽きて、以て爾か論ぜしにはあらず、唯偶然にして表面上符を合せたるか如き觀を呈せし耳。而かも此論難や國家主義の盛行する間に起りたりしを以て、朝野に迎へられ勢力あるに至れり。爰を以てヘルバルト教育學の祖述者を以て任ぜし學者すら、脆くも此れに動され、教育學者として正當の位置なるヘルバルト學派を抛ち、更に獨佛に於ける此新學風を追ひて國家的教育科學てふ一種異樣なる說を立て、復た廣濶公平にして誠に科學的と稱し得べきヘルバルト主義を顧みざるに至れり。之を教育學風第四の變遷と云ふ可し。

然れども此變遷たる、必ずしも獨佛に於ける新學風を、正當無謬に傳へて以て爰に至れるにはあらず。唯其獨

遷の迹の表面上相似たる耳。而して更に實際の教育思想を顧みれば、教育學風の變遷斯の如きの時に當りて、殊に甚たしく國家的、國民的の氣習を增し來り、國家を以て万事の中心點と爲し、一切の個人を擧けて之か犧牲に供し盡すも、尙且足らすとするあるに至れるか如し。國家万能の主義、或は時事に適したるものあらん。而かも斯くて唱ふる所の國家とは官權の義なり、或は以て藩閥政府を云ふに過きず。故に這般の思想や專制的なり、立憲政治となれる今日に於ては、即ち時代の精神に適はさるもの也。又國民の自由權利の伸暢を主とすべき今日の社會の進歩に伴はさるもの也。實際の教育思想や斯の如く、而して教育學風亦同じき傾向を有す。相俟ちて教育を專制的思想を以てし、保守頑迷の意志を以てし、而して狹隘固陋なるものたらしむる也。是れ豈に憂ふべきの現象にあらすや。

抑も教育學は教育者に理想を與ふるもの也。而して其學風斯の如きの變遷に依りて、斯の如く狹隘にして專制的なる國家主義となれり。隨て教育者の理想亦甚た狹隘とならさる能はず。即ち我國の教育は教育界一般の氣習傾向の上に於て、專制思想なる國家的となれると同時に、其理想の上に於ても亦頑迷狹隘なるものとならんとすと云はさるべからず。是れ我國の教育をして其根本よりして過たしむる所以にあらずや。固より一二の卓見なる教育學者あり、此學風變遷の渦中に入らず、別に獨立の說を吐きつゝあるものもなきにあらさる可し。然れとも是れ其特殊のもの也、教育學一般の學風を見れは、即ち斯の如くにして國家的となりつゝある也。而かも斯の如きもの、若し教育の學理上當然の傾向ならは、是れ亦已むを得さるものとして承認せざるべからさることあらん。然れとも此學風果して學理上眞誠の傾向なるべきや否や。我國に於けるヘルベルト派に對せし非國家的なりとの批難は、或は阿世的動機に出で、或は固陋の見に出でたるもの多し。此は固より一笑にも價ひせず。之を問ふは寧ろ滑稽に落つべき也。然らは歐洲に於ける夫の國家的の傾向は如何。

惟ふに歐洲に於て、國家的傾向の教育學に附隨せるは、今日に初まれる事にあらず。其古に遡りて考ふれは、希臘の昔プラトー、アリストートルの時に於ても亦是ありし所なり。下りて宗教改革の時代に於てもルーテルの如きあり、教育を國民的立脚地より觀察してメランクトンと共に大に國民教育の實行に勸めたりき。ヲ

トケ、コメニウスの如きも、教育を以て社會全躰の教化と見做したれば、是亦國家的傾向ありしものと云ふも可ならん。就中フェヒテ、シラエルマッヘルの如きは其意見最も此方面に厚かりし也。されは此學風たる豈に啻にフーィエー、ウィルマンのみならんや。既に古來存する所なりと云ふべし。然れども希臘、羅馬の古に於ける國家的傾向は單に國家的思想に淵原する耳。ファルケンベルヒが其近世哲學史の緒論に於て說きたるか如く、昔の國家主義は單に一國を主義とせしものなる耳。而かも近代の國家主義は大に異なれり。即ち單に一國家を以て主要の標準とせずして、兼ぬるに世界的主義を以てするもの也。一面に於ては方に國家主義なり、其國民性を保守せんことを主義とすと雖、亦他の一面あり、此方面に於ては方に世界的理想を顯彰する也。崇高なる世界的理想を以てして國家の進步改革を遂けんとする也。此兩方面ありて始めて近代の國家主義は成る可し。ルーテル、メランクトン以下シヲエルマッヘル等の學者が說けりし教育上の意見は方に國家的傾向のものなりと雖、而かも一面に於ては亦方に世界的理想を含まさるはなし。プラトー、アリストートルの如きすら亦然るものあり。ギュイヨー、フーィエーの說の如きに至りては、其一面に於て甚た強く國家的主張ありと雖、他の一面に於ては最も明確に世界的理想を顯彰せり。ギュイヨーが教育の目的として揭出せる項目の中に、個人の特有なる諸能力の成長發達の必要を說き、宇宙の理法を知悉するの缺くべからざるを說き、フーィイエーが學生々徒に哲學を教授する必要を論じ、其世界を大觀し、宇宙的情穎を養ふに適せるを云へるか如き俱に之を證せるもの也。ウィルマン、トイシエル、フイシエル等獨逸近時の學者の如きも亦皆我國の論者の如く、狹隘なる見解を以て、教育の國民的、國家的、社會的なるべきことを說けるには非ず。要するに彼等は各國各時代の教育并に教育の理論が、其國民其時代の文明文物の中に胚胎せる所あるを明にしたる耳。別言を以て云へば、如何なる教育の理論、并に教育も其時代、其社會の文明文物の中に根底を有せざるはなく、全く時代の精神と離れたるはなしとの理を證明したりと也。然らは則ち單に國家的のみなりし古代の教育は單に國家的氣習ありし耳。國家的にして世界的なる方面を有する今日の時代に於ける教育并に教育學は、即ち國家的たりなから又世界的ならさるべからさるものなることを間接に證明せる

也。是れ豈に單に國家的傾向のみなりと爲すべきものならんや。況んや其國家的と云ふは、專制的、保守的、若しくは排自由民權的の意にあらず、方に立憲政治の意を含みたるものなるをや。歐洲に於ける教育學風の國家的なりと云ふもの、決して我國に於て云ふ所の國家的てふ意にあらさる也。就中キュイヨー、フィエーの所謂國家的には自由共和を主義とせる國家の謂にして非立憲的、排民權的なる他の國家的なるものとは全く其類を異にせり。我國に於ける教育幷に教育學風の國家的傾向著るしきを以て、直ちに之を同じとするは、唯其文字の似たる耳、表面的の符合なる耳。實質に於ては黑白全く同じからずと云ふ可し。更に極論すれは我國の教育學風の國家的傾向あるを見て、眞に能く世界各國に於ける同樣の傾向に一致せるものなりと爲し、方に得意ならんとするは、是れ反て大なる誤謬なり、即ち世界的理想を含まず、立憲的精神に一致せざる點に於て、全く相異れる也。斯の如き學風は之を如何ぞ世界の進運に伴へるものと云ふべけんや。

我國の教育學風の變遷、之を論し來れば斯の如く、世界の進運に伴はすして甚だ喜ぶべからさるものあり。乃ち我學者は此誤謬の學風を一變して誠に世界各國に於ける正當なる教育學風に和し、國家的にして而して世界的なる教育の理論を宣說廣布せさる可らず。苟も學問の獨立を重するものは之を是れ務めとせさる可けんや。

我國の慈善問題

留岡幸助

其二要點と三欠點

慈善事業を成功せしめて以て同胞の疾苦を救濟せんと欲する者あらんに誰か之を妨害嘲笑する者あらんや、啻其れ之を遂行する所以の動氣と方法に至りては世間幾多の異論なきを得さるなり、歐米各國の社會に於ける習慣の一として朝と野、貴と賤を問はず、爭ふて時を費やし、財を投じ、弱者に對する救濟の態度を執ることと頗る切實なるは吾人の羨望に堪へさる所なり、我國の如きは社會の風習未だ此點に達せさるを以て慈善事業を遂行するに當り極めて困難を感せさるを得さるなり、余不肖なりと雖も十有餘年の間直接間接に斯事業に關係し多少見聞したる點なしとせさるを以て左に慈善事業の要點と欠點とを列擧して同業諸君の教を請は

んと欲す。

第一、慈善事業は黨務を擴張し、教勢を張る所以の方法手段として爲すへきものにあらず、須らく惻隠の情念より、若くは宗教的熱情の熾んなる餘りに於て爲すへきものなり、然るに我國の慈善事業を視るに慈善事業を黨策して一種の方便に資せんとする傾向あるは惜みても尙餘りありと云ふべし、歐米に於ける慈善事業の隆々盛大を極むる所以の一大原因は雪よりも潔白に火よりも熱誠なる精神を以て斯事業に從事する所謂志士仁人の多きにあり、余曾て三好退藏君と共に感化院を起さんと欲し、暫く協同したることありき、當時寄付金募集の必要あるに際し警視廳に出願したるに警視廳は我儕の願望を容易に認可せさるを以て屢々出廳して其許可の遲延する所以を質したるに、警視廳は余等の企圖に疑團を懷くにあらすと雖も慈善的種類に屬する事業中槪ね十中八九までは山師的の者多きを以て特に丁寧なる調査を爲すに時日を要するなりと答へたり、警視廳の眼底に映する我國の慈善事業は槪ね斯の如きものなるを以て博愛仁慈なる社會有志家の同情を得さるも又無理ならさるなり、慈善事業を起さんと欲する者は須らく心事の潔白なるを要す、源泉淸からずして流の澄めるもの未だ曾て之あらさるなり。

第二、慈善は施與（アームス）にあらすして教育（エジユケーション）なりとは近時慈善事業及斯學に通曉したるものゝ輿論なり、然るに我國に於ける慈善事業は動もすれは在院兒と被救助者とを慈善事業の好材料として觀衆の面前に暴露するものなきにあらず、一二の例證を擧れば某育兒院に於ては參觀者のある毎に在院兒を併列せしめて憫情を催ふすが如き唱歌を異口同音に歌はしめて以て參觀者の同情を惹くが如き、又某孤兒院の如きは樂隊と稱し、幻燈と唱へ數十の孤兒を引率して日本全國を巡禮し、開會の都度公衆の面前に於て此孤兒は元と乞兒の群に列りたるものなり、今や我儕が教養の結果實に此の如くなりしなり、抔吹張して孤兒教育の必要を說くものゝ一二にして足らず、教育は果して此の如きものなりや、院長を父と呼び細君を母と呼ふなるに父たるもの母たるもの其子の過去に於ける墮落と現時に於ける發達とを比較して揚々特色あるが如きは父母たるものゝ本分ならんや、吾人は第十九世紀末の慈善事業が各種の點に於て教育的に發達せるなるに我國の慈善事業は獨りかゝる弱點を有して發達を期せんとするは將來憂患の一徵候にあらすして何ぞや、廣義なる教育は手腕と頭

腦(ッド)と心情(ハート)とを發達せしむるものにて慈善事業の實行は此廣義に於ける敎育的ならざるべからず、單に饑餓より救ふを以て足れりとし、若くは被服を與ふるを以て足れりとせば、之れ取りも直さず、中世に行はれたりし施與(アームス)にして近世的意義を有する慈善にあらさるなり、其故に我國の慈善事業を發達せしめんには感情的を避けて之を敎育的に實行せさるへからず、墮落不發達の人類を善良ならしめんと欲せば必すや之を敎育せさるへからず、被救助者を敎育せさる所の慈善は一時的にして永久的ならず、感情的にして道理的ならされは却て有害無益ならんとを恐れさるへからず。

飜て我國の慈善事業と歐米各國に行はるゝ所の慈善事業とを比較するに我に三大欠點ありて彼に之れなきを發見す、其の

第一は歐米の慈善事業は有力なる實業家(ビヂネス、マン)を後援者と爲せりと雖も我に之れなし、慈善事業は資本を要す、此點に關して有力の實業家なくんばあらず、我國に於て慈善事業を唱道するものは多くは寒貧の牧師にあらされば無資産の僧侶なり、彼等とても大に慈善事業を唱道すと云ふもの傳道や布敎の擴張には慈善事業も又一種の方便ならんとの考位に過ぎさるなり、如何程高尙なる道德を唱道するも、如何程精緻なる理論を說述するもその唱道と說述のみにては慈善事業を實行する能はず、慈善事業の實行には必すや有力なる實業家の應援を借らさるへからず、英米に於ける慈善事業が今日の如く盛大を極めたる所以は彼にジョン、ハワード。ピーボデーあり我に之れなし、之れ我が慈善事業の盛大ならさる所以なり、大倉喜八郎氏五十万圓を抛ちて商業學校を設立せしは我國に於ける慈善事業の破天荒にして後世に善例を示したるものと謂ふべし、吾人は斯の如き實業家が深大なる同情を我慈善界に寄せんとを希はさるを得さるなり。

第二の欠點は我國の慈善事業には女子の同情を寄するもの極て少數なり、余曾て北米合衆國の慈善事業を視察せる時深く感したる所以のものは彼國には女子にして間接直接に斯業に關係せるもの極めて多きこと是なり、北米合衆國に於ける慈善事業は女子の專有物にはあらさる乎とまでに怪まるゝ程なり、由來慈善事業は其根本的動氣に於ては純潔にして而かも濃厚たる同情と優美なる心情とを有せさるべからず、此の如き性情は即ち女性の特有物なり、於是乎慈善事業の發達は女性の應援に待つ所少からず、然るに我國に於ける斯事

業を觀察するに女子にして斯事業に熱心するもの極めて少數なり、之れ我が慈善事業の盛大を致す能はさる所以なり。

第三の欠點は我國の慈善事業には宗教家（僧侶と牧師を意味せず）の同情薄弱なり、歐米各國の慈善事業は教職を帶びざる基督教徒の一大運動にして著大の發達進歩をなせしは之が爲なり、エリサベッ、フライ。サラ、マーチン。ナイチンゲール。ミス、バートン。ロウウエル。ライト。ゼネラルブース。ハワード。クレテントン。カルネギー等の如きは一個の基督教徒として慈善事業を活動せしめたる慈善家の模型と云はさるへからず、其故に斯事業を成功せしめんと欲せば更に一層の熱心と同情とを我國の宗教家に求めざるへからず。

若し其れ以上列舉したる三者の缺陷斯業に加はるに至りては我國の慈善事業は著しき進歩を遂くるや火を見るよりも尚燎なり、聊か感する所ありて斯文を草す。

東清鐵道

（所謂滿州鐵道）

金華山人

今日に於て東清鐵道を記す、豈に偶然ならんや、露國は列國に向つて滿州を占領せざる可きを宣言せり、而して其各地に配置したる軍隊を轉じて東清鐵道線路の守備に變換したり、名は撤兵なりと雖も而も其實や散兵を變して長蛇の陣形と爲せしにすぎさるなり。東清鐵道は露國の東方に於ける生命なり。決死堅忍永久に之を保有せんとを欲する一大企畫なり。東清鐵道を露國の手中より奪はんか、東方に於ける露國の勢力は俄然として降下せん、今日に於て東清鐵道を知悉する實に日本國民の尤も切要と爲す處。

東清鐵道即ち滿州横斷鐵道なるものは、千八百九十六年八月廿七日を以て清國政府と露清銀行との間に締結したる合同條約に準據して布設せられたり

東清鐵道確定線路たる近時に至りて漸く一定し一端は西伯利亞鐵道に於けるストレチエンスク驛、チルチンスク驛間なる、カイドロフスクに其起點を發し滿州の大野を横斷して烏蘇利鐵道に於けるニコリスク驛に連

絡し以て玆處に其終點を完了するものなり、露國の熱心鋭意なるや其工事の急速、其停車場の經營、其材料の運搬等、殆んど全力を盡して開通の急ならんことを熱望するものの如し、されば其中央停車場とも云ふ可き哈拉賓のの如きは非常なる大計畫を以て經營せられ數年前迄は寂寞たる一寒村に過ぎさりしも、今や戶數五百餘露兵の兵營十三ヶ所に建築せられ我日本人の如きも殆んど三百餘人の在留者を見るに至れるなり、黑龍江を遡り、松花江を航行し、二十餘艘の蒸滊船、百八十餘艘の大荷船に依りて、運送しつゝある鐵道材料は哈拉賓に堆積せられ、以て東西の工事に供給せられんとす、數十艘の滊船に依り浦港に揚陸しつゝある鐵道材料は、晝夜烏蘇里鐵道を以て運搬せられニコリスク方面より着手せんとする工事に供給し、又はイマン、ハバロフカより黑龍松花を遡りて哈拉賓に供給せられんとす、之を要するにニコリスクより起りて哈拉賓に至る七百露里餘の工事は既に其過半を成効し哈拉賓よりカイドロワーに至る八百露里餘は、將に工事に着手せられんとす、吾人は玆にニコリスク哈拉賓間に於ける鐵道及其工事の近況を記し以て歐亞一貫鐵道の開通きにあるヿを報ぜん。

（一）ニコリスクよりスイフンに至る　ニコリスクは烏蘇里鐵道に於ける一大停車場にして浦港を去る僅に九十六ヨルスト隨て鐵道工事材料の供給人夫の從業上尤も便利を有する處となす東淸鐵道工事が最初に此方面より起工せられ其工事の成功も意外に急速なりしは怪むに足らざるなり、今やニコリスクよりスイフンに至る百三十露里は昨年十月廿五日を以て滊車開通の運に至り未だ公衆一般の往來を許可せずと雖とも既に人夫材料等を運搬しつゝあるなり、此の間に於ける停車場は八ヶ所に設立せられ貯水池、倉庫等凡ての設備完全せしものゝ如しポグラリイチナヤ驛よりゴロデコツフ驛に至る間三ヶ所のトンネルを有するの外平坦安靜なる線路と云ふべく唯々二三の河川に鐵橋の架せるを見るのみなり露國は東淸鐵道全線開通の後にあらざれば公衆一般の往來を許可せさるにや又は落成せし線路は直に公衆の往來を許可するにや吾人の得て知る處にあらずと雖もニコリスク、スイフン間の鐵道は其全備せること烏蘇里鐵道に劣らざるが如きを覺ゆ

（二）スイフンよりイマンポに至る　ニコリスクよりスイフンに至る間の百卅ヨルストは既に滊車の通行すること前記の如しスイフンよりイマンポ間は果して如何

此の間三百餘ヨルストは今や工事の最中にして一方はスイフン方面より工事に着手し、一方はイマンポ方面より工事に着手し双方より盛に工事を急速にしつゝあるか故に既に軌道を布設したる處あり又は單に道路を築成したる處あり線路を開通したる處ありて數千の兵士は眞黒になりて工事に從業しつゝあるを見る、スイフンより二十五露里は單に線路の築成しあるのみにして、此の内十露里は既に軌道枕木を布設しトロック車の往來自由自在なるあり、されば滊車の通行も早晩今一歩を進むるならんか、スイフンよりイマンポ間四百二十一ヨルストは未だ滊車通行の運に至らずして、現下其工程を急にしつゝある所なり此の線路たるや多くは坦々たる平地に沿ひ數流の小流を經過するのみにして工事又非常の難事なりとせず、唯々一帶の山脈連疊するありてトンネルを要する難工事一ヶ所あるにすぎす、川河の如きは大鐵橋を要するか如き難處なく單にコルベルド工事數十ヶ所を要するにすぎされば其工事に至りても容易なるとならん、而してウイシヘーよりイマンポに至る間は線路築成せられ、其内十三ヨルストは既に滊車の通行せるを見る、されば此間の工事も着々進行し來り双方の未成道路も次第次第に短縮し早晩滊車の往來を見るに至らんか、要するにスイフン、イマンポ間の道路は一のトンネル難工事を除くの外は案外工事容易にして線路の築成、軌道スリッパーの布設も急速に成功するなるべし此間にして開通せんかニコリスクより滊笛一聲數時間にして中央停車場として將來の滿州に於ける露國の一大都會たる一大策源地たる哈拉賓に到達するを得ん」

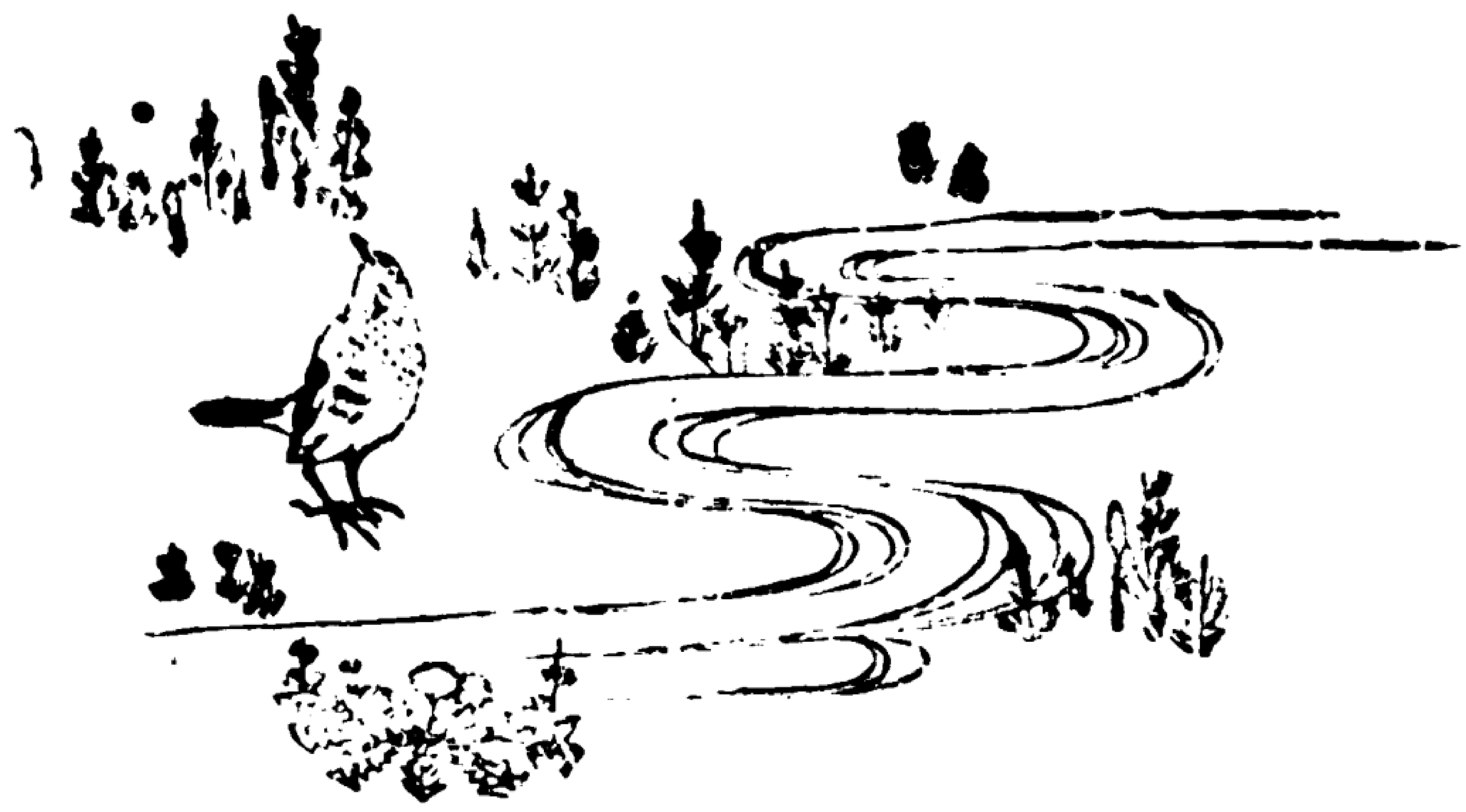
(三)イマンポより哈拉賓に至る　　イマンポ哈拉賓間は百六十ヨルストにして鐵道完備し滊車既に通行しつゝあるなり、一望開濶滿州の平野は蜿蜒たる岳に包圍せられ一低一高河川あれども大河の難處なく岳あれども巍岳高山の難處あるとなし滊車は此平野を往來し五フイト八インチの廣軌に九十ポンドの重軌道を布設し堅牢なる機關車は白煙朦々として材料人夫の運搬を爲し以て工事に便利を與へつゝあり、八ヶ所に設立せられたる停車場は堅固なる建築にして貯水池、倉庫園庭等此の荒漠冷々たる平野の裡に尤も注意すべき經營と云はさるべからず、線路の勾配は急勾配なる所數ヶ所ありと雖とも概して落成後の線路として動搖曲行等少きものゝ如し、イマンポより哈拉賓に至る八時間にして到達するを得ん

(四)哈拉賓の情況　數年以前に於ては寂漠荒凉の一塞村たりし哈拉賓は今や露國の勢威を光被せしめし以來駸々として進歩發達の域に登りつゝあるなり目下戸數五百餘戸に過ぎざれども數年の後に至らんか數万の戸數は軒を連ねて、一大都會を顯出するに至らんなり此地東清鐵道の中央停車場とも云ふべく西カイドロフスクより來る線路に對しては西部停車場を設立し東ニコリスクより來る線路に對して西部停車場の設立せらるゝあり、南方遙に旅順線路に對する停車場としては南部に設立せられんと欲す即ち哈拉賓は三方よりの線路に對し三箇所の停車場を設立し以て其中央停車場となるの位置にあるを見るユゴウッチ氏は五千餘人の兵士に司令官として、此地に駐在し工事の難易に應し或は中隊を派し或は小隊を派し又は分隊を派して是れに從事せしむスイフン、イマンポ間の工事は悉く是等兵士を以て從事せしめ嚴寒を物ともせず黑パンをかぢりチッカ酒に快を取り日夜營々として從事す彼等の蠻勇亦驚かさるを得んや、鐵工所の設立せらるゝあり鍛冶工二百五十餘人之に從事し以て鐵道工事に要する器械類を製造しつゝあり露人あり支那人あり朝鮮人あり騎馬の露士官あれば歩行の支那士官あり木造假兵營の十三ケ所にて滿州を併呑せんと欲する露兵士あれば石造不潔の兵營には天下太平樂なる支那兵士の蠢爾として眠れるあり、數千の人數万の各人種紛然雜然として在留す哈拉賓の盛賑なるも偶然にあらずと云ふ可きか日本人の在留者は凡そ三百餘人にして内婦女八十餘人を有す婦女は例の通り元金無用活殺自在の商賣に從事して、露人を擒縱自由にし八軒の板葺青樓は威勢哈拉賓の天地に赫々たり露人の好色なる土地を與へ家屋を與へて彼等の來らんことを希望す其來るや破顏細目御氣嫌を損せさらんとに汲々たる者ゝ如し故に日本人の利益は是等醜業者を以て第一と爲さるべからず大工あり石工あり是等は僅々廿餘人なれども日々二留又は四留の收入を爲し露人の信用又厚き者の如し、洗濯業五軒あり寫眞師一人雜貨商一人あれども彼等は資本少にして爲さんと欲すれども爲すと能はず只自營に汲々たるのみ、鐵道工事に從事する者あり其數殆と五十餘彼等は支那人、朝鮮人よりも信用せられ且賃銀高額なれば、漸次に增加するものゝ如し、要するに哈拉賓に於ける日本人は醜業者を以て第一とし大工、左官、石工、等は之に次くものなり、其將來の事業盛大なるに順ひ日本人の同地に在留する者日一日增加するに至らんなり」

（五）旅順方面及カイドロフスク方面の工事　ニコリスクより哈拉賓間に於ける鐵道工事の近况は前記の如し之れ其一班に過ぎずと雖も以て大躰を觀察することを得んスイフン、イマン兩間未成道路の如きも向後一年も經過せんか工事の落成期して待つべきなり、されば哈拉賓以東の鐵道工事たるや多少の難處なきにしもあらされども着々として成功の緒に就き其全通も意外に急速ならんか而して哈拉賓より旅順方面の鐵道工事如何を見るに、線路の側量は漸を以て確定せられ、既に路堤を築成したる處、凡そ四十露里にして軌道の布設せられトロック車往來しつゝある處凡そ十二露里なるを見るなり、數百の兵士人夫等は盛に土砂材料の運搬に從事し巖石を破碎し湝池を埋めコルベルトを作り土地の高低を掘採す、旅順方面の工事たるや此の如く未だ成功の運に至らされども線路平坦工事容易なるか故に着々として奏功せられつゝあるなりカイドロフスク附近よりも盛んに工事に着手しつゝありと云へば、此方面よりの工事も歩一歩進行せられ居るならんか、哈拉賓は松花江岸四ヨルストの處に在り、されば此方面より工事進行せしめんには先づ第一に松花江に架する一大鐵橋を成功せざるべからず、之れ當方面に於ける一大難工事と云ふべし、江幅最短なる處、凡そ二百餘間江水淡流砂質の岩底なりと云へば、橋柱工事コンクリートの作成も意外なる便利有ん、今や天寒くなりて、雪氷の困苦來りぬれば此鐵橋工事は明年早々着手することなり、凡ての材料組立も完備したれは、來六七月の候に至らば雄壯堅牢なる一大鐵橋は汨々たる松花江上に架せられ遠く之を望は恰も白龍滿州の平野に飛躍せるが如き壯觀を呈するに至る可し、而して鐵橋落成するに至らば此方面よりの工事は着々として、進行しカイドロフスク哈拉賓間の未成工事も次第〳〵に短縮するに至らんか

要するに世人をして歐亞一貫鐵道の將來を思考せしめ其東洋に及ぼす商業上文運上軍事上の結果を論せしめ或は怪物の如く恐れ或は菩薩の如く尊び幾多の想像幾多の論議を以て迷はしめたる西伯利亞鐵道東清鐵道の二大鐵道は數年ならずして首尾相應じ全身脈絡を通し以て世界に其影響を與へんとす西伯利亞鐵道に至てはチタ、イルクック間の工事は既に落成したり、而して東清鐵道上の近况は以上記する處の如し、吾人は次號に於て東清鐵道の東亞に及ぼす幾多の影響に就き更に

論し以て論者の參考に供せん（未完）



海外新潮

海外大勢

清國傳道問題の今後

凡そ此の問題ほど厄介なるものはあらざる可し彼の償金問題の如き、或は元兇處罰の如き元より至難の問題なりと云へども而も布教の問題に至りては更に一層錯綜せる難問題たらずんばあらず、抑も今回の事變たるや或は宣教師の行動にのみ起因するものにはあらざる可しと云へども尚其一大原因は此に存することは世人の等しく疑を容ざる所なり、巧にこれを解決して後患なからしめんことを期するは至難の業と云はざる可からず、今之に對する海外有力の言論機關が如何に之を論ぜるかを見ん英國のスペクテーター誌の所論に曰く

李鴻章は自今傳道を禁止し以て永く禍根を絶んことを希望し、歐州政治家の多くは其忠告を容れんとするもの丶如しと云へども他の職業幷に學術の輸入を認めながら獨り傳道のみ排斥せんとするが如きは決して有理の忠言にあらずと云ふ可し、…………要之耶蘇教の追放は實際に於て到底行ふ可らざるなり、之を安南の例に徴するも數千の耶蘇教徒は屍の山を築きたりしも而も追放者は遂に効て自由を失ひ追放を行ふの實力なきに至れり、故に曰く傳道禁止の問題は其可否を論ずるの價値なし、何となれば事實に於て不可行の議なればなり。

次ぎに吾人はサリスベリー首相の考案に對しても亦全然同意を表すること能はず、抑も此の意見は宣教師を以て全く法律保護の外に置き、布教こそ禁ぜざれ彼等にして敢て布教せんと欲せば所謂身を殺して仁を爲す可しと云ふにあり、この說たる其れ自身に於ては頗る高尙の思想にして古來其効驗著しく傳道者の血痕は即ち寺院の種子たりしと云へども今日に之を適用せんと欲するは不條理、不可行のことに屬す、何を以て不條理なりと云ふか、曰く凡て他の敎化に從事するものは保護せられ、殊に殺人の術を敎授するものも保護せらるゝに拘らず、獨り傳道者のみ保護の外に見棄てらるゝの理なければなり、耶蘇教の教理は支那人と云へども之を非認せざる可く、其道德の觀念に於ても亦支那三大教の一たる佛教と殆ど相合致せるを見る、加之又大に目下の情勢を考慮せざる可らず、今日に於て宣教者の保護を撤するは之れ恰も總督道臺の虐殺するに委するものに外ならず、必ずや一兩年を出でずして新十字軍の聲は四方に囂々たらんのみ、若又首相の意にして宣教者をして實際上支那に進入する勿らんことを期するものとせば其は大なる誤解なることポリ子シヤの例に徵して明かなり、

第一策第二策共に不條理にして不可行なりとすれば果して如何の擧に出づ可きか、吾人を以て之を見れば只從來の方法によりて進まんのみ、即ち宣教師を以て商人諸教師と等しく法律保護の下に置き、兩者の間に厚薄の別を立てざるにあり、而して若し改宗者にして謀反の徵あるか或は宣教師庇護の下に法網を免るが如きことあらば、歐洲諸國の例に傚ひて之を國境に護送し、駐在公使と相計つて相當の所置をとること理の當然なれ……………食人蠻族の宣教師を食ふは是非なしとするも、彼の恰も之を食することを勝手たる可しとの布告をなすが如きは斷して不なりと云はざる可らず。云々

獨乙のフォンブラントの所見は大に之と趣を異にする所のものあり此に幷せて其大要を紹介せん、抑も余輩が屢々氏の說を引用する所以は氏は東洋の空氣を呼吸せることと三十有三年清國に駐在すること十八年の長きに亘り頗る內地の事情に精通し從て其說く所亦卓上の空論にあらざればなり。

氏は先づ清國に於ける英米の宣教師が國事に關涉して却て其本務に障害を招くのみならず、引て外人一般に不利を及ぼすに至るを非難し千八百四十八年の亂にライド及びリチャードなる二人の宣教師の謀議に興れるを指摘し太平の賊以來清國政府の常にプロテスタントの宣教師を忌憚せることを述べ、更に宣教師の支那に於て不評判なる所以を尋ね、彼等が日常生活の放肆なるを難じ、支那婦人の白人と大に其地位境遇を異にせる所以を辨じ、又清人の蠻性を說き、未婚の男女が一所に生活する光景は大に清人の誤解を招くの恐れあるを說き、最後に今後の方針に及べり氏も亦耶蘇教の社會的地位を尊重するに於ては敢て前記のスペクテーターと異なることなく、只從來布教なるものゝ徒らに分量を重じて性質を顧ざるを非難するものに外ならず曰く。

一度び虐待の始まるや宣教師は直ちに立ち去るの止む可らざるは從來の宣教組織の一大欠點なり、宣教師たるものは宜しく依然として居留し、教徒と善惡共に其運命を共にせざる可らず、さて然かせんと欲せば勢ひ其活動の範圍を充分なる保護の及ぶ所に止どめざる可からざるべし、此に於てか余輩は獻策せん、須く吾人の布教は之を條約港并に其附近の地に止め、內地の傳道に至りては之を改宗清人の手に委す可し、若し清人にして果して教ゆ可きの人種なりとせば、此方法に從ふこと六十年にして十分なる改宗清人を得ん、……………策果して此に出でんか列國は間斷なく劍を手にして宣教師の後に從ふの煩を免れ、列國

對清關係の從來の如く動もすれば危殆に陷り、引て世界の平和を亂さんとするの弊を避くることを得ん、宣教師或は耶蘇の語を藉りて云はん「汝往て凡ての國民を敎へよ」と、然れ共余は獨り怪む、彼等は何が故に等しく耶蘇の敎なる左の二句を記憶せざるか、「を汝を拒み汝に聽かずんば則ち去れ」、又「この市に於て虐待せられなば他の市に逃れよ」

更に氏は本問題の或は新教或は舊教等の特別の利害によりて決す可きものにあらざるを辨じ結論して曰く

本問題たるや實に砲火と刀劍を以て再び耶蘇教を輸入し兵火に罹り掠奪せられたる荒野に十字の旗を樹つるや否やの別るゝ所なり、而して余は文明及び人道の名に於て大喝一聲「ノー」と叫ばん。

地峽運河ニカラガ線とパナマ線に就て

スエズ運河の開鑿は十九世紀に於ける一大偉業にして運海通商の發達を助長するに於て至大の効果を及ぼしたることは既に世人の知悉する所また多辯を要せざる可し、中央亞米利加を切斷して大西、大平の兩洋を連結す可き所謂地峽運河なるものも、亦スエズ運河の成功によりて天下に偉名を博したるレセップ氏の設計し着手したる所なりしも、不幸にして中途に蹉跌し、荏苒今日に至れるは深く世人の遺憾とする所なり、合衆國政府は以來深く此に留意し委員を設けて之が調査に力めたりしが今や右委員は調査を了へ復命に及びたれば今期議會に於て其決定を見るに至らんか、

調査委員の意見によれば私設會社との紛爭を避け、永く運河を支配するに於てニカラガ線を撰擇したるものなり、即ちパナマ線に對する意見に曰く、

パナマの地たるコロンビヤ政府に於ては巳に運河會社に對し頗る長期に亘れる獨占權を讓與せるを以て從つて合衆國に對し必要の權利を讓與するの自由を有せず、先づ運河會社と協商を遂げざる可からず、委員の見る所を以てすれば斯る協商は到底成功の見込なく、會社は合衆國をして一部の株主たらしむ可しと云へども、其特權を擧けて讓與するを欲せざる可し、之に反してニカラガ及びコスタ、リカにありては未だ何等の權利をも讓與したることなきを以て合衆國は之と協商を遂げ所要の特權を得ること難からず云々、

然りと云へども、他の關係に於てはニカラガ線の利便は甚だ大ならざるが如し、大西大平兩洋に於ける海港間の距離はパナマ線よりもニカラガ線に於て短しと云へども、運河通過の時間は却て長きを要するなり即ちパナマ線にありては小數の水閘、小度の曲折を以て足り、約十二時間を以て之を通過することを得可しと云へども、ニカラガ線にありては凡三十時間を費すにあらざれば航行すること能はざる可し又ニカラガ線は帆船に便にして四周の發達に利ありと云へども其工費は約二億五十四弗を要しパナマ線の一億四千二百三十四万二千五百七十九弗に比して遙に巨額なり、然るに調査委員が全員一致を以てニカラガ線を撰擇したる所以は一に前記の煩累を避けんがために外ならざるなり。

然り而して米國輿論界の評論は線路及び工費の問題よりも寧ろ運河支配權の上に集中せるものゝ如し、大統領は今回の教書に於てヘー、ポンスフォート條約を推擧し以て彼のクレートン、ブルワー條約より生ず可き紛爭を避んとするものゝ如し、抑もヘー、ポンスフォート條約は平時たると

戰時たるさを問はず等しく列國に向て同一條件の下に之を解放するの條項を包含するものなり、此點に關しては共和民政兩黨の新聞紙の攻擊頗る盛なり、ニユーヨーク、サン(共和主義)は曰く

聞く所によればヘー、ポンスフォート條約にして全然批准せらるゝにあらずんばヘー氏は斷然職を去らんさするものゝ如し、若し果して然らばヘー氏をして去らしめよ而して十九世紀の大部を通じて我施政の第一原則たりしモンロー主義をして二十世紀に存續せしめよ云々、

更に民政黨の機關たるニユーヨーク、ジヤーナルの評論を見るにまた之と大差なし即ち

ヘー氏の出づるまではクレートンの名は米國外交の干潮標に立ちつゝありしも之をヘー氏に比せば恰も一大政家たるやの觀あり、蓋しクレートンは少なくとも歐洲諸國を誘致して純然たる米國の問題に容喙せしめんとは企てざりし也云々。

英國に於ける國防改良の聲

英佛の人口比較は前號に於て之を示せり、即ち佛國の人口は大英國の約十分の一にして英本國の人口と殆ど伯仲の間にあり、然るに今其國防を見るときは佛國は五十万の現役を有し、即日之を戰鬪に投ずることを得可く、又二百万の練兵は數日にして召集に應ず可く、更に少くも同數の古兵は以て國防の用に供することを得可きを以て、佛國は一旦外寇あるに際しては二十歲より四十五歲に至る訓練兵士約五百万を得るの都合なり、然るに英國に於ては却て平時にありては僅かに二万五千の愛蘭人と七万五千の英蘭人よりなる約十万の兵士を存するに過ぎず、現に南亞の戰爭は正式兵士幷に義勇兵の殆ど全部を吸收し、一時を彌縫せんがために俄造りの義勇兵を配布して僅かに要塞等を充したるなり、英國の義勇兵幷に民兵中有効のもの少からずと云へとも、之を以て佛國其他强制徵兵法を布ける大陸諸國の豫後備に比す可くもあらず、英國々防の主腦は元より其海軍にありと云へども而も機會の如何によりて佛國陸軍の英國々士に上陸する無きを保せざる可し。

眞想既に此の如くなれば國防改良の聲は英國政治社會に於て漸く盛ならんとす、サリスベリー首相は總撰擧の後十一月九日倫動市長の招待會に於てせる演說中に曰く、南亞及び支那に於てクルーゲル幷に西太皇の政府は迷信に驅られ感情に制せられ、暗愚の忠言に誤られ遂に無謀の戰端を開きたるを見れば我隣國にして或は斯る暴擧に出するものなきを必す可らず云々」と之れ明かに別頃記載のクルーゲル歡迎の際に於けるナショナリストの示威運動を指せるものにして、同時に軍備の改良せざる可からざるを表白せるものなり、蓋しルーベー大統領、ヴァルデツク、ルソー內閣の下に於ける佛國は英國と干戈を交ゆるが如きこと無かる可きも、而かも政界に如何なる反動起りて英國を敵とすることなしと云ふ可らざるを以て、豫め之れが備を爲さんと云ふにあり、然り而して英國自由黨未來の首領として公認せらるゝロード、ローズベリーの所見も亦之れと大差なきもの丶如し。

海外雜纂

獨逸文士の境遇

窮狀は獨り我國のみに非ず

文士の地位改進の聲は各國を通じて盛なり、英國に於てもサーウォルター、ビーサント主唱となり、文學者幷に新聞記者相連合して一定の組織を立て以て書肆に當り著述の日に商賣的に流るゝの獘を矯めんことを期せんとす、今露都新聞ノホエーヴレミヤの伯林通信を見るに獨逸の記者、著述家の窮境は實に憐む可きものあり、工業は長足の進歩をなし教化の度は頗る高く加之文學各科の活動は暇々として復古しつゝあるに拘らず文士は赤貧洗ふが如く常に屈して獨立し得ざること實に想像の外に出で他に其比を見ざる所なり、

右通信は獨逸文學社會に一も共働相助の行はれざるを説き、其經濟事情を說明して曰く、

其第一の原因は全く書肆のために利用せらるゝにあり。加之有名なる著述と云へども購讀者の範圍頗る限定せらる、蓋し獨逸語は國境を出でゝは墺太利及び瑞西の一部に行はるゝのみなれば、國外の需要は殆ど皆無の姿なり、且つ獨乙に於ては富者の階級は頑固なり無學者なり、他國に於ては富者は例へ讀書家にあらずとするも少なくも書籍の購買者なり、然るに獨逸に於ては富者は書籍に就きて一も趣味を感せざるなり、中流社會は好で讀書すれ共之を購ふことをなさず、蓋し回覽書庫（サーキユレーチング、ライブラリー）多く一冊の書物は以て數千の讀者を滿足す可く、著書の評判は廣まれ共著者の收入は更に增加することなし、又近來新聞紙は次第〳〵に著書の代用をなすの傾向あり、

脚本にして場に上るものは最多の報酬を得るものなるも、其然からざるものは殆ど無報酬なり、ハウプドマンのサンクン、ベルは希有の例外にして版を重ること四十回に及びたり、其他は最も評判の脚本と云へども一万五千圓以上を得ることなく、平均の收入は頗る小額なり、極貧又は饑渴は戯曲作者にとり敢て珍しからざるの運命なり、現に最も優美なる近世戯曲作者の一人たるシュラーフは饑渴のために喪神したるにあらずや、

小說家の境遇に至りては更に憐む可きものあり、第一流のものと云へども單に著書の收入に依ては生活すること能はず、必ずや他に別途の收入を求めざる可らず、多くの小說は寫字料よりも安價なる原稿料にて賣らる、シュピールハーゲンの如きは例外なり。社會民政主義の記者は多くの收入あり現にベベルの如きは婦人問題を論じて產をなせり……若夫詩歌に至りては半文の報酬なきのみならず、發行者に向て印刷費を支辨せざる可らず、實際昨年に於て最も評判の詩人のために公衆の義捐を募るの止む可らざりしことありき、

新聞記者の收入も亦異なることなく、有力なる記者の收入も、大抵二十五圓位にして主筆記者も百圓を出でず、只二三の例外あり、即ちクロイツ、ツイツングは政論記者に一万五千圓の年俸を與へ、ケルニッセー、ツァイツングは一万圓を與ふと云ふ。

同通信は更に附記して曰く事情此如くなれば文士の間に不平の聲起り、一定の組織を設けて書肆に對立し以て其の待遇を改めしめんとするは理由なしと云ふ可らず云々、譯し來て他國の事と覺えざるものあり、獨逸語よりも猶狹く尠き版圖を有する我國文士の窮躰を聞くは敢て無理ならぬなことなり、

歐埃米塵

暫く本欄に途斷へし「世界の塵」の續稿なり本號より又々揭載を始む

（兼山）

◉紀元　前、四十七年は歷史ありて以來一年の日數最長かりし年なり、

則ち一年の日數四百四十五日、ジュリアスシーザーの命令にて暦を調へん爲め引延したるなり

◎世界の暦、約四十三種、其中最も煩雜なるはメキシコの暦とす、一年間の日子各特別の名有り

◎英國國會の最も短期なりしは千三百九十九年の十二月三十日、開會僅に半日、リチャード二世に依て解散せらる

◎國語の新聞紙に顯れたるもの現今五十九種、其大多數は一新聞に二個三個の國語あり、只勢力ある國のみ自國語の外に他國語を混へず、例へば英國の新聞の如し、我國の新聞英獨文の混入せるは忌はしき兆なり、

◎バイブルは、有ゆる國語に飜譯せりと誇稱するも、世界には猶其一章一行だに譯せられざる三百種の言葉ありと知れ、

◎セントヘレナ島は宗教上世界第一の小教區、全島僅に三人の法教師にて獨立教區を形作る、

◎西班牙に二百五十五年前に用ひ初めて、今猶流通せる銀貨有り、現行通用の銀貨中の年長者

◎三十五年前、英國にて初めて婦人にして專賣特許を出願し許されたるもの一人あり、五年前には已に三千人の多きに上る

◎龍動の一日間給水量、一億七千五百十四万九千一百八十八ガロン、其中九千万ガランはテムス河よりし、他は井等よりす

◎同じく龍動の街の長さ全躰を一直線に延長せば米國大陸を橫斷してニューヨルクより桑港迄達し、又龍動より露都セントペテルスブルフ迄達すべし、

◎十九世紀一百年間ロンドン市內の人口は三倍となれり

◎露宿人每夜六千人、これ龍動の實況

◎火災の數、龍動に於ては伯林と巴里を合したるよりも猶多し、龍動消防夫は每年百人の生命を九死の中より救ふの比例なり

◎伯林の消防夫は最も間の拔けたるもの、何となれば先づ一所に集り指揮官の號令にて火事場に繰出すを以てなり、これが爲に少くとも三分間を徒消す

◎英國は海岸線十四哩每に一個の燈臺又は燈船を有す、世界第一の燈臺國なり、

◎郵劵英國にては千八百四十年より、北米合衆國にては千八百四十七年より使用を始む

◎都府の最も淸潔なる空氣は何處にても道路の表面より二十五呎の高度にあり、それより低きも高きも共に惡し、故に歐風の家屋にては三階日本流に云へば四階のところ最も健康に適す、

◎人は夜食の後の時間が一日中に躰力最も強健なる時と稱せらる、之れより漸次躰力を減じ、夕方又少しく增加し、夜は減却す

◎蛙は口を開きて呼吸すること能はざるの動物なり

◎鷲は瞬せずして太陽を正視し得

◎獅子の成長せしもの平均の重量五百封度

◎蜘蛛は其形の比較よりして云はゞ獅子より七倍强し

◎海豚は魚類中速力の大なるもの、時として一時間二十五哩を走る、

◎南米には河生の海豚（リバードルヒン）と稱するものあり二百二十二個の齒を有す

◎各動物館の中龜の比較的大なるを有するは龍動のそれなり甲の長さ四呎七吋、幅二呎十吋

◎比目魚、には二百の種類あり

◎海綿の從來採取されたるもの丶中六年前フロリダのビスケー灣にて得たるもの最も大なり周圍五呎六吋

◎ラブランド人身長の平均五呎、
◎印度人は著しき少食人種、大多數は一日一回の食事にて濟ませり
◎猶太人一千一百万人、其一半は露西亞に住す
◎ニューヨルクには富豪倶樂部なるものあり、身代一百万圓以上に非れば入會を許さず
◎海藻は晴雨計の代用をなす、晴天には水面にある部分乾き且つ汚れたるも、雨の前には濕りて膠質を帶び來る、
◎南太平洋には海藻の時に三十或は四十吋の幅にて二百呎以上の長さを有するものあり、これらは海水中より滋養を採りあらゆる部分より吸收するを以て、世人の云ふ如き根を有せず、
◎蘭科植物は非常に乾燥なるところと氷地を除ひて世界の到處にあり、其種類五千に上る
◎植物學者の以て最小の花とする酵母の花は顯微鏡の下にて精密に計れる結果、その多くは直徑一ミリーメートルの百分の一に過ぎざるを知る
◎楓樹に就て一の不思議あり、その含利別（シロップ）を採るに良質のものは必ず其楓の樹てる北側より得らるゝも、その分量少く、南側よりするものは分量多きも質の惡きこと是なり
◎若し太陽を六十呎の厚さを有する氷を以て包みたりとせん、太陽熱は僅に一分間にこれを融かし得
◎圖書館の世界第一とせらるゝロンドンブリチッシュ博物館中のものには瓦、石、蠣殼、骨片の書籍あり、寫本中には木皮、象牙、獸皮木片、銀、鐵、銅に書せるものあり
◎パピロシの舊蹟より近世發掘せられたる高價の金剛石四十二個あり、多くは未だ彫琢を經ざるものにして、中には一方又は二方丈け琢きたるものあり
◎亞弗利加のマダガスカルより印度に至るまでの洋中小島の數一万六千個あり、その中僅に六百のみ人の住居せるを見る、氣候産物悉く人間住まへるに拘らず
◎墺地利は列強中少しも海外領地及び殖民地を持たぬ國なり、
◎電信の最長距離は英領コロンビヤよりニューヂーランドまでの線とす
◎道路を平坦にする機械は一千八百三十五年初めて英國に用ひらる、それに蒸氣を用ゆるは佛人の發明に係る
◎砲彈の達し得る距離今日のところ十五哩と少許を以て程限とす、
◎煙突の建築は最も困難なるものなり、世界第一の技手が如何に法則通りに依るも二個同一の煙突を作り煙の出工合等に同一の結果を生ぜしむるは至難の技術なりとす、
◎七十年間生きたる人は一代に心臟を經過せる血液の量六十七万五千九百二十噸に上るべし
◎人躰は大氣中にて二百十七度迄の熱度に堪へ得、若し數分間ならは三百九十度迄抵抗し得
◎暗夜は白色の光最も遠距離まで明瞭なり、

クルーゲルに對する歐洲各國の感情

前のトランスヴァール大統領クルーゲル氏は廣く世人の同情に訴へ、各國政府に哀訴し平和會議決議の仲裁々判を求めんが爲に、老躰を励まし

て遙々歐洲に向ひ佛國に於て最も盛なる歡迎を受けたり、

●佛國　の各新聞紙等しく之を稱揚し、只昨年英國のために買收せられたるフ、シエクルの例外あるのみ、アンリ、デウーは各新聞を代表して左の如き挨拶をクルーゲルに呈したり

佛國新聞は其懷抱せる政見の如何に拘らず、凡て君の採れる熱心なる情量に同情を表するものなり、自由國の人民は凡て君が自由の爲にせる勇敢なる抵抗に感激せざるなし、佛國は古來自由の爲めに幾回の辛酸を甞めたるものなれば君が爲に同情を感ずることも亦勢ひ最も深からざるを得ざるなり、吾人がブーア人に同情を寄する所以も之れ即ち正義に組するものに外ならず、此に吾人は君を歡迎すると共に君が天賦に依て其使命を全ふせんむことを祈る。

●英國・　の之に對する英人の感情は如何龍動發行のセントジェームス新聞の論ずる所を見るに、

前にプローウィッツの說明せるが如く今回の示威運動たる全くヴァルテック、ルソー內閣攻撃のために企圖せるものに外ならず、佛國社會は當初より南亞事件の眞想を誤解せり、去れば彼等が正道の爲に戰ひて敗れたりと誤信するクルーゲルの爲に同情を表するは少しも怪むに足らず、クルーゲルの歡迎吾人に於て何かあらん、彼の去ると共に彼の名も亦直ちに歐洲社會より忘られんのみ云々

然りと云とも佛國に於けるクルーゲルの歡迎は英國の惡感を起したり、初め佛國政府の彼が入國を拒否す可きを期し、次ぎに例へ之を容過するとありとするも必ずや一個人としての彼を接待するに過ぎざる可しと考へたり、然るに却て一國の元首として優待せられたり（嚴格に云へば微行なるも）、而して英國の新聞は斷乎として他國の干 渉を容 さず と云へり、スタンダードの所論に曰く

マルセーユ、リオン、巴里等に於ける模様の如何に頓着なく南亞の經營は之を遂行せざる可らず、若夫佛國にして其名に恥づる勿からんことを欲せば今少しく愼重ならざる可からず、彼等にして彼我の地位を轉倒して之を考ふれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。

●和蘭　今轉てアムステルダムに於ける評論を見れば

佛國に於ける歡迎を見れば何人と云へともビスマルク自らも一籌を輸せることを自認せる南亞の大外交家が無爲に了る可しとは殆ど想像することと能はざる可し、抑も其目的とする所は仲裁々判を求むるにあること已に氏の表明せる所なり、若し夫れ一度仲裁々判に附せられんか其裁決の如何は少しも憂慮するに足らずと云へとも、惜む可し氏は實力の後盾を有せず、蓋し何れの國と云へとも英國と干戈を交ふるの覺悟なくんば氏の後援たること能はざるなり、然りと云へとも又全く望無きことにはあらず、佛人は尙昔ながらの多感多血の國民なり、他國人のなす能はざる所も尙敢てするの勇あり云々

●獨乙　の評論は更に激烈なるものあり、普魯西に於て文武官十分の九を出しつゝある同國地主の機關たる獨乙日々新聞は曰く

聞く所によればクルーゲルは伯林に來る可しと云ふ、吾人は氏の來らざることを請ふものなり、氏も亦前の委員の如く入國を拒絕せらるゝことなしと云ふ可らず、吾人は氏が吾人をして前日の恥辱を再びすることを免れしめんことを切望して止まざるなり、吾人は今彼れ老雄の面を仰ぎ見るに忍びず、何となれば彼をして今日の窮境に陷らしめたるは之れ全く吾人の罪なるを知ればなり蓋し獨乙にして英國と彼の秘密條約を締結することなかりせば、チェンバーレンと云へとも自由民の討滅を敢てすることなかる可し云々。

蠶の競爭物興る

蜘蛛絹の發明

此新工業はアラチイカルチアと稱せられマダガスカルに於て佛國殖民人の發明したる所なり、未だ頗る幼稚なれども面白き歷史を有せり、初め蜘蛛の糸を如何にもして利用せんとて種々の試驗をなしたるが、佛國人にして宣教師たるカンボー子氏の熱心によりて遂に成功することを得たり、之に用ふる蜘蛛はハラベと名けられ甚だ見惡き黑色のものにしてイメリナに增殖し、樹木に寄生して肉食をなす、其增殖力は頗る盛なり、氏は之を捕へてマッチの箱に入れ、靜かに糸を引き出し之を手車にとり時に五百ヤードの長さを得たり、而して氏は遂に左の二項を確めたり、即ち第一卵を生みたる際に於て最も多くの糸を得ることと、第二、同一蜘蛛を故障なく每月二回或は三回使用し得可く其產量約二千ヤードなることを確めたり、この試驗はタナナリボに於ける職業學校の校長によりて繼續せられたり、然れ共之に機械を應用するに至れるは全く同校教授ノグエ氏の力なり、此機械は甚だ微細にして之を說明することは難きも之によれば其の速度は手車の比にあらざるなり、同校の女生徒は每日其傍なる公園に行きて三四百の蜘蛛を捕へ來り、ノグエ氏は目下二十二万ヤードの供給を有せり、タナナリボに於ける各店の平均產額は一ヶ月四万ヤードなり、此蜘蛛は糸をとりたる後には再び凡そ二週間公園に放たる、一回每に三百五十ヤードの糸を出し、其產糸力は蠶の六倍より七倍の間にあり、所謂蜘蛛絹は普通の絹に比して頗る細微なりと云へども、其持續力は却て大に優れり、其色は黃金の如く、何等の手數なく以て直ちに織ることを得可し、之れ或は未來の絹布なる可きか。

詞藻

印度洋舟中雜詩

藤島膽岳

竺海茫々一望平。不知何處是東瀛。孤帆欣舞鯨鯢躍。
驟雨滂沱霹靂轟。五六月前曾過路。八千里外欲歸情。
今年兩度苦炎熱。又向紅輪直下行。

自別家山月七周。東歸今日有孤舟。曾迎聖骨南方國。
又試壯遊西半球。天吐彩虹橋萬丈。風跳白馬浪千頭。
航程始到平分處。便是竺南獅子洲。（錫蘭此云獅子）

亞丁東去海茫々。瘴雨蠻烟炎又涼。一萬二千三百里。
西從龍動到扶桑。

八千航路向東關。怒浪掀船吼百雷。竺海不同官海險。
輕風微雨送涼來。

亦是直寫眼前之景、驚魂駭魄、筆有生氣、如字句瑕疵、不問而可也、源清蔭北樞紀行、得好敵手、

辛丑新年

小野湖山

汪洋東海曉。晴旭照初晨。韶運超前古。文華恰此辰。
比年豐熟後。四野太平民。皇漢地雖異。輔車勢作隣。

萬姓苦塗炭。天子倘蒙塵。休讀新聞紙。讀來春不春。

先生去年罹大患、朝旨班五位、而二豎屏息、康健如昔、壽躋米字、詩雄倍豪、此篇滿目時事、慷慨淋漓、確是辛丑新年之作、不可移易、可以當詩史、與金粒塗澤、徒貪談辭者、不可同日而語也、

漫遊雜詠（中）

源　清蔭

北溟

象緯高々坤軸極。片帆直指北斗北。雲霧冥濛藏神怪。
氷雪長留太古色。驚看劫火燃大千。海中々夜生旭日。
波濤洶湧海若狂。帆索吼空寒飈疾。誰歟喚起李青蓮。
光焰萬丈揮健筆。

氷洋船中

十年遊跡夢茫々。世上任他呼做狂。九萬鵬程半將盡。
一帆衝雨度氷洋。

遊氷洲

巉岩直立半傾頹。劈破山根一道開。日暮溪橋車馬響。
也知探勝遠人來。

奈翁廟

覇略一時驚鬼神。王棺空瘞濟河濱。天生英傑豈徒爾。
列國文華從是新。

白耳義

列强相議定封疆。却卜時機說列强。二世君王謀慮密。
南阿別建自由鄉。

有人云、詩人之詩、不足讀、書家之書、不足觀、余誦作者之詩、乃知其言之不妄、

世路

閑止園主人

世路起風濤。欲行頭屢搔。孤吟閑把酒。岳影當樓高。

早梅

臘裡洩春意。幽香滿水隈。看他耐寒力。竟占百花魁。

自畫竹

久濶東山竹。壁中獨浩歎。一枝閑貌取。自作故人看。

題梅花卷後

香霧透簾幃。夢魂清似水。戛然鶴一聲。月落梅花裏。

菊花

露重將傾倒。幽姿不要扶。何人縛枯竹。徒爾費工夫。

菊竹二詠、自饒雅趣、可以覘作者襟懷、

懷弟

元田南豐

鄉書只報竹平安。念爾窮年生計難。長記故山淹滯日。
對床風雪一燈寒。

東坡憶子由云、雪堂風雨夜、已作對床聲、子由亦云、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城、友愛之篤可想、此詩亦然、

自繪島至藤澤途中　梅原龍北

行盡湘南汀又汀。醉歌侵曉影伶仃。春星的皪梅花白。
野水潺湲芹影青。寺在烟中飛一聲。路通山腹到孤亭。
風光步々都如畫。十里行程杖屢停。
一路白砂吟步遲。湘南晴旭欲升時。鷗汀鴨渚水如綺。
霧鬢烟鬟山入詩。駐杖先尋藤澤寺。隔波重望辨天祠。
故人住在亂松底。隱々書聲出講帷。于時藤井愛梅避寒在藤澤村

吟詠自適、流連勝地、世間何物、比其得意、況才情發洒、矢口成章乎、欽羨々々、

友人某喜誦韓柳二集即賦贈　水本迂堂

六朝以上鳳飛去。兩宋而還蛙亂鳴。柳子闡幽窺造化。
韓公振氣感神明。西山頑石亦靈活。南海惡魚猶震驚。
若以二人爲典則。何憂筆墨不成名。

亦是一部文話、讀去不覺爲韻語、

贈藍山人　藍川隱士

花朝君訪我。月夜我尋君。買酒君招我。煎茶我請君。
論齡君減我。講學我輸君。君也雖忘我。我應長憶君。

疊韻寄雲颯止水拙軒松堂四老

五平五仄躰倣梅聖俞

碧澗種萬玉。香雲濛無涯。雅客遠問訊。喞杯俱酣嬉。
說道舊太守。停轅青山陲。始識此勝概。琴樽相追隨。
勿翦又勿伐。槎枒枝連枝。樹下有四皓。團欒拈霜髭。
唱和興正旺。高吟振嶺崎。暮色至自遠。風寒綸巾欹。
下岸放一棹。清流浮爪皮。素月照水面。金波光迷離。
髯鬚羽化客。童顏龐眉垂。矍鑠錬道骨。凌虛遊瑤池。
俗子豈許伍。高風終難追。試誦白雪賦。篇々皆清奇。
聖代足樂事。風流如斯稀。愧我賦命薄。窮居無人知。
矯首望萬里。參商遙相思。勝地不可到。春風空吹衣。

送藤井學士游歐洲　一雨道人

踏斷大陸事尤快。歷覽群國氣倍豪。此行好報平素志。
孤錫跋涉何言勞。鵬翼高張日邊路。雲濤拌々魚龍怒。
水聲三千一瞬耳。殊域繁華吹春煦。」碩儒森成林。新學
競研尋。精微通物理。高遠入天心。」君不見我有大雄氏
遺敎。十方六合均籠罩。光明未被碧眼兒。生死海中徒
騰踔。」傳彼新學別有人。弘我遺敎君其勤。遙期五百餘
年後。歐山普放瑞花薰。

字句未經彫琢、然意自暢達、

俳句

松の内

四方太選

居酒屋に輪飾かけて松の内　禿牛
探し出す双六盤や松の内　春光
美しき妻持つ人や松の内　一堂
床の間に梅を活けてや松の内　香谷
床の間に具足飾るや松の内　晁生
玄關をあけはなちたり松の内　一泉
職人の法被新らし松の内　八溪
晝過の雪となりけり松の内　長骨子
日當りの書院の梅や松の内　秣水
猿曳も萬歳も來て松の内　啞子
松の内若き女の打集ひ　仝
萬歳に酒を飲ますや松の内　設松
袴著て行きかふ人や松の内　仝
福壽草のさかで過ぎけり松の内　松濱
梅活けて蕾かたしや松の内　仝
占の本を買ひけり松の内　嚴子
月琴を習ふて居るや松の内　仝
注連張らぬ万年町や松の内　吐霓
常盤津のさらへの會や松の内　仝
松の内降りの娘美しき　輪月
美しき雛の番ひや松の内　仝

打連れて伊勢參宮や松の内　秋子
猿曳の今日も來にけり松の内　仝
松の内出入の大工來りけり　六郎
朝々の郵便うれし松の内　仝
ちら〳〵と雪降る宵や松の内　一村
温泉の宿にかるた遊びや松の内　仝
さびれたる侍町や松の内　紫
物乞ひを門に叱るや松の内　仝
仕事場に疊敷きけり松の内　吾空
松の内朝から飲でゐたりけり　仝
足とめる姫路城下や松の内　洋々
福壽草の咲きたる數や松の内　仝
にぎはひの廓に入るや松の内　耕村
借りて著る兄の羽織や松の内　仝
店先に下手な將棊や松の内　仝
松の内脫ぎしはれ着を假だゝみ　方公
物賣の聲めづらしみ松の内　仝
氣に入らぬ叔父も來るや松の内　仝
松の内人を集めて馳走事　天風
懸想文買ふもうれしく松の内　仝
松の内雪のふる日を歌かるた　仝
松の内よき衣を着て遊びけり　柳家
松の内いさゝか酒を飲み習ひ　仝
錢湯の朝にぎはし松の内　仝
門を掃く朝な〳〵や松の内　稻青

松の内女に混り遊びけり　稲青
銭湯に二度行く妻や松の内　仝
他愛なき遊びもしたり松の内　眉月
松の内頭重たき二日酔　仝
著飾りて來る乙女や松の内　仝
年玉のかず〲うれし松の内　時雨
松の内絹の衣紋の袖だゝみ　仝
取りかふる和琴の糸や松の内　仝
大和路に二日の旅や松の内　仝
高髷を結ふてめでたし松の内　紫溟郎
松の内も殘る一日や歌かるた　仝
着飾りて思はれ貌や松の内　仝
年かくす若づくろいや松の内　仝
松の内四五日風邪に籠りけり　寒櫻
火燵して今日もかるたや松の内　仝
舞鶴の火燵蒲團も松の内　仝
蓬莱の荒れて久しき松の内　仝

紙鳶　二月十二日まで
苗代　三月十二日まで
十句を限る

雜錄

俗禪放言（續）

土屋元作

二、公案か考案か

普通一般禪學を學ぶものは恭しく師禪を三拜して公案を授かり、閑室に胡坐をかいて眼を半眼に開らき、鼻と臍を齊うして暫くは其工夫に餘念なく、軈て何か悟る所ありと云ふ顔付きで師匠の部屋に尋ね行き恐る〱見解を呈する、すると其師匠と號する蛸坊主乃至兒雷也が仔細らしく之を批判し通すとか通さぬとか云ふて如意を振廻はしたり頭を撫でたりする、修業者はそれを無性に嬉しがつていよ〱坐禪に凝り固まり三年五年乃至十年二十年朦々として此の世を送り、或は其間に所謂公案をすつかり上げて免許皆傳大悟徹底誰某の印可を得たる禪學者は我なりと自慢する、是れ抑も何事だ雅禪の本意果して此に在りと云はゞ小生等俗

禪の一黨は復を抱へて大笑せん、山來公案は考案に非ず、其本義は裁判所の卓子即ち是非曲直を審案するの具なりと云ふ、語を換へて形容すれば閻魔の廳に在る淨玻璃の鏡の如きものにて、學人の見識を之に照らし。大小深淺を鑑別するに便せんとて古の坊主が假に製造したる道具なるを、何時考案と取違へたか、凡そ禪學の生徒たるものは必ず之を工夫すきものと定まり、師匠も疑はねば弟子は尙更無我夢中、貴君は何、私は何、手前は最早や難透に掛りましたそれは結構、僕は僅く昨日無字を授かつた斗りなど小娘が三味線の稽古に髣髴たる有樣は全躰是何事ぞ向上の一路は千聖不傳授かるの授からぬ透る透らぬの沙汰は全躰何を授け何を透すのか、俗禪頓と合點參らず、昔黃檗が大聲に師なし師なしと怒鳴つたことは雅禪黨の金科玉條と尊崇せらるゝ圜悟禪師の碧巖錄に註まで添へて出て居るにあらずや、ソレに何ぞや此廣い世界に靈妙の心を持て生れながら、人に頼らざれは禪學が出來ぬかの如き迷を抱き、世を捨鉢の蚓入道を有難そうに擔ぎ回り、古本の中にある古文句、數百年前の古人の話頭、御好きとあれば何人でも御勝手に御工夫の出來るものを勿躰らしく授けて貰ひ、悟つたとか悟らぬとか或は不思議の効能を喋々し、我師の如きは海に千年山に千年坐禪の功を經たる大聖人なるが故に我々の入室する足音を聞いて早や既に透未透を知らるゝなうな、イヤそれ所か師匠の聖人は生死自在唯今でも都合次第で直ぐに息を引取らるゝそうなゝんど化物屋敷の下馬評定に似たる囀咄し看々臘月の盡くるも知らずとはあまり智惠のなき次第ならずや、生死自在は暫く置き彼の喧ましき大死一番、是が抑も氣に食はぬ言草なるに、中には之に付するに見性の名を以てし珍重至極と心得る人あり、見性の見字は主觀と客觀相對したる場合に限れり、大死一番我、々を忘れァ、と面食つた其時に何の性躰が見へて溜るものか、且夫れ、と四角張つて論ずれは茶を飲み靜坐して氣を取鎮め蛙が定に入つた樣に身を持して居れば觸感の働き殆ど皆無くなり、自から精神のブランク（素白）を致すは當然至極の順序にして、其反對に大酒を喰ひ向ふ鉢卷でカツポレか何かを踊るときは精神大に興奮していろ〳〵な念慮を起すも亦極りきつた次第なり、前が大死なら後のは大活とでも名付けざる可らず、凡眼看來れば唯是れ二心の動靜に外ならず、其動く時に沸湯點を超ゆることあれば靜かなる時は無論氷點以下に降ることある可し、毫も怪むに足らず、然るに今

時多少新規の學問を講じ普通の道理を心得たる人々が山芋のデモ坊主と同じ様に大死一番が何様とか、八面玲瓏の境界で何とやらなどタワイもなき穿鑿に時を過ごすは世にも馬鹿々々しき事柄と申す可し、試みに虫類を見るに寂然不動大死一番日に幾度か勝妙の境界に入るらんと思はるゝもの少なからず、然も遂に悟を開くものなきに似たり、禪宗の悟道何ぞ必しも蝸を學び蜘蛛を學び蛙を學び蛇を學ぶを要せんや、眼界耳界乃至觸感の界現成公案無量無數之を名づけて無邊の人事と云ふ、苟も氣力あらんものは怡も枝幸の川に入つて沙礫皆金なるを覺ゆるが如く、取捨碎篩朝々夕々何時しか巨萬の法財を蓄えて釋迦達磨と同じ位に上り、即身成佛蓋し甚だ容易ならん是に至つて古人の話頭を見れば盡く是れ自家の言行錄なり、帙を繙いて碧巖を看るは恰も鏡を開いて自己の面を看に同し、即ち俗禪の極致にして假に名づけて無事息災の安心立命と云ふ、復何の考案工夫をか要す可き小生寐語あり記して雅禪の一嘬に供す、「智解如山擔兩肩。羞吾久學野狐禪。今朝拋擲歸無事。高枕清風明月前。」今朝と明月とは矛盾の様だが是は矢張り曲亭馬琴の非難した忠臣藏の淨瑠理に入る月の山科よりは一里半あつて直ぐに又月影にすかし豚むるとあるのと同じ筆法なる可し、自らも判然とは答へ難し、唯斯くよみしことも有るなり

三、宋時代の俗語

豪傑禪の見雷也連、口を開けば什麽生を唱へ、筆を執れば何々底の消息など乙に撚りて人を嚇かす、俗禪の小生等が可笑しさに堪えざる所なれども、世間の廣き其風を聞いて肩を聳かすもの無きに非ず、果はイエスキリストの一派までも之れにかぶれて内々禪門の語錄を繙きゑらそうな文言を切り拔きて文章の間に象眼し、己れは耶蘇を信ずるが悟りも開いて居るぞと云わぬ斗りの顔付又一入の滑稽なり、曾て物識りに聞く所によれば禪錄の文章は宋代の俗語なりと古色蒼然物數寄の垂涎するも尤の次第なるが、ソレだけ左様に多く今の世には緣遠くして意味の不明なるも亦尤の次第ならずや、一寸した事が「上大人丘乙已」いろはにほへとと云へば三才の小兒にも分るものを、然も立派な日本人で有ながら手間を潰して漢語の詮索此に至つては古徳も習慣の奴隷たるを免かれず、(斯く申す小生も亦其類ひなりしを以て前に記す如き唐人の寢語を吐きし次第なれども、今はすつかり改心して本然の性に立戻りたれば御叱り御免を蒙るなり)と云ふ可し、尤も昔

時は世間が暇であつたから宋代の古語も娯みの一ツ印度の風俗も愛敬の種、ハタキを以て「どうじや」とやるより、拂子を揮ふて什麼生など、氣取つた方が面白味もあり手間もかゝりて好かりしならんも今日は羽の無い人間が一時間に二十里も三十里も飛ふと云ふ文明チヤキ〲の二十世紀湯錢も二錢五厘に上つて稼ぐに追付く貧乏あり、單税論で金持の征伐でもやらねば顋が干上ると申す世の中、禪をやつて悟るも可いが馬鹿に手數の係る古語の研究は古語學者に一任し、禪學は禪學だけの專門にしたいものだ、一寸試に無難和尚や鈴木正三の假名書にした問答などを見給へ別に大して難かしい事はない達磨の不織一ツ分かれば破竹の筍、を茶に茶漬めしを食ふが如くさら〲さつと咽喉に通る、碧巖だつて何だつて先は似たものの焼たものゝ食へぬと云ふ理窟はない、唯其文字がイデチグラフで之に古い魂が乘移つて居るものだから可憐や學者が頭を痛める、其ベチルスは俗語が第一次は所謂古事來歷、日面佛がどうしたとか月面佛がどうしたとか素性の分らぬ字面佛が出現する爲め、氣の弱い奴は早腰を抜かし、中々以て某などの企て及ぶ悟に非ずなど落膽し、或は少しく其樂屋を覗きたる奴はチホン貴樣等には分るまい意味深長とは此事だなど威しかける、チヤンチヤヲ可笑しき次第にして、是が禪なら金儲けと冷かしてやるべし、小生曾て同志の俗禪と圖り見雷也組の秘書とする二三の禪書を今の日本の俗語に譯し似爲非禪學者講釋坊主の飯の種を取上げ與んと存ぜしも俗務多忙未だ其運に至らざるこそ殘念なれ、幸に同感の人にして少しく遑ある方もあらば娯半分本案の實行を願ひたきものなり、ありや〲

四、俗禪流の活用は是

借問す禪を學んで何とする、十人が九人答へて曰く膽を鍊り心を靜め氣を養ひ慾を離れ迷を破り悟を開く爲めなりと、膽を鍊つて丸藥とし、人膽丸と名付けて發賣するも面白からん、心を靜めて篤と考へ色よき返事を爲すも宜しからん、氣を養ふて芽を吹かし、慾を離れて貧乏し迷を破つて藝者遊びを止め、悟を開いて坊主となるも皆是れ浮世の爲めにならんも、畢竟雅禪の雅致を得たるものに過ぎずして俗禪の俗心には感服し難し、或は一種毛色の變つた男は我れ禪を學んで禪機を把握し出沒變化宛轉滑脫自由自在の手腕を揮ひ、有時は獅子の如く、有時は鼠の如く、虎の如く猫の如く、豹の如く龍の如く、天下の豪傑を奴僕とし 四海を經

營し天子樣に忠義を盡し名を萬世に垂んと欲すと云ふ愛す可き心懸なれども是れ所謂豪傑禪の筋書俗禪の聞いて舌を出す所なり、抑も俗禪の俗物たる其心二一天作を離れず、或雅禪者の稱する如く果して心を使ふこと自在なる人間わらば賃錢を與へて見世物に出し、樂人の面前に心使いの奇藝を演ぜしめ一山當てゝやらうなど考ふるものにして、根性のさもしき事我ながら呆るゝ斗り、されば五重十重禁など有難き名目を承るも耗として痛痒を感ぜず、正中來か偏中正か、陳奮漢か、漢奮陳か、やれ〱肩が凝ると思ふ斗り。其代り南泉が猫を斬つたと云へばアー惜い事だ二ッに切らずに皮を剝いて三味線屋に賣れば好いにと考へ、犀牛の扇子が破れたと聞けば早く新らしい扇を仕入れて御客の來るのを待たふと云ふ寸法、臨濟の四料棟なぞも雅禪とは全然註の付け方が違つて居て先日或豪傑から笑はれたり、其次第を略言すれば四料棟とは皆様先刻御承知の通り「奪人不奪境、奪境不奪人、人境俱奪、人境俱不奪と云ふ四ヶ條、其所で小生解して曰く是れ即ち外交政略に外ならず、例へば英國の佛國を破り、ナポレオンを生擒してヘレナに流し依然佛國を存するは即ち是れ奪人不奪境又其の新嘉坡を取り香港を取り軍兵を置て之を守るも住民は敢て自國の人間に限らず、苟も其政令を奉ずるものは支那人にもあれ馬來人にもあれサッ〱と之を入れ以て其地の繁昌を計るは即ち奪境不奪人なり、人境俱奪は濠洲に於てし人境俱不奪は米國に對する政略飽まで貿易の利を占めて毫も其國と人とに關係せず、是ぞ最もよく臨濟の本意を得たるものにして英人の禪學恐る可しと雅禪先生之を聞いて抱腹絶倒暫くは物も得言はさりき、沈魚飛鳥の寓言は假名つきの莊子で拜見せしも異物の思想相通ぜざる斯の如きものありとは此時初めて經驗せり、夫れ道異なれば相爲めに謀らず、交淺うして言の深きは禍なり、雅俗の二道素より黑白の間柄、親切心の罵詈讒謗度を過ぐれば呵らる可し、且は一寸旅立の矢先きとて暇もなければ文句もなし、此等らで御免を蒙らんとアハヤ筆を擱かんとする時、麻布の雅禪坊なる人より年始の繪ハガキ到來せり其上に摺込みたる詩は慥か鎌倉の大入道殿の洪川公の作なりと覺ゆ恰も俗禪の心に愜ふを以て此に拜借して結句の代りとす「禪門廣濶無人通。擬度關山壓碧空。誰知巖樓樹居意。元存白浪漲天中。」禪の學生諸君以て如何となすや

有舌無舌

永邱寒士豪

題して無舌有舌と謂ふも。禪の味さ趣と機とあるに非らず。饒舌のみ。瞽舌のみ。讀む者鬼面に嚇さるゝなくんば。乃可也。

（其一）寒山詩

頃日偶寒山詩を繙く。中に言へる有り。曰く

雍容美少年。博覽諸經史。盡號曰先生。皆稱學士。未能得官職。不辭秉耒耜。冬披破布衫。盖是書誤巳。

先生の目。學士の稱あり。官を獵して未た官を得ず。新春尙ほ破布衫を披て。下宿樓上に室內旅行を賦しつゝあるもの。輦轂の下想ふに其類多からん。寒山の逭の詩。實に當世靑衿の鍼砭たらずんは非ず。然かも倘し寒山をして。其の一度官を獵し得たる。今の學士先生の。ハイカラーにしてコスメチックなる、所謂雍容の美少年を見せしめば。夫れ將た之を何とか謂はん。誰か寒山を起して彼の頭に一痛棒を食はしむるものぞ

（其二）又

言へるあり曰く

我見百千狗。箇々毛爭寧。臥者渠自臥。行者渠自行。投之一塊肉。相與啀柴爭。良由爲骨少。狗多分不平。

其の利害相關せざるに方つてや。臥す者は臥し、行く者は行く。相共に鬪ふものなし。一旦小利害の一塊肉の如きに逢へば。則ち咆哮して爭ひ。只其の肉の少なからざらんを是れ恐る。古來然り。今に於て殊に甚しきは。人若し世界の新事實を把つて對照一番せば。誰か思ひ半に過ぎざるものあらん。夫の北淸今日の事の如き。假に淸四百の山河を以て。列强に投ずるの一塊肉に比せば。百千狗なるもの夫れ誰そ哉。百千狗中其肉を得る最も多きものは夫誰そ哉。弱之肉は强之食。噫。噫。噫。

（其三）狂詩壇の對偶

梅癡老漁之を祖述し。玩球、竊金、運神の諸老之を潤色し。狂詩壇の旗幟。一奇一正。愈出でて愈妙に。上は風來蜀山の壘を摩し、下は柳北、南橋の營を犇ふ。時に或は風、蜀、柳、南の諸先輩をして、後世畏る可きの嘆を發せしむる、之を東京日々新聞の新聲、及團珍紙上の狂范に徵す可き也。庚子の臘月第二の日曜。嘯樓に歲晚の小集なり。嘯樓は麴坊に在り。主人は竊金公子。詢に是れ狂壇の別號。實は詩壇の一名家野口氏寧齋たり。會するもの十數。客詩龍に非ざれば則ち詩虎。席上各七字を出して對仗を坐に需む。少女（萬

朝の小林氏天龍）の詠に曰く。「堀先生ハ住ム芝ノ新堀ニ」堀氏は中央軟派の首領。紫山の名常陸大椽の狂名と共に檀を動かす。新堀は彼の京寓なり。蓋し少女の狡猾。堀の字を首脚に押して。衆を厄せんと欲す。鶯金主人直に之に對して「園典侍ハ倍ス菊ノ御園」と。日々の市川氏玩球。續ひて之に對して曰く「森秘書ハ探ル梅ノ大森ニ」秘書は蓋し森氏槐南を斥す也。衆皆妙と稱す、玩球の復た對を求むる句に言つるあり。「呑レ酒呑レ人又呑レ藏」と、大場氏運神（雲心）諧謔を以て名。詩名と高し。直に絶叫して對するに「牽レ花牽レ馬竟牽レ車」の句を以ては。三用の牽の字稍牽强の嫌ありと雖も、席上の七歩八叉、固に喝采に直す。其他運神の「貧乏棒驚レ雛ニ振廻ニ」に玩球の「燒持餅恐レ易ニ焦附ニ」を對せし。鶯金の「賄賂魚心迎ニ水心ニ」の時事吟。叱劍（質軒）氏岸上氏の「喧嘩人事非ニ吾事ニ」の對を得し。眞木氏癡嚢の「鶩口猪驚ニ牛肉屋ニ」に。「馬脾風困ニ藪醫者ニ」の暗合對二を出だせし。いつしか笑門福來の好話頭ならざるべき。只だ憾む余の蒼蠅。當日の驥尾に付する能はざりしを。聊か當日の雅會を記して。世の嗜痂余の若きの人に似すと云爾

（其四）　古人の狂對

故某氏の狂對に曰く。「勘平切ル腹故ニ（輕ガユヱニ）半七取ル手甚ダ（花跳）、又「偶遊ブ王子權ル」に「昔往ク深川八」又曰く。「窓掛ク一本ノ欲ス」（拂子）「門對ス百姓ノ寧シ」と。對伏平仄に拘せすと雖も、奇想天來又今人夢覗外に在るものあつて存す。或は曰く某氏は。幕末の畸才子。乙骨彦四郎氏也と

（其五）　金庫の歌と金庫の銘

竹亭東久世伯。頃日某氏の懇囑を容す。金庫の國什を賦す。曰く

千よろづの黄金しろかねたくはへて
火にさへ燒けす水に溺れず

語淺して意深く。兒童走卒亦之を解し得べし櫻癡居士又懇囑を拒ばず。金庫銘を作る。銘に曰く

善閉無關。不レ焚不レ鑽。
容レ公保レ盈。玄德至堅。

語々の來歷。渾て是道德經の文字。而して彼は出すに虚を以てし。此は出すに實を以てす。公と言ひ。盈と言ひ。將又玄德と言ふ。言外味あり。味外言あり。即かず離れざるの處。確として是れ老匠の筆たるに耻ぢす。古人盤銘坐右銘あり、然とも金庫の銘を作るもの。想ふに居士。之が嚆矢たらん。居士の苦心。蓋し想ふ

可き哉。

（其六）　大日本史と某居士

源黄門義公の正一位を贈らるゝの明日。客あり某居士を訪ひ、語次大日本史の事に及ぶ。居士襟を正ふして曰く。大日本は水戸の私史たり。之を以て水戸の私史と爲す可。之を日本の歴史と爲すに至つては則ち不可。何を以てか之を言ふ。黄門の史を修むる。南朝を正と爲し。北朝を閏と爲す。已に正閏を判せば。足利氏尊氏は是れ何爲の者ぞや。其の叛臣たる。固より智者を待たずして知る可き也。而して之を叛臣傳に列せずして。將軍傳に列するは何ぞや。豈に矛盾の太甚しきものに非ずや。一言以て大日本史を蔽ふ可き也と。意氣昂然。蓋し時極めて忙劇。客の之をきく僅に五分間に過ぎざりしといふ。是に於て乎余之に名くるに某居士の對日本史五分間談を以てせんとす。

（其七）　大日本史と某政事家

越へて十數日。其の客、居士の五分談を以て某政事家に談ず。某政事家曰く。居士の説蓋し誤れり。大日本史の稱は。文化五年武公（烈公の先代）の義公の史稿を皇上に獻ずるの後に在り。其の稱實に　皇上の命する所に係る。是より先義公編史の事あつて來。私に命するに史稿の名を以てし。水戸家の私史を以て自ら居る、敢て苟も日本の歴史を以て自ら擬せざる也。而して居士日本の歴史に非らずといふ其本を知らざるの論のみ。若し夫れ尊氏を將軍傳に列するに至つては。又義例の在る有り。義例を擧げて。之を駁する乃ち可。若し啻に擧ぐるに已れの私見のみを以てせは。恐らくは識者を服するに足らず。云々聞く是亦忽忙三分間の辯と。余姑らく兩先輩の八分間論として。之を大方博雅の士に問はんと欲す。

（其八）　影本の大日本史

故人資治通鑑を手寫せしものなり。事齊藤拙堂翁の影本資治通鑑の序に詳か。依つて憶ふ余が王父故千田松處翁。常陸河内郡（今の稻敷郡）高田神社の司祝たり。時に大日本史未だ梓に上らず。實に天下希世の珍。篤學の士爭ふて之れを見んを希ふ。翁漸にして一本を借るを得。膏以て晷に繼ぎ。手つから躬ら正楷を以て之を謄寫す。其業の終るや。又姻戚香取神宮司の請に依り更に一本を淨寫す。幷に傳へて千田家と香取氏の珍什なり。昨年余の兩家を訪ふ、現に之を拜閲して。其の學に篤くして。行に力むるに感じ。冷汗の背に沾きを覺えさりき。聊か好古の士の爲に。之れを介すと云

ふ。（後接）

藝術界漫言

審査　上

木海子

味噌のよしあしを見たり、醤油の悪い良いを分けたりする位の事は、十人が十人誰が見ても先づ誤のないといふ判定が出來る譯であるが、美術品の審査、殊に種々の作風や、流義のもの丶混亂されて居る競技會、展覽會等で、勝劣佳否をきめるといふやうなことは、實に困難なる次第に違いない。

たゞに困難なる次第ばかりではない、ある極端なる方法を離れては、とてもさういふことは出來ない筈だ。試に考へて見ても、丸山派だの、四條派だの、乃至はこれに感化をうけた樣々の流派、岸派でござるの、鈴木派でござるのといふものは、やはり一般日本畫でやかましくいふ運筆を第一とはするが、その基礎が皆實物の描寫にあるので、松の枝は枝らしく、雀の羽は羽らしく描き、若し之れが似ざれば其用筆が悪いとする流義だ。狩野派や、土佐や、文人畫などは、畫は形を描くにあらず、意を寫すに在りといふ格で、とんと實物に頓着しない、むしろ實物に似るのを風格に背く、氣韻を消失し去るなどゝいふて、可成似ないやうに〳〵に、實物の形のまゝでは畫にならぬやうな事を考へて居る流だ。かういふものを一つにして見ると、四條派に善いとするところ、無くてならぬといふ處は、狩野派の尤も悪いとする、決して有る可からずとする處になる、即ち狩野派の尤も良いものには、寸毫四條派でいふやうな意味があつてはならぬ譯だ。そこで嚴密な鑑査眼からいふと、狩野派の作品は、善悪に拘はらず一切、四條派中の最下位のものよりも悪くならねばならぬことになる。もしまた更に一歩を進めていふと、四條派の畫は四條派を主意とする眼でなければ鑑査は出來ない、狩野派は狩野派の眼でなければ審査か無意味なものになる筈だ。四條派のものが狩野派の作品を審査する、南畫のものが土佐繪に順次をつける、彼も賞牌だ是も褒狀だといふ樣な事は、一應はさも公平らしく聞えるが、實は出鱈目の無茶苦茶で、理屈にも實際にもならぬ宜い加減の骨頂といふものだ。

しかしながら世の中の人間といふものは、とかく名聞の根性が離れぬ者で、宜い加減であらうが、何であら

うが一向かまはぬ、自分の神聖なる作品を、所謂見當違の審査員等に翻弄されても、どうか金牌にありつきたい、銀牌が欲しいなど、淺猿ましい了簡をもつて皆々展覽會に臨むものであるから、殆とあらゆる展覽會に皆この馬鹿審査がつきものゝ樣になつて居る。一寸こゝでそれらがやつて居る審査の方法を二つばかりかい摘んで申さうなら。

まづ審査員を丸山から一人、南畫から一人、狩野から一人、土佐から一人とあらゆる流義の所謂老大家を擇んで、各々に審査用紙といつて、其展覽會の出品物の題目と作者の名を記してある帳簿を渡して、これに一々何點といふ點數をもらせる、更にこの點を集めて平均する、そして得たる數によつて一等二等の順序が定まる、であるから五人迄に百點といれられた者が、一人に三十位の點をいれられると、六人に同じく九十點づゝいれられたものゝ方が上へあがるやうなことになる。ざつとかういふ躰たらくで金牌受領者なり、銀牌受領者なりが出來る、なんと宜い加減なものでは御座らぬか。

前にもいふた通り、一つの作品を宜いといふものと惡るいといふものとあつたならば、それは良いか惡いかの二つでなければならぬ、但しどちらかは解らぬが、其中間でないには定まつて居る。三つあつても、四つあつてもさうである。百點といふ審査と、三十點といふ審査は、どちらか一方があやまりであるから、別に正しい方の數を誤りの方へひきつける必要がないのだ。殊に四條派の畫を、其派自身の眼で見た審定と、頭からこの派と正反對のにたつ狩野派の眼で見た鑑査とで平均して點をとる等は無法もまた甚だしいではないか。

かういふたならば、世間通常の審議といふものが、大低この式であるのだから、ひとり美術界の審査を、そんなに不都合といふにもあたるまいといふ人があらう、これは一應尤も千萬なことだ。しかし所謂世間審議の方法のことは今我等の言はうとする外のことで、それが果して宜い方法か惡い方法かといふことも從て別問題で、もし宜い方法にしても美術の審査之れが不都合ならば強て依る必要は寸毫もないのだ。

實際丸山派の人はどうしても應擧を宗として、其他の日本畫は南畫でも、土佐でもより惡るいものと思ふて居る、これは元よりさうある可き理屈だ。そこで今これらの人に南畫を見せても、どうしても南畫の妙を解

することが、それ自身の派の中の者より少いのは當然だ。また狩野派の人にすると、雪舟が第一で、應擧なんどは見向きもせぬといふ風だ、これに寫生の繪畫を見せても、少しも宜いと云はぬのはちつとも不思議はない。で御互に妙味の解しきれぬ、悪るく〳〵見える連中に、これを見せて標準をきめるといふことは、全然最初に過つて居るといはねばならぬ。

兎に角美術品の審査といふものはこんな馬鹿氣たものだが、こゝにまだもつと馬鹿な審査をやる者がある、それは繪畫なり彫刻なりを意匠、技術と分けて評價する方法だ。一寸考へてみると、なる程意至りて筆至らずなどゝいふやうなものがあるが、その筆といふのを直ちに技術と見るのは頗るよろしくない、技術といふものは、其作品が美をなす所以の全躰で、美術品として見る上からは、所謂圖組や意匠等も美をなす一部分なれば、また筆を動かす働きも美をなす一部分だから、相まつてこゝに完全な技術がなりたつのだ、それが偏して居るやうに見えるのは、やはり術の足らぬ者といふより外はない、殊には所謂其意匠と技術とを相半ばせしむるといふ標準が何處から出たのか頓と分らない。僕にはかういふ方法は未熟な作家の作品に宜い賞與をとらせやうとする時のうまい口實になるのだと思はれる。べたくさ塗りまくつた繪を出されて、素人分りのせぬのを幸に、筆は至らぬが意匠がいゝから金牌にしたと云はれると、隨分人は瞞着されてしまうから。しかしながら、如何程ざつと平凡に描いてあつても、應擧は應擧、雪舟は雪舟の趣味がある。まだどんなに奇怪に、丁寧に畫いても、やはり若冲は若冲、元信は元信の價値以外はないのだ。

つまり審査といふは誠に宜い加減なことで、虚名をうらす、俗眼を驚かす、俗物を喜ばすといふより外に何もないものだ。現に其證據には、様々な馴合審査などが盛に行はれて居る、いろ〳〵の老衰した爺々を、審査員に任ずといふので喜ばせて置いて、黒幕の中からだれを銅牌にしてくれ、かれを銀牌にしてくれなどゝ注文が出る、審査結了の後でも、もし其通りにならぬとそれがさうなる迄何度でも内々の審査を仕直す。それから誰々は銅牌をいくつやつたから今年は銀牌をやらねばならぬ、去年は何某先生の門人が銅牌になつたから、是非今年は誰の弟子をさうせねばならぬとか、やれ某は未だ銀牌の資格がないの、かれは義理上銅をやらねばならぬのと、實に言語同断のことをやつて居

る處がある。まだ〱激しいのになると、復讎のや歎迎の審査がある、誰はこの會へ來さうだから先づ何賞をやるとか、彼は近頃あの團躰へ出入するから、目に物見せて一番賞をやるまい などと いふのも時々耳にする。

これ程あてにならぬ、馬鹿氣た賞與が中々欲しい連中が多いものだから、いろ〱と内訌が出來て、各自に分裂するやうなことになり、賞牌なり何なりを氣まゝにたらふく貰ふ會を拵らへる、美術界の分れるのはこの他にまだ事情もあるが、大躰こんな所が源動力になるのだ。

結網集（一）

吉川曾水

◎古代の戀愛

學者動もすれば曰く、イリヤッド及びオデッセイには戀愛を觀る能はずと、然りホーマー時代の戀愛は近時の所謂ラブと全く其趣を異にするものあり、イリヤッドを飾る戀愛は、妻か夫を愛し、娘が父を慕ふの種類なり、誠にアキリースとブリシィスの間柄を看察せよ、ブリシィスの涙は男子の優雅寛大なる心底に感じて巾はれしのみ、アキリースの胸は、婦人の温厚熱切なる愛情に響きて、動きしのみ、這裡實に一點の淫猥なる分子を止めず、詮し來れば往古の戀愛こそ深く考究すべきものなれ。

◎倫敦と巴里

倫敦に行けば英國の全般を見るとを得べし、されはとて佛國の風俗習慣は盡く巴里の上に現はれざるなり、蓋し倫敦はグレート、ブリテンの事物を縮寫したる小パノラマなるも、巴里の氣風は決してリオン、マルセール等の都府に於て見ると能はず、バルザック曰く巴里は自個の法律、宗敎、理想、存在を有する一個人なりと。

◎我の京都

祇園、圓山、先斗町、歌舞の巷、長夜の街、蓋し我が思ふ所にあらず、淸水の舞臺、京都ホテルの層樓に登りて傲然其高きを敝峯と競はんと欲す、蓋し我が希ふ所にあらず、試に我の京都を歌はんか、春雨蕭々、紫紅片々、加茂の堤を獨り行けば、那の閑か知らざれど淸く怨む美人の謠。鹿ヶ谷に散策して、木魚の音を聞く、日暮れて歸途に

就けば松虫鈴虫廟畔に晩鴉一羽。

若王子の瀑布沸々、燃ゆるが如き紅楓の下に坐して清茶を酌むの快。

◎風景の變遷

南禪寺裡我初過、挾路青松半薜蘿、縱令下方城郭近、紀無鍾磬雜笙歌とは藤井竹外の詩、今や疏水通じて、インクラインを走る軋々の車、禪界を俗了したる時に於ては、寧ろ笙歌の雜るを取らん哉。

淪落書生無氣焰、雨衫風笠度函關、鐵道開通して爾來、箱根に行くものは、富豪家にあらざれば則ち臺閣の人、貧乏書生の箱根廻りは望むべきとにあらず、

源氏物語に曰く

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に海はすこしとほけれど、行平の中納言のせき吹きこゆるといひけむ浦波、夜はげにいとちかくきこえて又なく哀なるものは、かゝる所の秋なりけり。

いまの須磨は鐵路と行路と併列して、海はすこし遠きどころか、旅客車中より手を出せば、殆んど海水を掬する位なり、而して波濤の音は昔も今も變らざれど、哀れといふ景色は、次第に消え失するものゝ如し。

みつしほのさしてぞ來つる鳴海潟神やあはれとみるめたづねてとは十六夜日記に載する所、然るに尾張の鳴海は現時海道の一驛、海に出でんとせば、將に一里の程を歩まざるべからず。

嗚呼風景の變換此の如し、五年の後如何、十年の後如何、百年の後如何、千年の後如何、銀坐の煉瓦道は武藏野の小徑に變ずるとなきや、淺草の觀世音は片田舍の地藏堂と化するとなきや、變化は惟り人事のみならず。

◎草鞋時代

嘗て丹波の福知山より丹後の宮津に出でんと欲し、草鞋雨後の峯嵐を蹈破す、是れ則ち酒顛童子の住みし大江山の三里越と稱する處、崖巘嶄々、谿背陰森、轉た寂寞の氣あり、山か雲か遠ふして知る無し、煙散じ雲消ゆれば山依然、羊腸歩し盡せば眼界忽ち日本海の緑波開く、清快忘れ難し。

十九の遊子迷ふて白鷺城に赴く、牛谷林頭片雲晴、鹿川堤上斷虹横、滊車ありしも乘らず、旅亭ありしも憩はず、餓へば三個の大福餅あり、暮れば二十五錢の逆旅あり、此行寧ろ詩的也。

二度と行くまい丹後の宮津を半里も西に行きて三人寄れば文珠の智惠、出るか出ぬかと試むる名物の牡丹餅

を食ひつゝ、袋の口の如き切戸の渡を濟れば、一帶の白砂青松、通ほり過ぎて、自然に登りつめる成相山、樹の根と成り合はんかと、杉下に寄りて、足許を見ればこは如何にまだふみならぬ天の橋立横はれり。

時既に暗黑にして燈火二三、彼岸の茅屋にあり、疲憊殆んど歩み兼ねて、大和街道巨椋の池邊に佇む一箇の青年、俚謠を唱へつゝ近づき來る村娘に敎えられて、唯半里程と勇を皷して、伏見に入れば觀月橋上十九夜の月を觀る。

◎二樹山人の梅花

二樹山人梅花を畫がき、又能く梅花の詩を賦す、空山突見古時月、老樹忽先天下春の句あり、雨窓銷夏錄に曰く、二樹山人日として梅を畫かざるは莫く、又題せざるは莫し、故に萬幅の梅花、萬首の詩ありと、嘗て洛陽にあるの時、梅を書齋の壁間に畫がく、氣方に嚴寒百虫蟄息す、凍蜂來りて其花に集まれり、以て筆の神を徵すべきなり。

◎眞正の辯士

北米の詞宗エマルソン雄辯を説く、其語に曰く、

英雄にあらざれば眞正の辯士にあらず。

聽衆をして己れの好むまゝに、或は喜ばしめ、或は怒らしめ、或は忍耐せしめ、又敵人をして朋友たらしめ、失望者をして希望に滿たしむるものを雄辯家と稱す。

雄辯とは眞理を聽衆が完全に了解し得る語に通譯する能力なり。

此に於てか知る、デモスゼニース、シセロ、ウエブスター、ボルク、グラッドストン等の雄辯家たることを、後閤の鳴蛙、藪叢の小雀豈に其れ雄辯を以て目すべけむや。

◎地方發達の程度

地方發達の程度を知らんと欲せば、先づ其地方より撰出さるゝ代議士を觀よ、盡く中らずと雖も、一助となり得べし、例せば島根縣の如き僻遠にして中央との交通不便なる地方は、代表する議員も、皆世人の耳に慣れざる名前なり、サワラの砂漠よりは、ビスマルクも、ナポレオンも生ぜざるものと知れ。

湖山翁の詩を評す

香山茂

今日の詩壇小野湖山翁を以て海内第一の耆宿となす、

去年朝旨五位を賜ひ今年壽域米字に躋り、且つ家に賢子孫ありて吟花酔月自ら餘資あり、人間の清福此の如きもの亦稀なり、

翁と名をと齊うせしもの大沼枕山(翁より四歳少し)森春濤(翁より五歳少し)鱸松塘(翁より九歳少し)等大概物故して墓木已に拱せり、枕山松塘の如き後嗣ありと雖も泯滅聞えず、春濤の令息槐南君詩名乃父に勝ると雖も腰を五斗米に屈するを免れず、之を翁の諸子の或は銀行の重役となり、或は相場社會の雄將となりて、一攫千金の利を占むるに比すれば、果して如何、ア丶文章不値半文錢、翁の後圖を為す欽羨に堪えざるなり、

翁の詩少壯の時にありては專ら骨力崢嶸を以て勝り、直に胸臆を攄べて些の雕琢を施さず、星巌の所謂、氣骨陵嶒貌太奇、寒山片石即君詩、也知粉朱妖嬌態、大丈夫見所不為、又、懐之本色在言志、刪盡容華存性靈、云々と云へるもの眞に適評ならん、然れども粗率にして獷氣あるを免れず、

翁の詩集前後刊行するもの合して一千首に滿たず、而も寥々たる短篇多く、六十年間刻苦の功に比して甚だ少きを覺ふ、況んや諸作皆精金美玉ならざるをや、然るに詩名隆々海内を風靡し、大家を以て之を同するに至るは何ぞや、蓋し其詩諷誦に便なると心脾に入り易きを以てなり、

湖山樓詩稿(一)は翁が二十七八歳の頃より三十二歳までの作百二十餘首を集めたるもの、有名なる鎌倉雜感、惜春詞等此中にあり、鎌倉十二律は一時諸同人の間に傳稱せられたるほどありて、首尾接應連作の躰を得、筆力流利快馬に鞭ちて峻坂を下るが如し、之を山陽の詠史典故を驅使するに比すれば淺薄の嫌あれども、一誦何人にも解し易きは却て世好に投じ名を得たる所以なるべし、即ち九十六句の多き典故らしきものを擧ぐれば、英圖何止齊桓業、機變或同曹操姦、『聞道謀臣似王猛、可能正朔諫秦堅、』秦王全定唐家業、漢帝寧知太子寃、『安得賢如房魏輩、細論創業守成難、』箴言敢擬阿房賦、往事偏同金谷園、等の數句のみ、而も大概十八史略にて兒童の誦んじ得らるゝ典故なり、

翁の詩は虚字の斡旋に力を費し、其妙全く此にあり、漫りに典故を多く引用して堆垛飣餖の弊に陷るものは必ず虚字を用うるに拙なり、然れども七子格調の詩を喜ぶときは虚字の多きを以て詩にあらずと為すに至る、典故と虚字必ず偏輕偏重の患あり、其實併せ用ゐて

宜しきを得るの勝れるに如かざるなり、帝位空高天北極、世風漸下水東流、金湯海内無雙固、兵馬關中第一州、』『皷角東征策勳日、衣冠王室式微時、』江山有恨三宮駕、天地無知九代榮、』の如きは陸放翁、元遺山の佳聯と相匹敵すべく、明七子を準縄とする者も亦輕々しく唾棄せざるべし、百年妖霧彌天暗、千里腥風掠地吹、』『坐弄國鈞眞大事、』詆誅諸弟本强顏、』『世間往々狐欺虎、天下滔々海變田、』等は粗獷の甚しきものなり、酒臭通天々狗舞、寶刀投海海潮乾は妙對と雖も、枕山晩年の作に似て詼調に入る、思及蒼生在勤儉、智欺一世定英雄は粗對と雖も勁健の詞喜ぶべし、之を要するに翁の詩は達意を主として字句音節を輕視す、詩と文章との區別を精査せば、大に悔悟する所あるべし、されども今日の少壯作家の字句にのみ拘泥して詠ずる所の何事たるやを判別するに苦しむ者に比すれば勝る所あり、十二律中平仄の違ひしもの二ッ、詆誅諸弟本强顏、籠絡乾坤勢太横、韻書を熟視せざるの罪ならん、當時翁諸師友蓋ぞ之を正さゞる、殊に强顏の文字妥當ならず、俗につれなし即ち無情と訓するを以て、賴朝の諸弟を誅するは無情なりとの意味か、所謂和臭と云ひて詩人の嫌へるは此にあり、是れ瑣事と雖も大家としての技倆に副はざるなり、

惜春詞は前後各四律、前作に於ては金鴨香消人在夢、紅樓酒散月如烟の一聯誦すべきのみ、何時書劍酬初志、所在江山即是家』閑身渾付盃中物、遊跡偏同水上萍の如き、は唯客中の感慨を述べしのみにて、惜春の意何處にかある、尤も不即不離とか云ひて、題に離れて作るも妙なれとも、斯く離れ過ぎ且つ平凡粗率にては何の味かあらん、後作の孤館殘燈欹倦枕、半簾疎雨夢歸舟は稍可なれとも秋夜の作に似たり、倦枕と云へば夜の長きを意味し、疎雨と云へばしめやかなる春雨にあらざるが如し、是れ詩人の商量を費すべき所、唐人の春眠不覺曉、處々聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少、を玩味せば倦枕の字何を以て用ゐん、又廣瀨旭莊が春雨の詩に濕透琴書際（誤字あらん）と作りしを梅雨に似たりとて濕及と改めし細心あらば、疎雨夢歸舟の春に適せざるを悟らんか、後進淺學の余輩としては甚無禮の評なれども、聊か思ふ所を述べて敎を請ふ、されども月和殘夢花無跡、春到啼鵑易斷腸、』東君於我思偏淺、西日倩誰留少時、』粉愁香恨隔年別、燈施鐘殘思夕情の如き表子才と伯仲の間に在り、

其他七律にありて佳聯と稱すべきものを摘記すれば左の如し、

一朝小別聊呼酒、三日行程半在舟（送竹内九萬遊南總）
一年秋色在今夜、滿座清風多故人（八月十五夜）
荒原豈是耕桑地、盛夏却如寒冱時（送嶺田士德遊松前）
子美文章淪落後、馬遷志業壯遊時（同上）
天地英靈秘巖壑、金銀樓閣照烟蘿（日光山）
赤烏夜躍東瀛水、金氣秋流大麓雲（登嶽）
人間草木未生處、天上神仙來會時（同上）
婉柔深得風人旨、綺靡何妨隱者詩（吟香集題詞）
班昭本志在箴戒、德曜遺風甘隱倫（紅蘭小集題詞）
不廢居常針線事、兼攻古昔聖賢書（同上）
寒高積雪千山曉、日落長風大海波（枕山歸自南相）
半窓雨氣燈烟亂、五夜寒聲木葉知（秋風）
疎才何恨成名晩、瑣事誰知處世難
耕釣古來多隱逸、琴書今日免飃零

全鼎の味何ぞ此に盡きん、されども集中の佳聯は大概此の如きのみ、蓋し星巖を首として當時の詩人、力を七律一躰に費し、長篇古躰に至りては研究する所無く、唯近躰の作法を以て句を疊み、間々八家文的の文字を塡入して古詩と爲すのみ、併し學力識見山陽賴氏の如きは往々觀るべきものあれども、尋常詩人を以て目せらるゝものは殆んど古詩の躰裁を爲さず、湖山翁亦其例に洩れずと雖も、氣力を以て勝るものなれば筆々奔馬の如く、一誦快と稱するに足る、殊に詼謔人の頤を解くものあり、

世間快事寧有此、醉死道人醉未死、……吁嗟乎人
世生死固其常、迷津何處問慈航、歸命頂禮米汁佛、
不生淨土生醉鄕（醉死道人歌）

莫笑下動遷其祠、不動之動未足奇、動中有靜靜中
動、妙理活潑君須知、天動地動說何極、異聞只漫
驚蚩々、動之所惡在妄動、維精維一要操持……
……嗚呼尊如日月時晦明、大如山岳或重輕、但使此
心精且一、移居何害不動名（重次不動山人詩韻賀其移居）

七古は大抵勃寧の理窟にあらざれば、滑稽詼謔此の如きもの、絕て詩趣無し、若し韻語といふ字を狹義に解釋して、詩と別なりとせば當時の古詩は實に韻語なり、されども滑稽の妙此の如くんば亦一躰として存するも可なり、星巖は後首を評して、首尾相應ぜずと雖も中間脉絡接せず所謂支離病なるものと云へり、乃ち余が中間を略して……と爲せしも其意を領するを得るによりても星巖の評の當れるを知るべし、蓋し七律を作れ

ど中聯に力を盡して起結あるを忘れ、七古を作れば首尾に意を専らにして中間は放言檢束無し、是亦當時諸家の通弊、星巖と雖も免れす何ぞ獨り湖山翁を咎めんや、

翁の絶句は首尾の位置能く整ふて、前後轉換すべからざるもの多し、即ち一氣呵成、別に佳句無しと雖も全躰より評すれば完作と稱すべきなり、されども粗心獷氣の誚は到底免れざらん、

晩節黄花句亦工、朝廷朋黨未成風、宋家第一好人物、莫是能詩韓魏公（讀宋史）
亂世不爲哀怨語、陶公此段是高人（讀陶詩）
昨夜陰風今夜雨、爲君千里算歸程（別後寄友人）
地宜幽邃花宜婉、愛此松杉點綴來（東台賞花）

余が愛誦する所二三を擧ぐるも、猶理窟に陷りて神韻縹緲たるものを獲難し、想ふに性情に偏するの致す所、故に紀實の詩は人を動かすもの多し、

浪遊幾歳滯東關、歴遍風酸雪苦間、弟妹團欒豈辭醉、今年元日在家山、（癸卯元旦）（此時翁三十歳）
菜畦麥壠盡泥沙、漂沒江村數百家、誰信城中人意別、醉聽風雨惜春華（利根河上作）

情を以て勝るもの語言は巧ならざるも能く人をして感ぜしむ、翁の詩訣全く此にあり、之を以て一家の名を成さんと欲す、然らざれば左の一絶の如き何ぞ刪らざらんや、

我年巳三十、志業一無成、香花謁墳墓、不知雙涙横（先考忌辰掃墓云々）

湖山樓詩稿（二）は火後憶得詩と云ふ、安政五年十一月災に遭ふて詩稿を燒失し、纔かに記憶し得たるものを集めたるなり、故に年次、序を亂ると雖も三十三歳の頃より四十五歳までの作ならん、初集に比すれば頗る進境ありて老成の風あり、故に佳作一々擧ぐるに勝えず、併し鎌倉十二律の如き得意の作は無し、

老成の域に臻ると雖も、古詩は依然舊套を脱せず、否讀書力の進むに隨つて虚字斡旋に自由を得たるより、一層甚しく文章的の長篇を作れり、楠氏の事を詠ずる中に、人言正儀叛降辱其宗、我言此公處置出至忠、……乃父遺命公敢忘、乃父法公深知、一進一退亦何常、含垢包羞眞男兒、史乘多成賊臣手、後人誰知公心悲、の如き詩として何等の價値かある、全く九字七字の論文なり、之は猶可なりとして、君不見南北議和統則更立、禮則父子、此公當日不死之功至此顯然耳、嗚呼此公當日不死之功至此顯然耳、不然豈有河内公之子帶刀公

之弟而爲叛降之士、と實に古今未曾有の長句、これを詩とするを得ば、日本外史の論賛は皆詩なり、其異なる所は押韻の有無、單に其意義を取らば山陽の文章却て詩趣あらん、兪曲園東瀛詩選を編し、邦人の長篇此の如きものに遇へば必ず刪りて格に入らしむ、梁星巖の菊地正觀公雙刀歌の中に就て、雄者二尺有三寸、欸曰正平十年肥州末貞、雌也不盈尺、十二年二月在安吉作、と云へる四句を刪り、龍吐水の歌に就て豈不賢於傖父子之蓄貲財、坐古温飽而無爲者哉、を改めて豈不賢於傖父子、坐古温飽何爲哉、と七字二句に作る、曲園の如き詩人にあらずと雖も猶此の如き慧眼あり、然るに邦人は專ら詩を以て家を成す者も全く古詩の法則を解せざるに似たり、彼土の長短句多くは樂府体と稱するもの或ひは二字三字或ひは十數字を以て一句と爲すものあれども、詩の面目を離れず、漫りに點綴するものにあらず、李白の蜀道難、歐陽脩の廬山高等是なり、詩は元來諷誦すべきものなるに、斯く文章と區別し難き長句は歌者の調に上らざるべし、俚歌に都々逸と稱する俗曲あり、文句入りと唱へて喃々たる男女の情話など挾み、歌者の之を口にする時絃を彈ずる者手を止む、然れども其前後は調を整へて絃音に合す、今翁の詩を讀むに徹頭徹尾所謂喃々たる文句のみ、絃音に合すべき處無し、

二集は翁の閲歴に於て大關係ある所、即ち弘化三年米人の始めて來航せしより、幕府の狼狽、處士の横議、延て安政五年戊午の大獄に至るまで十餘年間の作なれば、頗る詩史として他日の參考に供すべきもの少なからず、

海口無關碧淼漫、妖鯨出沒湧狂瀾、羽書不奏安邊議、唯報夷情測得難、

端拱誰是濟時才、只恐紅塵化刼灰、瀕海藩騷鎭猶未、更堪梁木一朝摧、

此二首は嘉永癸丑の六月米艦來りて互市を請ひ物論洶々の際、將軍家慶の薨去せしを詠ぜしなり、其年の中秋には

白雲明月夜悠々、一醉何堪消百憂、莫怪江湖閑散客、也因世故廢中秋、

同年冬至の日には小原鐵心の宅に於て、岡本黃石、大槻盤溪、鷲津毅堂諸人と詩會を開き、痛哭之書思賈傳、審敵之篇推老蘇、和蕃婁敬言空巧、賣國秦檜繁有徒、などゝ慷慨の言を發し、更に放歌行を作りて殷憂過痛哭、作詩不成章と歎息す、時事の變遷吟花醉月の詩人

を驅りて、驚天動地の思をなさしむ、而して翁今日五位の榮階を得るの基礎此に在り、

秦の天下

島村抱月

支那の歷史を繙いて、二千年の古に溯るとせよ。六王の事休して、老實なる漢の天下未だ起こらず、中間二三十年の際、最も風雲變化の態を極め、濤浪起伏の妙を盡くせるものは、秦の世なり。始皇四海を統べてより、三代十五年、年處の短きを以てすれば、歷史の上によく幾許の紙幅をも塞ぐべからずと雖も、其の十五年の事業は優に以て千歲の後を蔽ふべし。萬里の長城は、今猶ほ東亞の一角を限りて、儼として存するにあらずや。焚書坑儒の慘禍、狂妄はすなはち狂妄なりといへども、支那の文學之れが爲に步趨を轉じて、記錄の上に秦の名を不滅ならしめたり。太く短くといふの俗諺は、最もよく秦の天下を說明したるもの、嬴政また一個の快男兒たるを失はず。若し我が朝にありて、元龜天正の世を戰國と稱し得べくんば、德川の幕府は漢の天下なるべし。中間の織田氏は楚か。秦はまさに豐臣氏に比ぶべし。他はしばらく措く、豐臣氏の覇政と秦の天下とは、之れを較ぶるに於て必ず不當ならざるべきを信ず。秦は三世十五年、豐臣氏はまた三世十八年、共に戰國亂離の後を受けて、眞の統一の天下、漢家と德川氏との爲に先驅をなす。之れより先、周家の鼎全く其の重きを失へるは、恰もわが足利氏の軍職其の威を失へるに異ならず。天下久しく泰平を想望して、而して此の望みに應ふるものは將さに興らんとする漢の朝廷なり、德川の幕府なり。然れども、人事の遷轉は多く直角的ならず、飛躍的ならず。極端に亂れたる戰國の世は、直ちに一躍して他の極端に赴く能はず。此に於てか、中間に準備となりて地盤を舖くの一小齣を挿まんとす。秦の天下と豐臣氏の覇政とは、正に漢家と德川氏との爲に地盤を舖くの任にあたれるものなり。歷史の過渡をして婉曲ならしめたるものなり。

戰國といひ亂世といふもの、要するに自我亢進の時代なり。獨立といひ、自尊といふが如き諸德、皆其の平準を失ひて、偏へに自我の競爭に資するの時代なり。故に活氣は是れあるべし、風敎は蕩然として地を拂へり。斯くの如きの際に處して、最も早く成功するもの

は、最も時勢に適するものならざるべからず。而して時勢未だ轉ぜず。天下は遂に自我思想の權化たる秦に歸し了れり。秦の風氣、一面に於ては雄大、一面に於ては狂暴、其の源實に自我の强烈なるにあり。此の意に於て秦は一個の驕兒なり。六合の表裏たゞ我れ獨り尊しとせるなり。彼れが猛烈なる中央集權の政治、彼れが急激なる郡縣制度の施設、固より前代の弊に鑑みしものなるべしといへども、動機の中心は此にあり。始皇の人物最もよく秦の天下を代表せり。眼中に古人なく、自ら三皇五帝を兼ねたりと稱するものは、彼れにあらずや。崤函を宮として、帝王萬世の業に誇るものは、彼れにあらずや。長城を修築して、幾千里の國境に障壁をめぐらさんとするものは彼れにあらずや。自家の功業を石に鐫して万年に傳へんとするものは彼れにあらずや。海中に不死の藥を求めしめたるものも、天下の詩書禮樂を火にして顧みざるものも、皆彼れにあらずや。傳に言ふ、始皇湘水を渡るとき風に遭へり、湘君は堯の女なりと聞き、大に怒りて刑徒三千を發し湘の山を赭にせりと。想ひ起こすは、秀吉が大佛に向かひて震災の餘憤を漏せりといふの説なり。また聚落の豪華は、阿房宮の壯觀といづれなりしぞ。所謂桃山期の豪放雄大は、必ずや秦の天下に其の對を求め得べからん。

それ斯くの如き秦の天下が、命數僅かに十五年にして亡びたるものは何ぞや。賈氏の過秦論は斷じて曰く、仁義施さずして、攻守の勢異なれば也と。吾人おもへらく、秦の天下は戰國に勝つべきの天下にして、泰平に勝つべきの天下に非ず。差別に處すべく現實に處すべきの天下にして、平等理想の旨を缺けり。而して其の由來實に周の三大思潮の一にあり。

周の社會の亂るゝや之れを救はんとして起こりたる雜多の思想系あり。中に就いて亂次にこれを言へば、道家と儒家と法家とを其の尤なるものとす。此等の三家、其の發足點は皆亂れたる現下の社會を救はんとするにありたれども、其の標的を定むるに於て、其の方法を擇ぶに於て、遂に殊なる潮流を成すに至れり。儒家は曰はく、堯舜の代、治はすなはち治なりと雖も、周家の更に進歩し成熟せる文明に如くことなし、我が標的はこれにありと。道家はおもへらく、今日の頽風實に周の文明に胚胎す。知巧あり、聖人あり、仁義あり、禮樂あるが故に斯くの如く亂れたるなり。如かず、堯舜無爲の治に還らんにはと。一は進歩を是認するの思

想に立ち、他は進歩を否定するの思想に立つ。しかも此の二潮流は、共に當時の社會よりは迂遠視せられ、實利に益なしとせられたり。而して此の缺を補ふものは、彼の法家の思想なりとす。彼等は、眼中たゞ現實の外なし。如何にして自家を最上權の地に置き得るか、如何にせば能く現實を基礎として、統一の實を擧げ得べきか。現實以上、自家以外には彼等の則るべき標的なし。法を嚴にし、信賞必罰以て天下を縛すべしといふ。唯これのみ、理想の以て差別平等を調ぜんとするものなし。而して今若し儒家の思想を以て周に擬し、道家の思想を以て楚に擬せば、法家の思想は、主として、秦、齊、趙等、周に對する外様大名の國に萌せり。而して所謂覇者は常に此の思想に伴ひて興り、轉傳して、悉く秦に流れ入れり。商鞅も秦に之き、韓非も秦に之き、法家の著しきものは、多く秦に走りて其の主張を伸ばさんとせり。秦また之れを容れて、周に於ける法家思潮の淵となり、隱然楚の道家、周の儒家に對して、秦の法家といふが如き地位を保てり。而して此の、最も現實的なる、隨つてまた最も當時の社會に適切なりし法家は遂に成功して、秦の天下を成せり。天下既に成る、風氣はおのづから一變せざるを得ず、前に最も時勢に適切なりしものは、今や最も時勢に適せざるものとなりて、即ち亡びたり。要するに秦の天下は、法家成功の紀念碑なる哉。



遊北記程

源清蔭

グットファンゲンは外海より深く内地に浸入せるソンニユ灣の支灣チーレーの盡頭にありて、錨地は二十乃至四十ファーゾンの深さなれども或る處は四千呎の水深を有す、それに不拘兩岸切迫して殆んど船を横へ難き處あり、午後六時その反響を聞んが爲めに三回の砲發あり山鳴り天應へて終止するところなきか如く實に壯快なり、七時過き始めて峽中を出づ、午後八時バルキルメンに投描、此航程卅二哩探遊の爲め四時間淀泊するを以て直ちに上陸し、海岸を散策する二哩、猶ほ時間の餘裕あるを以て山間の村落を訪い十時歸船、此地は山水清雅の境にして避暑の爲め別莊を設くるもの少からず、九時頃十二三夜の月は峻峰の間よりいて暫時にして又峻峰の間に沒す亦奇景也、十一時三十分拔描

七月八日快晴五十五度

疲勞の爲め晏起九時甲板に出れば船は又峻岩絕壁の峽中にあり、左舷天表に獨秀するものをホルテルンと名け、海上直立二千九百呎、前十時暫く外海に出で午後二時再び峽中に入る、風景昨日に異ならざれ共兩岸空濶にして山勢優大なり、八時七分チースに着航程二百十哩、直ちに上陸し附近の溪澗を跋涉して十時三十分歸船

七月九日曇時々雨五十七度

午前九時廿五分再上陸し一行と共に馬車を驅りロムスダルの峽中に向ふ、約四哩にして路傍より兀立せる一奇峰あり、ロムスダルホールンと名く、高五千一百尺東に行く四哩にして右側に一帶の岩峰あり峰影ロムスダルホールンの如く峻拔ならざれど其頂上は一帶に劍を樹つるが如し、高さ六千十呎峽中第一の高峰となす、此邊より兩岸の頂上及び半腹の溪澗には積雪皚々として大小無數の瀑布あり、巨岩に激して龍の蟠るが如き、急風に飛散して絲を亂すが如き、其の狀千變万態一々記するに暇なし、孰れも其の長さ千五六百尺より二千呎を下らず、就中最も著明なるものはステーヂホンド、スコゲードンテー等となす、又此附近の道路は巨岩推積の間松林繁茂の中を出入して時に危橋を渡り、又三

想に立ち、他は進歩を否定するの思想に立つ。しかも此の二潮流は、共に當時の社會よりは迂遠視せられ、實利に益なしとせられたり。而して此の缺を補ふものは、彼の法家の思想なりとす。彼等は、眼中たゞ現實の外なし。如何にして自家を最上權の地に置き得るか、如何にせば能く現實を基礎として、統一の實を擧げ得べきか。現實以上、自家以外には彼等の則るべき標的なし。法を嚴にし、信賞必罰以て天下を縛すべしといふ。唯これのみ、理想の以て差別平等を調ぜんとするものなし。而して今若し儒家の思想を以て周に擬し、道家の思想を以て楚に擬せば、法家の思想は、主として、秦、齊、趙等、周に對する外樣大名の國に萠せり。而して所謂覇者は常に此の思想に伴ひて興り、轉傳して、悉く秦に流れ入れり。商鞅も秦に之き、韓非も秦に之き、法家の著しきものは、多く秦に走りて其の主張を伸ばさんとせり。秦また之れを容れて、周に於ける法家思潮の淵となり、隱然楚の道家、周の儒家に對して、秦の法家といふが如き地位を保てり。而して此の、最も現實的なる、隨つてまた最も當時の社會に適切なりし法家は遂に成功して、秦の天下を成せり。天下既に成る、風氣はおのづから一變せざるを得ず、前に最も時勢に適切なりしものは、今や最も時勢に適せざるものとなりて、即ち亡びたり。要するに秦の天下は、法家成功の紀念碑なる哉。



紀行

遊北記程

源清蔭

グットファンゲンは外海より深く内地に浸入せるソンニユ灣の支灣チーレーの盡頭にありて、錨地は二十乃至四十ファーゾンの深さなれども或る處は四千呎の水深を有す、それに不拘兩岸切迫して殆んど船を横へ難き處あり、午後六時その反響を聞んが爲めに三回の砲發あり山鳴り天應へて終止するところなきか如く實に壯快なり、七時過き始めて峽中を出づ、午後八時バルキルメンに投描、此航程卅二哩探遊の爲め四時間淀泊するを以て直ちに上陸し、海岸を散策する二哩、猶ほ時間の餘裕あるを以て山間の村落を訪い十時歸船、此地は山水清雅の境にして避暑の爲め別莊を設くるもの少からず、九時頃十二三夜の月は峻峰の間よりいて暫時にして又峻峰の間に沒す亦奇景也、十一時三十分拔描

七月八日快晴五十五度

疲勞の爲め晏起九時甲板に出れは船は又巉岩絶壁の峽中にあり、左舷天表に獨秀するものをホルチルンと名け、海上直立二千九百呎、前十時暫く外海に出で午後二時再び峽中に入る、風景昨日に異ならざれ共兩岸空濶にして山勢優大なり、八時七分チースに着航程二百十哩、直ちに上陸し附近の溪澗を跋渉して十時三十分歸船

七月九日曇時々雨五十七度

午前九時廿五分再上陸し一行と共に馬車を驅りロムスダルの峽中に向ふ、約四哩にして路傍より兀立せる一奇峰あり、ロムスダルホールンと名く、高五千一百尺東に行く四哩にして右側に一帶の岩峰あり峰影ロムスダルホールンの如く峻拔ならざれど其頂上は一帶に劍を樹つるが如し、高さ六千十呎峽中第一の高峰となす、此邊より兩岸の頂上及び半腹の溪澗には積雪皚々として大小無數の瀑布あり、巨岩に激して龍の蟠るが如き、急風に飛散して絲を亂すが如き、其の狀千變万態一々記するに暇なし、孰れも其の長さ千五六百尺より二千呎を下らず、就中最も著明なるものはステーヂホンド、スコケードンテー等となす、又此附近の道路は巨岩推積の間松林繁茂の中を出入して時に危橋を渡り、又三

五の人家を見る、此邊の家屋は雪に堪ゆるが爲め横木を桝形に組上げて屋根は土砂を以て蔽へり、路上木扉を設けて車馬の交通ある時は兒女來りて開閉して物珍しげに行人を熟視する、或は野服を纏へる無心の少女が行客に草花を進むるなど路上の愛興なり、チースより廿二哩を走りて二時廿五分ベルモ瀑下の一旗亭に着し晝食後溪樹の間を下りて瀑を見る、瀑は長さ約千尺中部より分れて三條となり注下す、亦名瀑たるを失はず、此時密雲瀰蔓し、寒氣を感する甚しきを以て一行爭ふて歸路に就く、時四時歸途雲霧飛奔し寒雨屢來る、ロムスダルホールン峰下の茶店に休息し再び馬車を急がし進むこと約六哩天氣全く霽る、回顧すればロムスダルホールン峰及其後方にあるカルスクタルテンド峯高五千八百九十呎は新たに微雪を被りて殘雪は淡黄新雪は淺靑に共に晩暉に映して描し難きの光景なり、八時半歸船

七月十日快晴五十九度

午前六時三十分解纜同九時モールドに着航程廿三哩直に上陸す、此地は千三百の人口を有し市街埠頭共に清潔にして街の後丘をメルドハイロールと名け、高千三百五十呎、街頭より良好の道路を通すれども之に依らず試みに岩石を攀ぢて其頂上に登る、脚下の清灣には松洲突出して其趣頗る成相山上より天橋を望むに類せり、又灣を隔てゝ遙かにロムスダルホールン、トムドテンド、カルスクタルテンド、及自餘の連峰積雪を戴きて靑空に林立するを望む、歸路は本道を取りて半服の茶店に小憩し林麓にあるレクチスハウクガーデン街の一端にある教會堂を見、一時卅分歸船す、ガーデンは結構清雅にして高處の眺望臺には灣を隔てたる連峰の地圖名稱を記して之に指鍼を附し、指顧觀望に便せり、又教會堂正面の壁畫は諾威人アクセンエンデル氏の手に成れり優品として遊歴者の必す一覽すべきものゝ一に算へ居れり、午後五時三十分投錨

七月十一日曇五十五度

午前七時トロンニヤムに着航程百四十四哩九時上陸此地は北緯六十三度廿五分五十二秒に位し世界最北の都會と稱す、人口三万五千餘、街衢は清潔にして且平坦東方の丘陵にはクリスチアンステン城ありて南方及西南は山陵起伏しニイド川は殆んど此市街を繞りて海に注く、港を作るの突堤は甚長ふして面積を算すれば百廿五エークルあり、又港内には二個の乾燥船渠あり、其大なる者は長さ三百尺幅五十五尺深十五尺なりと、

市の中央にカセドラルあり殿堂古雅なり、此日探勝者の集合場は此寺と定めたるを以て時間迄に殿堂内を見正午馬車を驅りてリール瀑に向ふ、路は少く山路に入り時に杉松の林中を過ぐ、五哩を走りて一時廿分ストール瀑邊のホテルに入り晝食後一哩を阻つるリールの瀑を見る、ストールは傾斜せる岩石を奔下しリールは三段に折れて墜落す、共に高さ三百尺餘に過ぎざれど其幅二百尺餘にして水量多く、且上流より伐採せる木材の不斷に轉落して其毎に奇響を發し水烟噴騰するの狀壯觀なり、六時十分トロンニヤムに歸り寫眞藥品等を求め歸船八時三十分解纜

七月十二日曇五十五度

午前礁岐の碁布せる間を過ぎ午後一時トロガツテン島下に暫時停船す、トロガツテンとは市帽の意にして其形の相似たるが爲めに此稱あり、海を拔く八百廿呎其中央即ち水面より四百〇七呎の處に方形の空洞あり、幅三十六呎より五十六呎に到り高さ之に叶ふ長さ五百卅五呎にして對側の天を透見するを得、午後六時右舷にセブンシスター山を見る、山は七峯よりなりて各秀麗頂上には一様に白雪を戴き有意粉粧を施すが如し、此中最も高きものデゲルランドと名け三千二百八十呎低き者も二千六百三十呎を下らず、此所在地をステノー島と稱し千五百の人口を有すと、午後八時四十五分アンクラゲンに於て三發の祝砲と共に北極圏内に入る、右舷一帶の山岳は峻峰突兀として山腹より上は雪を留めたり、其山脈の後方に更に山脈あり一帶純白些少の斑點なし是れ四千呎の高原廿九哩の幅員卅五哩に延長するスファルーテセンのグレーシヤ也、十時頃より船は叉峽中に入る、此日一天洗ふが如く十一時過一輪の明月皎々たる雪峰に上る、淸影寒波に涵して最も景趣あり、此時日は北方に落ちて殘暉紫金を蕩すが如し、遊眺咄嗟の間、風光一變して水平線下の曙光は斜に雪峰の一角を射て徐々と山腹に及び、紅影燃ゆるが如し、明月忽ち影を失ひ須臾にして旭輪の波上に轉ずるを見る、奇絶壯絶の光景紙筆に盡し難し

七月十三日快晴五十七度

此朝船客一同の集會あり、各自醵金して一半は海員の慈善寄與に充て一半は船上の娯樂に供せんとの議あり、遊戲は別に日割を定めて舞蹈會懸賞運動新聞發行等と決定す

午後九時トロンソーの灣内に入り中夜の日を見るに便せんが爲め市街を距る三哩半の最も山の低き處に投錨

す、航程四百九十哩九時半太陽に近接したる處に三條直線の虹霓を見る、十時上陸市街を見又後方三百尺斗りの丘陵に上りて眺望し、十一時卅分歸船すればトルムソーの寫眞師來り、正十二時を於て所謂ミッドナイトサンの下に船客一同の撮影を爲す

トルムソーは人口六千五百餘、亦一個の海産物集散場にして就中魯國北部との貿易盛なりと、市街は小なれども概して清潔にして埠頭には二個の棧橋と一個の造船所あり、一行の上陸するや、頭に紅色の頭巾を戴き馴鹿の毛衣を纒ひ支那服に酷似せる袴と靴を穿ち黄面短軀の一群が鹿角細工獸皮等を手にして頻りに顧客を求む、一見其ラップ種族たるを知る、彼等は今に少しも歐化せざるに拘らず善く人に馴れ余等を見て暫くは不審の顔色を爲せしが忽ち英語を以て挨拶を爲し、且つ何國より來るやと問ふ日本なりと答ふれば嗚呼日本なるかとて頻に繰返し、感歎せるものゝ如し、

七月十四日快晴五十六度

午前九時小蒸滊に曳かれてトロムソー島の對岸の陸地に上陸せんとす、潮流急激の爲めに進行意の如くならす殆んど一時間を費せり、上陸すれば昨夜中トロムソーより遊船を以て頻りに運搬せし探勝用の馬車、及ひ乘馬集合せり、一行適意のものを擇びて分乘し二哩斗を阻つる溪間のラップ種族の村落を見る、路は雜樹茂草の間を過ぎて空闊なる溪澗に達せば、ラップ人の家屋六七戸ありて山中より來集せる全種族は物珍しげに探勝者を熟視せり、余等はラップ人を見んが爲めに來りしに非すラップ人に見られんが爲めに來れるものゝ如しと語合しに、傍らに在りし一婦人曰く、往年貴邦の新橋に着せし時少しく目立てる服裝を爲せしか來り觀るもの甚だ多し、何處も好奇心は同様なるべしと、余等不覺赧然たり、去つてラップの家屋を見るに坏土の如く土を以て圓形に固め屋根は枯草木片及獸皮を以て覆い一方の戸口より室内に入れは周圍には低き床ありて其前の土間には家族團居し錢を與ふれば默禮するのみ、絕て喧噪の態なし、家を出でゝ附近の牧場を見れば枯木を横へて柵となし其中には無數の馴鹿を飼養せり、馴鹿はラップ人にありては唯一の重寶にして乳を搾り角を採り毛皮を衣服に供し、一年春秋冬には橇を曳かしめて交通の便を得る等最も使用多きものなれはなり、一覽後海岸に歸れば出帆時間に餘裕あるを以て他の數客と別に小艇を賃して對岸のトルムソーに遊び、十二時歸船す、船中掲示あり曰く陸と船との交通は本

船の小蒸滊及短艇の責任なり乘客にして若し別船に賃して往復せられたるものあらば全船員の不注意に歸す其賃金は本船より償還すべきを以て事務員に申出でらるべしと、此を讀んで償還を求むるものなしと雖、乘客を遇するの用意到れりと謂ふべし、午後二時解纜七時觀光の爲めリンゲンフ井オルドの峽中に迂航す、此峽中は時々快颷の襲來することあり、帆船には危險の地なりと聞しか此日天氣靜穩にして海波紺を流すか如く、右舷の鑽峯矗々として青空に聳へ、小許の餘地なきが爲め積雪は皆墜落して海岸に數丈の長堤を作り、其崩壞せる處は一種の青光を生す、甚だ奇也。



評論

教育時評

●高等學校長に望む

高等學校が、毎週一回の修身講話を廢したることは、外國語の時間を增さむがために、國語漢文の時間を減じたることゝ共に、最も不法の處置と言はざるを得ず。吾人は曾てこれに關する吾人の所見を述べて、以て當局の士の反省を促したることありき。しかも今にして、なほ何等の反響をも聞くことを得ざるは、吾人の深く遺憾とするところにして、同時にまた文部當局者が、吾人の忠言を容るゝ底の雅量これなきことを知るを得たり。乃ち更に一策を建てゝ、これを高等學校長諸氏の前に致さむ。若し修身講話を爲すべき講師の資格如何と問ふものあらば、吾人は智德雙美にして、且つ偉大なる感化力を有せるものならざるべからずと答ふるに躊躇せじ。然り、此くの如き人にして、始めて能く、學生の道義的品性を陶冶するの任に堪へ得べく、此く

の如き人にして、始めて能く、修身講話の効果を収め得べきなり。然れども、此くの如きの人は、日本に一人を求めてなほ且つこれを得ること難かるべし、況や、各高等學校が、等しくこれを得むとするが如きに於てをや。既に適當なる講師を得る能はずば、縦令毎週一時間を割いて講話を聽かしむるも、益するところ蓋し少々なるべし、否、固陋褊狹なる腐儒輩をしてこれに當らしめば、却つて學生の精神をして、頑冥ならしむるが如きことこれなきを保すべからず。

高等學校生徒に修身講話の缺くべからざる所以は、吾人の嘗て論じたるところ、（本誌第十五年第十號）必要缺くべからざる學科も、講師その人を得る能はざるがために、これを廢せざるべからずとせば、豈大に悲しむべきにあらずや。若しそれ止むなくば、政治家といはず、實業家といはず、宗敎家といはず、軍人といはず、汎く天下の名士を招請し、少くとも毎月二回以上の科外講演を請ひ、以て彼等學生が品性修養の助となさしむべし。政治家の國家經綸策、實業家の成効談、宗敎家は信仰を談じ、軍人は戰况を語る。その間一貫せる主義を見出す能はざるに至ることあらむも、しかもなほ腐儒輩のために頑冥に導かしむるに勝れるあるを見る、吾人の一策といへるものは、即ち是れなり。惟ふに東京はこれを爲すに最も利便の地、借問す、第一高等學校長は、進んでその先鞭を着くるの勇ありや如何。（竹友）

●文部省の英斷

吾人は嘗て、府下私立中學校中には、巧に視學官の眼を晦まして、不正を行ひつゝあるものあることを知り、これを以て視學官の盲目なるがためなりと論じたることありしが、爾後幾旬ならずして、郁文館中學と明治義會中學との二校が、徴兵令第十三條の特典を奪はれたり。吾人もとより此の二校に些の恩怨あるなきも、情に於ては頗る校主その人のために悲しみ、天下敎育のためには、寧ろ大にこれを賀せむと欲するなり。然り、是れ實に文部省近來の英斷として、稱賛を價するのことなりと雖も、たゞ僅に郁文館明治義會の二校のみを罪して、未だ他の二三校に及ばざりしは、聊か不公平なる感なき能はす。道路これがために「運動の結果」なりといひ、「特別の情誼」ありと傳ふるもの、また全く故なきにあらざるが如し。吾人の聞けるが如くば、英語科の生徒定員を越ゆること幾百、視學官の巡視に

除して、一時これを獨逸語科の敎室に居らしめ、辛くも切り抜けたる學校ありといひ、常に定員以上の生徒を收容して、不當の利益を貪りつゝある某校は、視學官の巡視あるべしと聞き、月謝滯納を口實とし、俄に多くの生徒を除名して、一時の急を免るゝことを得たりといひ、定員七百五十名として認可を得たるにもかゝはらず、現に八百餘名の生徒を收容して、無事に視學官の巡視を經たるものありといひ、申譯だけに建てし特別敎室は、特別敎室としてよりは、寧ろ合併敎授の敎室として用ゐられつゝあるものもありといふ。

こゝに於て、吾人は、文部省は何故に甲に薄くして乙に厚きかを疑はざるを得ず。若し此の疑團を解く能はずは、吾人は依然として、視學官盲目の呼を續けむなり。(同)

●鐵道唱歌とストライキ節

鐵道唱歌と稱するもの、その歌としての價少きこと、吾人もこれを拒まざるべし。然れども、彼が一たび小學兒童の愛らしき聲によりて歌ひ出さるゝや、忽にして全國に普及し、下女子守の如きものにまで歡迎せられ、彼等をして不知不識の間に、地理的思想を注入したるの効は、決して沒すべからざるものありて存し、殊に卑猥なる俗謠を壓倒して、これに代りしが如きは、敎育上最も喜ぶべき現象なりしなり。然るに未だ半歳ならずして、早く既にその影を收むるに至りしは、彼の運命甚だ拙かりしとはいへ、誠に惜しむべきの極なりとなす。然れども、これに代り來れるものにして、若し敎育的なるものならむには、聊か以て慰むべきところあらむも、「東雲のストライキ」といへる、意味もなく調も卑しき俗謠なるに至りては、轉憤慨に堪へざるなり。

今にしてこれをいふは、聊か愚痴なるが如きも、彼が如く速に普及したる鐵道唱歌が、此くの如く速に滅亡するに至りしは他に諸種の事情もこれあるべしと雖も、吾人の見るところを以てすれば、世の謂はゆる批評家なるものが、鐵道唱歌に對して、些の同情をも寄することをなさず、却つてその缺點を探り揚足を取り、迫害殆ど至らざるところなかりしが如きも、また一原因たるを失はざるべし。若し世の批評家なるものが、此の歌を、歌そのものとしてこれを見ず、世の風敎に及ぼせる影響如何と考察し、これを皷吹しこれを奬勵せしならむには、或は滅亡の速なること此くの如くな

らざりしやも知るべからず。否、卑猥なる「ストライキ節」が、此くまで速に天下に跋扈するに至らざりしなるべし。夫の筆を執りて世道人心に寄與するところあらむと欲するもの、一句一語の末と雖も、これを苟もすべきにあらざるなり。(同)

●中等教育と漢文

吾人は、刻下直に、漢字をも全廢せむと論ずるもの、性急なるに服する能はさるも、中等教育に於て、漢文の一科を別置し、これがために敎師と學生とをして、多くの時間と少からざる勞力とを消費せしむることの、甚だ慘酷なるを信ずるものなり。何を以てこれをいふか、漢文科が中等教育に貢献するところは、これが爲に敎師と學生とが失ふところのものをだにも充すに足らざればなり。試に漢文科を以て中等教育に於ける必須の學科なりと唱道する論者の言を聽かむか、曰はく、漢文が中等教育に必要なるは、啻に一種の文學として學生の詞想を豐富ならしむるのみならず、彼等の品性はこれによりて陶冶せられ、彼等の行爲はこれによりて指導せられ、歩一歩、圓滿なる人に近づく所以のもの、一に漢文の効ならざるはなし。然らば、漢文科は、實に中等教育に於ける樞軸にして、他の諸學科はこれを中心として統一せられざるべからざるなり。我國古來幾千年間の歴史は、明にその然る所以を證明しつゝあるにあらずやと。蓋し是れ、謂はゆる漢學者を中心としたる一派論者が議論の中堅にして、若し一たび此の堅を衝かれむには、彼等は降を軍門に請はざるべからざるなり。

論者の言の如く、過去幾千年間の我國は、實に漢文によりて得たるところ決して尠少ならず、恐らくは今後と雖も、なほ多くの力を漢文に借らざるべからざらむ。然れども、こは現時の中等教育と漢文科との關係を、解釋するところの材料とはなす能はざるなり。その今日あるを致せるは、漢文の力なりとするも、今後なほ依然として、その助を仰がざるべからずといふの理由を見出すこと能はず。中學を卒業し大學を卒業したるもの、なほ小學の敎師に指導を請ふの必要あるか。今の中等教育に於て、漢文科が與ふるところの諸般の利益は、國文また優にこれを與ふることを得、否、敎授と修得とに時間と勞力とを徒費せざる丈、國文却つて漢文に勝れるものあるにあらずや。

又、漢文が、品性の陶冶、行爲の指導に與りて力あり

といふも、そは漢文そのものゝ力にあらずして、即ち是れ儒教の力なり。儒教の道德主義が、日本國民の精神の根抵に扶殖せられ、長くその德性を涵養し來りしは、天下何人の悉かこれを疑はむや。しかもこれを以て漢文の効のみに歸せむとするは、寧ろ笑ふべきの甚だしきものなり。若しそれ儒教の道德主義は、たゞ漢文によりてのみ發表せらるべくして、他の言語文字を以てしては、到底その意を傳ふること能はざるものならむには則ち已む。中等教育に於て、若し儒教の道德主義を必要とすることとあらば、これを國文によりて教授すること、教師學生の便、甚だ多きものあるにはあらざるなきか。

吾人はなほ此の他に於て、中等教育に漢文科を保存せむとするものゝ妄を辯ずる多くの理由を有し、また漢文科を廢止することの利益を主張するに足るべき多くの材料を有す。然れども、昨冬第五回高等教育會議に於て、大勢既に定まり、文部當局者の意向も、略々これを窺ふことを得たるの今日、また呶々の辯をなすの要なきを見る。たゞ少しく吾人の見るところを述べて、世の頑冥固陋迂愚無能なる、漢學者輩の盲動聲爲を誡しむるのみ。(同)

●子守の教育

世に子守學校といふものあらば、縱令、豫期せし程の好成績を得る能はずとするも、吾人はこれを歡迎するに躊躇せざるなり、蓋し、子守は兒女の最初の教育者なり。三ツ子の魂百までならずとするも、人の品性の善悪美醜は、子守の肩にありて、感化せられたるもの多からずとせず。小兒がウマ〳〵と呼ぶは、既に買食ひの味を覺えたる時にして、オ月チヤマイクツを歌へるは、遂に幾多卑猥の俗謠を口にするに至るべき門出なり。小兒の泣くを止めむがためには、己が食ひ殘しの駄菓子を與へ、小兒を眠らしめむがためには、俗謠を歌ふ。買食や、俗謠や、是れ子守の虎の卷なり、性命なり。世の父兄、若し此の虎の卷に代ふるに他の虎の卷を以てし、此の性命に代ふるに他の性命を以てするに意なくむば、その子弟は、遂に人らしき人とだになること能はざるを覺悟せよ。

子守教育といふ、事頗る容易ならざるか如しと雖も、吾人は、妄りに完全を望みて事の成るに至らざらむよりは、寧ろ最も單簡なる方法によりて、直に實行し得らるべき事の優れるを信ずるものなり。吾人は、各市

町村立學校に於て、その放課後の一二時間を利用し、一定の教室に彼等を收容して、たゞ纔に、手工と唱歌との二科を教授するを以て足れりとせむ。手工能く彼等が第二の虎の巻となり、唱歌能く彼等が第二の性命たるに至らば、獨り彼等の幸福に止まらず、實に是れ天下の幸福なり。而して、その教師の謝儀及びその他の經費の如きは、これを子守の主人の負擔とするも可、市町村稅として賦課するも亦可なりとす。たゞ子守の主人は、毎日子守を學校に通學せしむることと、手工に要する物品の給與とを怠るべからず。(同)

●婢僕の教育

下女となり、下男となり、丁稚となり小僧となるもの甚だ多しと雖も、五十の人生を、たゞ下女下男丁稚小僧として、これを終へむと欲するものはあらざるべし。縱令、玉の輿を夢み、二頭馬車を想ふが如きことはこれなしとするも、遂には一戸の主人となり、一家の主婦たらむと欲するが如き希望を有せざるもの、恐くはこれあらざらむ。

下女下男丁稚小僧にして、既に多少の希望を將來に有すとすれば、苟も主人たるものは、彼等に與ふるに、彼等が其の目的を達するに足るべき、助力を與へざるべからず。然るに、世の實際を見るに、夫の謂はゆる主人なるものゝ中、總べての奉公人を牛馬と同一視し、殆ど虐待に近きまでの使役を爲すものは則ちこれあり、これに愛憐を垂るゝものゝ如きは、未だこれあらざるが如し。豈、慨くべきことにあらずや。

助力といふと雖も、吾人は敢て多きを望まざるなり。年齡の多少、男女の區別等によりて、幾干かの參酌を要すと雖も、夜間閑暇の一二時間、これに教ふるに、讀書算術習字裁縫料理禮式の一班を以てせば、則ち大に可なりとなす。或は、主人自ら手を下し難き事情あるものもあらむ、若し然らむには、彼等をして夜學校に通はしむる底の慈心なかるべからず。

此くの如くにして、彼等一般奉公人の前途を照すの光明を與へ、遂に彼等をして、獨立自活、一戸の主人一家の主婦たらしむるに至らば、彼等は長へにその恩義を忘却せざるべく、常にこれに酬いむと勵むに至らむなり。

若しそれ、學齡期中のものを雇入れたる時は、これに普通教育を授くるが如きは、苟も主人たるものゝ當然の義務にして、敢てこれを拒むこと能はざるなり。(同)

●ちりづか（自明治三十三年十二月廿日 至明治三十四年一月十九日）

◉第五回高等教育會議　が、昨年十二月十五日から開かれて、いろ〳〵重大な諮問案が出たので、教育界は、なか〳〵上景氣であッた。

◉中等教育と漢文科　その中でも、特別に火の手を高くしたのは、中學や師範學校の漢文科を廢止するといふことで、平常から迂濶で頓馬な漢學者も、必死になッて運動をしたさうだが、結局、師範學校本科生の分丈は、從來のまゝ据ゑ置くことゝなッた丈で、他はお氣の毒だが廢止することになッた。

◉高等教育會議の墮落　なンでも、古くなると腐れるものだが、高等教育會議は、まだ五回しか開かれないのに、早く既に腐れかゝッたやうである。會議の日子が多かッたからッて、それで善いとは思はないが、重要な議案の澤山出たのを、たッた一週間位で以て、奇麗さッぱりと押し片附けられたのは、善く言へばマアお手際とも言へるだらうが、高等教育會議とも言はれるものゝ處置としては、その態度が甚だ愼重を缺いて居るとしか思はれない。苟も國家將來の教育のことに關して、多少の誠意を持ッて居るものなら、議案に接して、少しは思慮も致すべき筈ではなからうか。殊に甚だ珍妙不可思議なのは、漢文科廢止が、師範學校本科生の方では否決せられ、中學校の方では可決せられたといふことである。同一性質の事柄が、同一議員の協議によッて、二樣の結論に到着したといふのは、確に教育の將來に些の慮るところはなく、たゞ浮氣はその日の出來心的にやッてのけたのだと言はれても是非がなからう。墮落といふのも、まンざら無理ではありますまい。

◉高等師範校の紛擾　これも、昨年末のことである。『萬朝』などのいふところでは、曲は伊澤校長にあるらしいが、それは兎も角も、全國幾多師範學校の上に位し、其の模範を以て人も許し自ら任じて居る高等師範學校で、校長と教師との軋轢だてやら、教師の同盟辭職だてやら、あンまり人聞きの善い話ではない。大袈裟に言へば、實に醜態陋狀である。そしてその責は、一に伊澤校長の不德に歸せられても、厭とはマサカ言はれまい。

◉帝國議會と文部省　文部省が、本期の議會へ提出するといふ議案は、（一）實業教育國庫補助法改正案、（二）教員退隱料に關する法律改正案、の二ッである。又、追加豫算として、本期議會に請求しやうといふのは、（甲）二大學、二高等學校、一女子高等師範學校の增設、（乙）國語調査會設置の件、（丙）學制調査會設置の件、の三つであるさうだ。うまく通過させたいものである。

◉教科書審査會廢止の建議　衆議院議員工藤行幹氏外數名は、本期議會に、小學校教科書審査會を廢止して、國定教科書編纂の制を定め、尙時宜によりては、無代價配布を爲すの建議案を提出するさうだが、誠に大贊成である。

◉國定教科書編纂　去年の今月の本誌の上に、教科書審査會の醜陋を憤慨し、併せて國定教科書編纂のことを、當局者に向つて建策したが、今年もそろ〳〵と教科書調査に關する醜聞が聞え出した。しかしまた一方には、國定教科書編纂の聲が、大層高いやうである。どうか天下の輿論を喚起して、當局者の英斷を促したいものだ。

◉澤柳政太郎氏の國定教科書論　身、文部に局長の椅子を占めながら、曾て公會の壇上に立つて、改正小學校令に對する批評を反駁せられた澤柳氏は、近頃また『日本』紙上に、國定教科書論を揭げられた。當局者既に此の意あり、我々の希望の遂せられるのも、蓋し遠いことではあるまい。

●私立中學校の生徒定員增加運動　昨年の暮に、府下私立中學校の某々等は、一教場五十名といふ定員では、どうもうけが薄いから、是非共も少し人數を殖させるやうに、文部省へ交渉しやうといふ相談をしたさうだが、どこまで慾の皮のつッ張つたことだらう。ところが、郁文館と明治義會とが特典を奪はれたので、その運動も、自然消滅の姿になつて居るさうだ。結構々々。

●繼子と盜心　廣島市の某小學校では、その生徒の中で、盜をした十四人の小供について、一々その家庭の有樣を調べたところが、貧富と小供の邪惡との間には、何の關係も見出すことが出來なかッたが、十四人のうち十二人までは、孰れも繼母の手に養育せられたものであるといふことを、知り得たさうだ。

●風俗壞亂　『明星』が裸體畫を揭げて發賣禁止となッてから、『戀愛文學』、『文藝倶樂部』、共に同樣の理由で發賣禁止となッた。

●『讀賣新聞』の公德養成　去年一ヶ年は、家庭教育の方面に力を注いだ『讀賣』は、今年の元日から、公德養成風俗矯正の方面に力を盡し出したのは、能く新聞の責任を知ッたものと賞してよろしい。たゞ「百發百中」などを揭げて、遊獵を奬勵するなどは、甚だ以てその意を得ない。

●『太陽』の教育欄　桂月君の筆を以てして、桂月君の經驗を以て、大に教育界に花を咲かせられることゝ待構へて居たのに、大したこともないのは、一體どうした譯だらう。

●『女學世界』と『商界の少年』　共に此の一月の誕生にかゝるもので、前者は博文館、流石にぬけめなく、賣れるやうに編輯せられた。後者は三省堂、一寸思つきである。

●鳩山和夫氏　米國エール大學から、大博士の學位を授與せられ、また一週間の講演をも請はれたさうだ。名譽なことである。

●杉浦重剛氏　高等教育會議々員及び副議長を辭し、伊澤修二氏高等師範學校長を辭して杉浦氏の後釜に据り、澤柳政太郎氏は伊澤氏の後を引受けて高師の校長を兼任せられた。（竹友）

宗教界小觀

●大學傳道と大菩提會

基督教徒は本年を期して大學傳道なるものを爲し、一擧に傳道的成効を見んとし、佛教徒は大菩提會に依て大に企畫する所あるべしと稱す、聲の大なるもの必ずしも大なる成効を示さず、大菩提會の如き素よりいふに足らず、吾人は基督教徒の大學傳道なるものに於て、亦大なる希望を囑する能はず、（方寸）

●新宗教なるもの

佛教と云へば佛教氣質あり、基督教と云へば基督教的性質あり、已に佛教といふ世の同情を失ふや太だし、已にキリスト教と稱す、世の感情に合せざるもの多し、佛教と云はす基督教と云はず、而も佛教基督教の精神に依據して一新宗教を唱ふるものあらば天下靡然とし

て歸するを見ん也、（同）

●開宗者たるもの

已に殿堂あり、伽藍あり、末寺あり、門徒あり、威風堂々、今日より各宗本山なるものを見れば素より其雄大を誇るべしと雖も之をその宗祖の當日に溯て見んか勢力の微々たる實に其有無を疑はしむべし、親鸞が關東より歸て京都に隱栖したるの當時誰か亦今日の東西本願寺を想像し得たる、道元の曹洞宗に於ける、日蓮の日蓮宗に於ける皆然るべき也、今日新宗教の開立をいふもの各宗今日の巨大をを見て、やゝもすれば先づ前途の茫漠を恐る、然れども殿堂伽藍末寺門徒の依て巨大を致したる所以の來由を察せば彼れ何人ぞの意氣を發せざらんや、唯一宗を開かんとする程の士は自ら人に過ぎたる節あるべし、薄志弱行人生の得喪に汲々し利名の衝に馳驅して一片の反顧を知らざるもの丶如き到底古立教者を去る遠きを想はさる可らず、（同）

●佛教青年と説教

説教者とは實に宗教を説く所の人、各宗に於て尤も尊敬せらる可きの人たらざる可らず、然るに佛教殊に眞宗に於て説教者と云へは心あるものをして自ら一種輕侮の念を生せしむるものは何ぞや、蓋し學問あるは辯舌に咄にして辯才あるものは往々にして學問に鈍なり、古來二者を兼て能く大説教者として布教傳道の實を擧けたるもの太だ稀也、即ち學者と説教者との間自ら分れて學者は一意經典の註疏に從事し、説教者は無學不才にして唯辯舌を弄して世の愚民の歡心を求むるのみとなれるか如し、而して實際の感化は學者に非ずして説教者に在り、眞宗をして今日の眞宗として繁昌せしむるもの勸學司教若くは講者嗣講者の類に非ずして實に無學無術品行志操取るに足らずと稱せらるゝ説教者の力なりと云はざる可からず、然れども今日己後の教界に在ては是の如き不具の説教者が一種奇怪の聲を發して赤鬼青鬼の説を爲して世を瞞過するを許さず、苟も世に立ち宗教家と稱し僧侶といふ殊に稱して説教者といふ必ずや學あり、辯舌あり、少くともその所信を放發して至大至高の靈光を世に紹介し得るの技量を有せざる可らず、今日の宗教青年たるもの、徒らに賓談俳諧の無學不術を嘲罵するに止らず、彼等に代て學あり、識あり、辯才ある新説教者として如何に活潑なる新傳道を始む可きかを講究すること尤も急の急

なるものと云べし、(同)

●基督教者の説教

基督教界の説教家として押川氏の如きあり、海老名氏の如きあり、横井氏の如きあり、小崎氏の如きあり、井深本多等の數氏あり、辯舌風貌皆一部の信徒を感激し、吾人門外者をすら頗る啓發せしむるものなきにあらず、佛教僧侶の鄙猥なる實談を聞くものと素より同日の談に非ずと雖も要するに所謂書生向にして已に世故の甘酸を嘗め悉し人生已外に悠々の地を求めんとするものに於てはやゝ味の足らざるあるを覺ゆ、矧んや無智盲昧の下等翁媼の如き是等諸氏の流暢なる說教を聞くも或は解し得ずして已むもの多かるべし、少くとも下等翁媼を満足せしむるに於て佛教僧侶は僅に幾日かの先輩と稱せざるを得ず、基督教か是の如き多數の說教者を有し尙汎く下等民間に及ぶ能はざるもの自ら理由なき能はず、(同)

●關東の眞宗

關東八州は眞宗の高祖親鸞二十五年の足跡を留めたる處、稻田の草菴は實に眞宗發展の盤地なるもの也、而して今日關東の眞宗なるもの果して如何、東京は輦轂の下、東西本願寺が稍、力を致さんとするを見る可しと雖も其他の地方に至ては眞宗感化の及ぶ所、殆んど之あるなしと稱して可也、流を眞宗に汲むもの誰か當年爭奪苦勞機、却杷江山附落暉の感なからざらん、關西の地は尙暫く舊信仰の徒に一任すべし、苟も新信仰を抱持し大に眞宗的新傳道を期するものあらは馬を八州の平野に驅る亦快ならずとせんや、想ふに恩容一去六百餘年、時移り物換りたるも筑波の山長く碧に刀根の江水滾々として絶せず、尙佛種の全く腐死し去らざるものあらん、吾人は眞宗青年信徒諸氏か奮勵大に新敎田否舊荒田の開拓に盡すあらんことを望まざる可らず。(同)

饒舌録 (贅七)

○先年末に死んだ越前の日種宗淵といふ人は宗教に取て敢て惜しむ可き人物でもなかつたが、一種の奇人として面白ひ人であつた、僧侶が縣會議員となつたのは氏が始てゞあつてそれから紀州の古河龍玉氏や大阪の織了悪氏等がなつたやうだ、

○氏が法衣を着して議事堂へ出たところが議員一人が聲も荒らゝにコヽは本堂ではない法衣を着た議員を退場しろと議長に要求した、すると氏は例のしがら聲を發して拙者は坊主である、法衣は坊主の正服である、

正服着用で出席して何の差支があると抗辯し遂には氏の法衣着用を許したさいふ事ぢや、

○氏が還事さしては澤山殘て居るが大概人をなぐつたとかぶつたとかいふやうなことばかりで必ずしも氏の名譽を増す譯でもあるまいから予は之を數ふるを欲しない、死に角意氣豪壯坊主には珍しい豪傑風の人であつた、

○氏の從兄に當る人で廣瀨明誠は梅渚さいふ人があつた、森春濤の門人で漢籍が出來て詩が上手であつた、人は同氏の薫陶にやその亂暴にも似ず始終詩韵含英などを離さなかつた、

○遠州灘で暴風雨に逢つて滿船の人悉く生氣を失つたに氏のみは獨り泰然として酒を飮て平氣であつて……帶將豪氣入東京などの句があつた、

○遠州灘で思ひ出したが武田無堂も本山を辭して東京に上る舟中にて、「海天映出芙蓉雪。一任浮雲相往還」さいふ詩を作つたとの事ぢやが氣取た所は面白ひが本山などを去る詩にしてはあまり仰山ではないか、

○老僧連中はぢきに本山さいふが老僧等の生殘し居る間の事ぢやこれからの青年には本山は一向ありがたくもなんさもない、

○宗教改革は本山を改正するのぢやと思ふて居るものもあるやふぢやが何偏改正しても宗教改革は出來ない、宗教の改革は各個人々が安心決定する時に成就するのぢや、

○東本願寺は頻りに借金をこしらへることにかゝて居るがあればあさにごふする積りぢやらふ、北濱銀行などに土地建築物等を質入して居るとの事ぢやが六十餘間の大堂が質流れさなる日がなければよいが、しかしあんな質流れは銀行の方では一寸困るぢやらふ、

○東本願寺の事を思へば西はどんなに仕事をしてもよいのぢや、少々借金をしても是非慈善財團を完成してもらゐたい、金を集めてからさは實にまわるい話ぢや、あるだけの力でどしく始めるがよいではないか、

○西本願寺には仕事の出來る人物は一人も居らぬ、東の石川に對するのは大洲だがモハヤ病氣さ老衰とで駄目だ、利井も一頑老に過ぎない、小田の如き一守錢奴といふ可しぢや、武田は粗忽、藤島は吝嗇、里見は狹量、其他碌々擧るまでもない、

○東にも人物といふ程のものはないが中巳下孫に青年の中には間に合ふ人が多ひ、西は青年間にも太た人物がすくない、

○東西本願寺の氣風を比較して見るさ東は自由黨のやふで西は進歩黨に似て居る、東の不始末の代りに兎角仕事を遣る所などは自由黨的ぢやが西が議論のみ多くして實行になるさイツモ後れを取る所はどうしても進歩黨ぢや、

○東が宗教法案に盡力するのは敢て惡くはないが西は巳に反對を唱へた巳上は斷然手を東本願寺さ絕ち全く方面の違つた所に向ふ可しぢや、先づ西の今日の地位にては社會事業に全力を擧るが一番適當の仕事らしい、

○金ばかりを集めても人物はどうして作る氣ぢやらふ、社會事業の如きは尤も人物が肝要ぢや、人物は決して金で買ふことは出來ない、

文學界

●櫻痴居士の活歴僻

凡そわが劇の古より存するもの、歌舞伎座の舞臺に演ぜられんとするに方りては、必ず一たび櫻痴居士の改

竄を經ざるべからず。今春の同座に演ぜられたる『玉藻前』、はた實に居士の加筆にかゝる。しかも、その加筆せられたるを見るに、所謂舊劇の美とする所をほとんど破却して、原作に存する戯曲的興趣は減殺せられたるが如し。けだし、舊劇の美とする所は零碎の邊にあり。しかるに、居士の改竄する所、はた毎にこの邊にあり、こゝを以て、舊劇の美とする所は、居士のために削除し去らるゝ也、而して居士は、これを削除したるの跡、代ふるに前に勝るの美を以てするかといふにしからず。その考證的理窟と俗智的識見とより構成せる極めて沒趣味なる極めて淺薄なる所謂活歴美を以てするのみ。明治以前の作劇家がステーヂ、エッフェクトのために苦心したる結構、書きをろし以後の優人が舞臺面の興趣のために工夫したる裝置、これらは居士の解する能はざる、否、意にかなはざるものにして、優人及び舞臺をして、及ぶべきかぎり、當の時、當の境、當の人に接せしめ、一歩すれば現實と徑庭なからんをこそ、その極致とする所なれ、所謂活歴といふ名の出所は、けだし、こゝにあるか。これを『玉藻前』に見るに、舊劇の所謂時代的服裝は鎌倉樣の活歴風となり、江戸的文致の詩味饒かなる白は、平家琵琶調の露骨なる臺辭となり、變幻出沒、深く晦したる趣向は、破綻露出、初めより窺ひ得べきものとなり、すべて、作者橘平、一鳥の二人が經營したる舊劇的長所は、悉く拭ひ去られて、明治思想を以て補綴したる不具的戯曲となり了れり。もしそれ、左大臣家より右大臣へ遣はす使者を呼んで御上使といひ、農夫みな鎌倉樣の衣服を纏へるに、醫師ひとり江戸式の服裝をなせる、上使來るの一語、ガトウ口にいはしめて、密會の場を閉づるの木の頭となしたる、もしくは「鷲塚金藤次、素袍の肩肱いかつげに」といふの所、登場の金藤次、烏帽垂衣を着け來つて、チヨボ語者をして、驚かしめたるが如き、咄々何等の滑稽ぞ。かくの如きの滑稽、居士等が、常に机上戯曲と嘲る今の詩人の作といへども、恐らくは、いまだ、あらざる所、況んや、劇に衣食する十年、歌舞伎座の立作者たる居士の作に於て、これあるを見んとは、むしろ、はなはだ異むべきにあらずや。しかれども、異むを要ひず。これ、強ひて活歴的ならしめんとして、全局の上に破綻の生ずるより來るもの。居士の改作にありて、毎に見る所の滑稽にして、ひとり、これにのみ存するにあらざる也。

思うに、居士は、かくの如く修補するを以て、實際に

接せしめたるもの、すなはち所謂活歷主義の本意を了したるものとなさん。しかり、その修補したるものを以て、原作に比すれば、幾何か實に近づきたり、されど、これを修補して實に近づかしむると、實に近づかしめんがために、原作の美を破壞すると、藝術上に於て得る所の利はいづれにあるぞ。いふまでもなく、實に得る所少くして美に失ふ所多し。言を換へていへば、修補したるがために、益する所ほとんどなくして、損つる所、はなはだ大なり。それ、すでに、益する所なくして損つる所大なり。しからは、すなはち、むしろ、はじめより修補せざるに如かず。何を苦んでか、故らに筆を加へて、この無用のことをなすに及ばんや。櫻痴居士は明治の才子と稱せらる。しかも、いまだ、この理を知らざるか、或はこれを知るも、その活歷僻に驅られて、この無用のことをなしたるか、もしくは、これをなすにあらずんば、立作者たるの職務は、他に存せざるか。いづれにもせよ、居士が筆を舊劇に加へて、みだりに補綴するは、吾人の服す能はざる所なり。吾人は、居士が、その非をさとりて、速に補綴の筆を措かんことを望む。(春湖)

●風俗壞裂の意義

所謂風俗壞亂といふものゝ意義、吾人の見る所を以てすれば、二樣に解せらるゝが如し。記事そのものが、すでに、風俗を壞亂したりといふこと、その一、記事そのものは、風俗を壞亂せずといへども、そを讀むものに向つて、風俗を壞亂すべき感情もしくは擧動を挑發せしむといふこと、その二也。前の場合にありてはその責は、いふまでもなく作るものゝ上にあり、されど、後の場合にありては、作るものにあらずして、讀むものゝ上にあるなり。前者は、常識だにあらば、たゞちに見て以て、その罪を斷ずるを得といへども、後者は、いかに常識に富むといふとも、審美的鑑識の勝れたるにあらざれば、決して曲直を判つ能はざる也。何となれば、苟も文を以て家に名づくもの、何人も風俗を壞亂せんと欲して、初めより筆を援るものなく、かつ、作家、無意識にして、描きたる所の記事、後に至つて、意外にも風俗を壞亂することあれば也。例へば、嘗て『五寸釘寅吉』の劇を見て、盜心を起したるものありしが如し。『五寸釘』の作者は、觀者に盜心を起さしめんと意識して筆を援りしにあらず。しかも、盜

心を起したるもの、すでに、そを起すべき素を畜へしが故に、この動機に觸れて、外へ發したるのみ。彼等が『五寸釘』を觀ずといへども、他の動機に觸るれば、盜心を起したらんこと、なほ、『五寸釘』を見たる、他の多數の觀者が盜心を起さゞりしによりて知るべし。この場合に於て、責は、盜心を起したるものにありて、作者にあらず。しかるに、もし、これを以て作者を罪すべしといふものあらば如何。これ、いふまでもなく寃也、酷也、不當の裁斷也。吾人が風俗壞亂の意識を解するや、かくの如し。知らず、司直の吏が下す所の意義はいづれにあるか。（春湖）

●『破垣』の詩的價値

『破垣』の描寫は露骨也、淺膚也、寫實の本義を謬れるもの也、實感を挑發して、他の劣情を催起する能はざるもの也。これを讀んで、劣情を催起するものは、讀むに先だつて、すでに劣情を催起したるもの、讀むに及んで、はじめて催起したるものにあらざる也。吾人が、『破垣』の描寫に對して感ずる所かくの如し。この描寫、果して風俗壞亂に値すべきものなるか、否か、吾人は當局の人にあらず、いづくんぞ、これを知らん。吾人は、たゞ審美的標準より見て、その詩的價値を批判したるのみ。もし、聊かいふを得べくんば、吾人は、作者が、寫實の本義を謬りたるがために、不幸にして、司直の吏に風俗壞亂と認められたるにあらざるかを疑ふと、いふのみ。（春湖）

時文片々

觀測先生

◎新年に入つて、雜誌の發刊するもの、頻々として相踵ぐ。曰く『新文藝』、曰く『東洋時論』、曰く名古屋の『秋水』、曰く、長崎の『崎陽文學』。氣運來りて雜誌を出だしめたるか、雜誌出でゝ氣運を迎へんとするか。

◎紅葉先生の談によれば、先生又々「手勢を率ゐて雜誌界に打つて出づるの計畫」なりといふ。第拾期晴れの出陣、知らず、着なす所の物の具は何ぞ。緋威か、卯の花威か、そも〳〵小櫻威か、吾人は徐に鋭を養うて、先づその陣立を拜見せむ。

◎先生曰く、「抑も九と云ふ數は硯友社に取つては如何なる惡數であるか」と、否、々、硯友社の惡數は九にあらずして旬也。

◎『絲不絲』、『松の下露』ともに佳ならず。柳浪氏、近時漸く詩趣を減じ來れり。『小說界に入れる由來』に於て、吾人は寧ろ慼をひくこと多し。

◎露伴氏の『二日ものがたり』、嘖々として賞揚する批評家あるも、吾人は修辭の外、他に稱すべき所あるを知らず。この篇をして、『雨月』、『西行』以前に出でしめんには、或は博文館の『帝國文庫』に收めらるゝの榮

を擠ひたらんも、今に於ては、この事能ふべからず。已むなくば、これを後に傳へ、第二の『帝國文庫』を編むものをして、野卑なる『文藝倶樂部』中、なほ、この高遠の文字を厭むる所ありしを知らしめんか。

◎天外氏の『理相の讀者』、説は必しも佳ならず、されど、今の作家、徒に時尙を趁うて見、定まらざるの日、氏、ひとり作に關する意見を公表して憚らず。自信の厚き稱せざるべからずさせんや。

◎『色男になる法』、『女に惚れられる法』、これ發賣禁止の所分をうけざる『文藝倶樂部』に於て見る所。

◎學海居士の『經歴談』、例によりて過去の回顧也。過去の回顧は、進歩すでにやんで前程望なきもの丶常になす所、居士老いたりといへども、いまだ八十に滿たず、何爲ぞ、いたづらに過去を回顧して少壯時を誇らんさするか。勸懲論の氣焔はいづれにある、同盟軍の元氣はいづれにある。書はんがな、文壇の齋藤別當。木曾の冠者なしといへども、いづくんぞ、一人の樋口次郎ながらんや。

◎幽芳氏の『小見觀察』、嘗て一たび大阪毎日新聞に掲載せられたるもの、しかも、この篇、ふたゝび『新小説』に戴錄すべきほどの價値あるものなるかを疑ふ。

◎講談の時代は去りて「雜錄」の時代は來れり。『赤毛布』、『相[illegible]』、『相撲大全』、『賭閑斷』、『諸國名所』、『名家墳塋』、『消防夫の話』、『名士の幼[illegible]時』等、人は架空の講談に飽きて實際の社會種を歡迎せんとす。

◎『文庫』所戴、瀧澤秋曉氏の『大尾』は近時稀に見るの佳篇、人のこれを知るもののなきは憾むべし。

◎『文藝倶樂部』、新年附錄さして世界の名畫を添ふ。靑軒大通の主義なるこの誌としては、はなはだ殊勝のことなり。

◎美術同好會さいふもの、美術保護、美術家奬勵のために運動を初む。今の時は運動の世の中、運動にあらずんは効を奏せず。運動せよ、しかれども、私情を去つて運動せよ。

◎鐵幹氏の『明星』が、その詩文以外、別に新古の繪畫を掲げて藝術的趣味を鼓吹するは、吾人の深く喜ぶ所。このごろ、裸躰畫の厄に遭うて、或はこの事やむにあらざるかを歎いたるに、依然これを掲げて萬にかはらざるを見る。鐵幹氏が藝術のためにつくす所、はなはだ稱すべし。

社　會

◉嗚呼

幕は下ろされて再び開きぬ、非常なる物質的文明を以て誇りし十九世紀は暗と過ぎて、舞臺は見よ爛たる紅光の影何物をか現ぜんとはする、思えば讃嘆するの事は少く時は短くして、嗟嘆するの事は多く時は長き、これ永劫變りなき世の定りなりと雖ども、動もすれば痛嘆すべきことの多きぞ遺憾なる、されども去るものは遂に追ふべからず、唯期す今の非なるものを改めて、來るべき時の面影に、穢れる印象を留めざらしめんには、新年に於ける新聞及雜誌を通覽するに、過ぎし年の末に於ける此汚風に堪えざりけん、社會の問題は抵ねこの改善に步調を揃へたり、特に讀賣新聞の如き、昨年末の廣告より已に此事に付て豫告するあり、一月

の紙上には果然論說には、文部、內務、經濟界、東京市等に對して公德養成の反省を促し、雜報には歐洲諸國に於ける人民の公德の裕かなる例證を揭げて、大に警醒する所あらんとす、火を叫ぶものは已に眉を燒くものにして、事の此處に及べるは已に腐敗の源流甚だ遠きを知るに足ると雖とも、今日に及んでは、實に以て然かせずんばあらざるものあり、吾人亦大にこれに付て云ふ所あらんとす、

讀賣新聞が數日連載せる公德養成に對する反省の要を摘めば、

一、敎育上よりの改善
　根本の對機を小學校兒童として、第一に彼等に公德心の萠芽を樹ゆること

二、商業道德の振作
　衣食足て禮節を知る、國富て公德云ふべし、一時の少利に虛僞を敢てして、永遠信用の害を流すは國利民福の基にあらず

三、首府人民の公德養成
　市に醜を止むるは醜自ら醜ならずして、人民敢て醜をなさしむるものなり、醜を除かんとす、宜しく醜なりえざるの境を作れ、

四、公德を敢て犯すべく挑發され易き原因を杜絕せよ
　我國に於ける警察制度の完全は賀すべきも、これやがて罪を犯すものゝ多きより來れる必然の結果にして、時には此完全却て悖德の原目となることあり、と、

○○○○

尙亦日本新聞は一月八日の紙上に於て「公德の敗壞」なる論說の中に、木村芥舟が書きし漫筆の首章二節を引用して、德川幕府の初世に於ける名臣土井利勝が公德に想ひ到れる甚だ薄きを說き、事の今日に到れる源流の甚遠きを慨したり、

されば今日我國に於ける公德の壞敗は、決して近きにあらずして、德川の初世業に已に其小芽を萠せるを惟へば、吾人が其挽回に力を盡すや、又頗る勵めざるべからざるものあり、

されば吾人は如何にして此問題に勵むべきか、今日日本の社會に於ける非なる部分を列擧すれば、多々增々繁きを加へて、其善なる部分の果して何れに存するやを疑ふに至るものありと雖ども、吾人は敢て惡所を批難して殊更に毀訾罵倒をのみこれことゝするにあら

ず、聊かに其由來する所を尋及して世道人心の爲めに盡くす所あらんと欲するものなり、

●國是の一定――國民の覺悟

總ての時代を通じて總ての方面に於て、舊き制度信條の破壞し去られて、未だ新たらしきもの、與へられざる過渡の時代は、抵ね混亂紛擾を極むる其事なりと雖とも、今日の如しくかく溟々濛々たる所以のものは、原より人心の基礎となり其信念を維持すべき活躍したる眞宗敎の欠亡に存するは疑ひなしと雖とも抑も亦國是の一定する所なくして、國民の依て以て覺悟する所なきにあらずんばあらず、今日我國の人民は日本の國民として抑も如何なる點に進むべく、尤も適當に、將た良好に安全なるべきか、換言すれば彼等は嘗て孜々として勤め勵み學び磨て、究竟日本國民として何をなすべきか、更らに日本國民として如何に覺悟することが尤も至當なるべきか、國權を張らんが爲めか、國を富まさんが爲めか、唯戰つて强き兵を養はんが爲めにか、唯理窟のみ多くして實蹟少き學理の風を吹き回さんが爲にか、天下國を建つるもの多し、或者は軍國を以て、或者は商業を以て、或者は疆域を擴張するを以て、歩武整々造次顚沛常に其ファイナルホープを忘るゝことなし、英國の商業に於ける、魯國の侵略に於ける將た支那人の猜疑倚且つ商機を忘れずして常に能く此事に勵精なし、彼等の旗幟は常に鮮明にして總ての事其の豫期と違ふとなし、乞ふらくは清國政綱の紊亂を笑ふ莫れ、政府はたとひ、顚覆すとも商人としての淸人は永久遂に替ることあることなし、然るに我國人の爲す所をみるに、政客として學者として、商人として實業家として、其一個人の資格に於て、裕に他を壓するものありと雖とも、志操常に公供の念に存せず、動もすれば各自孤立して唯自らをのみ利するに勤む、こゝに於てか公德の念の如き寸毫も生ずることなく、我利の爲めに常に他を譎詐し、他を排擠し、永遠の利を顧みず社會共存の益を思はず、滔々たる天下は目前に反覆表裏して、少しも怪まざるのみならず、その如く巧妙に狡猾なり得ざるものを目して、愚と呼び痴と呼ぶ其個々これ國民が趨向すべき方針の一定せざるによるにあらざるなきか、夫れ然り然らば如何にして國是を一定して國民の趨向すべき方針を指示すべきか。

讀賣新聞の所説に於ける警察制度の事、東京市民の事亦要なりと雖とも、詮ずる

●教育の改善

にあり、

●教會制度の改善

にあり、教育の事に就ては讀賣新聞の說く所粗ぼ盡くせりと雖ども、更らに望むべきは、小學兒童に公德の養成をなすと共に、國民前途の方針を指示し、訓練するにあり、敎育の業たる頗る迂遠なるに似て、然かも決して迂遠ならず、幸にして今日其基礎を樹つるをえんか、吾人が時世の趨勢に憤慨して、一方に囂々たるの間、表面は波瀾起伏頗る混亂せるが如きの間、暗潮は自然に流動して知らず〱のうち他日万丈の光焔を煥發すべき偉大の潜勢を養成すべし、次に敎會の制度的改善は、宗敎界の改革を待て始めて眞誠の成果を見るべしと雖とも、然かも今日の宗敎界を見れば、滔々たる積弊は誠に眞に堪ゆべくもあらず、人間道義の方針を示し、個々團躰も心靈の安慰は日日に何によつてうべきか、人としての言行、悖理の罪惡、誰れかこれを敎へ、これを戒むるぞ、吾人は國の爲め、人の爲め大に此改善を催さゞるを得ず、かくの如く内外相應じて、進みて、未來の成功をまつの間、目下最急の要務としては吾人は前號より稱道しつゝある

●禮法の制定

を更に絕叫せずんばあらず、これ蓋し吾人の私見にあらず志ある人は皆悉く玆に憤慨せざるものあることなし希くは天下の有志及び國家の當路者一日も早く玆に見る所あれ(堀田斬虹)

雜　評

道聽途說

飛　目　長　耳

●中村彌六は終にたゝき落され、星亨も遞信大臣を罷めた、今更悟つた譯では無いが、正義は如何しても最後の勝利者である△萬朝報が最初に中村の罪惡を素破拔いた時に、中村は使を朝報社によこして、僕の方にも辯開する事がある、就ては僕自身貴社に出て辯解したひが、病氣だから失禮ながら誰か一人來て僕の言分を聽て呉れろと、言ふて來た△ソコデ朝報社から二人の社員が中村の宅に往つて、中村の所謂辯解なるものを聽いたが、辯解らしい辯解は一つも無かつた△中村

が辯解として幾たびも繰り返へしたのは、單純に斯様である「自分が亡命客に關係したのは、實に死を決しての事である、區々たる利益、金錢などは素より眼中に有るべき筈がない、大丈夫の事棺を蓋ふて後定まるだ、眼前の小事を見てさう／＼非難するのは無理じや無いか」△イクラ死を決しても生命を抛つても惡事は惡事だ、大丈夫の事棺を掩ふて後定まるなど〻豪傑がつても到底ダメである、ソンナ薄弱な辯解で人をごまかさふとしても世間が承知せぬ。

●惡事を働いて辯解に窮した時には、大丈夫の事棺を掩ふて後定まるなど〻、しらを切るより外に仕方が無い、見玉へ星亨も矢張中村と同じやうな事を言ふて居る△星が讒で社會公衆に告ぐといふ辯明書の中に「大丈夫の事棺を蓋ふて後知るべし」との文句があるではないか

●又も芳川越山の近什を讀者に紹介しよふ

寄懐合雪翁在無隣菴次其近製
韵四首

鐵騎誰清紫塞塵、角巾閑揖白雲賓、秋風緬想東山晩、錦繡堆明醉美人、
着烟不染馬蹄塵、一路千章松作賓、休道山林無樂事、門前攜立鼓琴人、
霜林隔水欲無邊、一葉漂搖五色烟、冠者欽君小春節、和風詠歸浴沂天、
無隣菴峙夕陽邊、三十六峰傲翠烟、與發山陰雪霽裏、步移嵐峽月明天、

●大東義徹は中村彌六を評してこんなことを言ふた「中村は疵のある利刀のやふなものだ、寶物とは爲らぬが能く斬れる、見玉へ議會で非の角を撲つたのも、鈴萬を撲つたのも中村で、他人が一ッ撲つ間に中村は確かに三ッ位撲つ、必要な人物じやないか」妙な所を重寶がつたものだ

●例の大三輪長兵衞が先月下旬朝鮮から日本へ來たのに就て、種々の説がある△一説には大三輪は韓廷の賴みを受けて、日本に在る朝鮮亡命客を外國に逐ひ拂ふ爲めに來たので、其の運動費として彼は四五万圓を韓廷から受取つたといふ事だ△けれど他の一説によると、大三輪の用向はソンナ陰險なものでは無い、實は米國に在る義和宮の費用やら、日本より歸韓すべき陸軍學生の費用やらを支拂ひ、兼ねて韓帝の御用品を買上げる爲めに、巨額の金を携へて來たのだといふ△二説の中孰れが信實だか解らないが、余輩は偏に後説の

信ならんことを希望する

●高等師範學校長伊澤修二は先月二十二日頃辭表を提出して二十八日に依願免官となつた△伊澤の辭職した理由は世人も承知してる通り、伊澤が彼の通りな不品行で狂氣じみた男で、高等師範學校内に全く人望が無い上に、先頃英語會の事件から、附屬中學校の教師が手痛く反抗を始めたからだ△けれど伊澤は剛情にも自分の不人望を以て辭職の理由とせずして、おつな口實を付けた△其の口實は「自分は貴族院議員として現内閣の増税に反對する、既に現政府の政策に反對する以上は、勢ひ其の政府の下に官吏となつて居ることが出來ぬ」といふのだ、△しかし政治と教育とは相混淆すべきものでない、教育の機關たる高等師範學校の長が、政府の財政問題などの爲めに左右し得らるゝものでないのは、明白な道理である。伊澤が政府の増税に反對するのを理由として辭職するのは甚だ滑稽だ。

●此の程文相官邸へ松田文相を訪ねて來た徳島縣の有志者がある、懷中から恭々しく建白書やうの一篇を取出して「是は伊藤首相に獻ずる所存である」といふて、聲高々と讀み上げた△其の要領は、政友會が議會に優勢を占めるのは伊藤の德よりも寧ろ板垣伯の勞に由るのだから、侯及び他の閣員は共力して伯に酬ゆべき筈であるのに、さはなくて却て伯を冷遇するとは甚だ不人情の仕方ぢやと云ふのだ△松田は鹿爪らしく聽て居たが、軈て「如何にも同感なれど、自由黨を伊藤侯に捧げた最初の發起者は板垣伯で、其れに伯は中々潔白で、伊藤侯などよりはズツと高尚な人物だから、何も酬なとをせぬ方が却て伯の本意に叶ふ次第ぢや」と答へた△有志者も此の返答を聞て、其れも、尤もだといつたやうな躰で引取つた、スルと松田は座に在つた客を顧みて「田舍者は正直過きて困るよ」と笑つたとサ、

●先頃歸朝した山根警察醫長は、佛國巴里に於て、日本の火葬に關し一場の演説を試みた其要點は斯う云ふのだ△日本の火葬は千數百年前より行はれたが、殊に眞宗派では盛に之を行ふた△一番最初に火葬にされたのは持統天皇時代の篤照といふ浮屠であつて、是れは丁度西暦の六百九十八年頃だ、其後西暦七百年に於て持統天皇も火葬に行はせられた△又日本に於て始めて特に火葬場といふものを設けたのは二百三十四年以前で、其の場所は今の東京小塚原である、爾後東京及び其附近に於て數ケ所の火葬場が增設されて、今では既に七ケ所に及んだ△火葬竈の構造は丸岡氏の發明せし

者で、伊國のシーマンの發明した者も略ほ之に似て居る

●渡邊洪基は此間或人に向てコンなとを言ふた△日本の政事家の多數は學問も無ければ財産も無ひ、甚しきは議會に出る議案を了解し得ぬ者が多い、彼等は怠惰で横着で、自分の勞力勤勉を以て生活するとを好まぬ輩だから、實着に正直に事務を取るとも出來ず自分相應の小官吏に甘ずるとも出來ず、何でも最小の勞力を以て最大の利益を得やうと思うて居る、恰も德川時代の浪人のやうな者だ、あちらこちらと政海を漂ひ廻つて何か利益になる物に取り付かうと探がして居る、實に厄介なものよ、今の政事家には政綱も主義も目的も有つたもので無い、實に困つたとだ

●高田早苗は此頃或處での演説に政界の腐敗を嘆息してコンなとを言ふた△余(高田)は初めて議員となつて議會に入つたときに、一番驚ひたのは、代議士が其集會室に於て、撰擧民に賄賂を遣つたとを遠慮も無く互に話し合つて居るとであつた△一人は「僕は撰擧に五千圓を費したと言へば、他の一人は「イヤ其れは安かつた、僕は一万圓費した」と言ふ、皆此の調子で撰擧費用の多かつたのを公然誇り顔に吹聽して居る△こういふ人達は無論五千圓一万圓を出し放しには置かぬ、イヤ一文でも徒費はせぬ、必ず他の方面に於て自分が使つた丈けの金を取り返さうとする、代議士が種々の建議案を取次ひだり、政府の提出案を利用したりして、不正の利益を取るのは怪むに足らんのだ△高田は以上の嘆息に次ひで、政界の腐敗と文學者の關係に就て、多少誤つては居るが、小ッ氣のきいた觀察をした、それはこう云ふのだ△西洋にはマコーレー、リットン、バイロン、ユーゴー、キップリング、ゾーラのやうな文學者が有つて斷へず政治上の問題に目を注ぎ、大に政界を警醒するので、いくらか其の腐敗を防遏するとが出來る、然るに日本の文學者には政治問題に着眼する丈けの識見が無いから、毫も政界の爲めに貢獻する所が無ひ、日本の政界の益々腐敗するのは一は文士の無見識な爲めである

主義と同志と

杉村縱横

我が某々の主義に贊成するが故にとて、直に視て以て之を我が同志となすこと勿れ、主義に贊成するもの

とはいひ難ければなり。

贊成といふは、少くとも今日の意味に於ては、極めて價なきものなり「僕も贊成」などいふことは横町の芋屋の小僧だに猶ほ且つ之を口にす、之を買ひかぶりて、直に我か同志を得たりなど思ひ取らんには、飛でもなき間違を生ずべし。

寒夜三五の書生相會す。一人議を發して之より牛を煮て食はんは如何にと曰ふ、他皆之に同ず。同じたるが故に果して牛を食ふかと見てあれば、一人の曰ふ、贊成は即ち贊成なれども僕は今夜少し腹の痛きを覺ゆと、次なる者は曰ふ、僕も贊成は贊成なれど、嚢中の甚だ心細きを如何にせんと、次なる者も亦曰ふ、贊成の意を表すること僕敢て諸君に讓らずと雖も、此寒風を冒して態々買ひに出かくるも隨分太儀ならずや、と斯くしては彼等は贊成者たることを得たるも遂に同志たることを得ざりき、實にも贊成は同志に至る階段なり、されども贊成を以て直に同志と混ぜんは非なり。彼の牛を食はんとする者、若し彼等の爲めに牛を買ひ來りて之を饗せんといふ者に會したらんには彼等は贊成より直に一歩を進めて熱心ある同志となりしなるべし。はては其當時腹痛を訴へて之を拒みし彼の一人さへ、其時の口實はいつしか忘れ果てゝ平氣に箸を取りたるならん。

苟も同志といふ、贊成以上の或物なかるべからず、一には同情なり、同情は贊成に似て是なるもの、贊成が推理より來るものならば同情は感動より來るもの、贊成が冷やかなるものならば、同情は温かなるものなるべし。贊成は餅の如く同情は之を燒くべき火に似たり。贊成なき同情のあり得んやうはなけれど、同情なき贊成は實際何の用にも立つべからず。

二には活動なり。人の窮せるを見て之を憫むを知れども、之に何物かを與ふるを知らずんば、之を眞個の慈悲とはいふべからず。或る主義に贊成するとはすとも、其主義を實現せしめんが爲に、共に手を携へて、動かんとするの覺悟なくは焉ぞ我同志といふを得んや。ユニテリアンの徒の我新佛教の徒に對するや、大贊成を表し大同情を寄す。而かも今日の處未だ直ちに相合して實地の運動に從はんとするの意なし。是れ未だ同志を以て容すべからざる所以か。

三には勇氣なり。場合によりては主義の爲めに自己の利害を棄てゝ顧みざるほどの勇氣あらんことを要す。既に一定の主義を標識して世に立つ以上は多少の

敵を作ること元より覺悟の前ならざるべからず。內心には新佛教の主義に贊成しながら、或は本山の忌諱に觸れ、檀家の怒を招かんことを恐れて踣跙逡巡するものゝ如きは皆な是れ臆病なる贊成者のみ、斷して我が同志たることを容すべからず、

四には服從なり、同一旗識の下に集つて、一大活躍を試みんとする者、豈に忠實なる服從の念なかるべからんや。主義の指し示す所に服從す、是れ一、多數の決議に服從す、是れ二、一同が認めて權威の中心とする所のものに服從す、是れ三、此三つの服從あつて始めて秩序あり組織ある運動に從ふを得べし。研究は飽く迄自由なるべきも運動は飽く迄も規律的なるべし、徒らに我意を張つて左支右吾是れ得たりとするか如きは、以て枳殼の垣に代へ用ふべし、文明的實地運動の役者としては大の禁物たるべからすんばあらず。

贊成以上に此四つの者を備へて、此に始めて同志するとを得べし。初め我等が佛教清徒同志會を組織するや、之に對つて公然不贊成を唱へ得る者あるを見ず。我等の主義とする所元より不贊成を唱ふべき筋のものにあらざればなり。唯夫れ眞正同志として見るべきものに至ては寥々百を以て數ふるにしも足らず、此に於て贊成者の甚だ得易くして同志の甚だ得難き所以を知れり。乃ち此に「主義と同志」とを論して多少の鬱憤を洩らすこと然り。之によりて聊か自ら慰めんとするのみ、敢て大方の君子を傷つけんとするに非ず。

讀者の文壇

●鶴が岡祠畔の女人石

非風俗懐亂生

一たび湘南に遊んで將軍墓畔の地を訪ふ。若宮小路の一路坦々砥の如きところを行き盡して、鶴が岡の祠に詣で、六百年の昔、源右大臣が命を兇刃に委したる古銀杏樹の下を去つて左し、しづやしづの一曲、滿場の諸大名をして、そゞろに直衣の袖をしぼらしめたる靜が舞殿の邊りを過ぎ行けば、大名山の松籟雨に似たるところ、一塊の石、徑に沿うて横はれるを見る。試に笻をとゞめて、これを撿すれば、その狀、はなはだ婦人の……なるものに似て、すこぶる醜、しかも、その醜なる所、故らに、分明ならしめんがために、黒鉛を以て塗抹せられ、その傍に柵を樹て、四圍を繞らし、かつ、これに纒ふる七五三を以てして、一種の宗教的裝飾を加へたり。この石、もと如何の名を有するや、吾人は

もとよりこれを知らず、こゝに、かりに名づけて女人石といふ。

あゝ女人石、この石、もと何の靈ありて、しかく奉祀せらるゝか、また、何の人を利する所ありて、しかく醜態を露出せらるゝか。これを里人に問ふ、知らず、これを行旅に問ふ、また知らず。たゞ、いふ、婦人の孕める所あるもの、これに祀願を籠むれば、すなはち産を安ふするに驗ありと。あゝ、しかるか、しからば、すなはちこれ生殖器の崇拜也。由來生殖器の崇拜は未開國俗の間に行はるゝ一種の蠻的風習。我邦の僻地、なほ、いまだ、この蠻習を絶たざるものあるは、嘗て比較宗教學の講堂に聽いて識る所、はからざりき、帝都を隔るゝ僅に拾數許里、しかも、都人日夕に輻集し來るこの古都の地に於て、かくの如き蠻習を目にする所あらんとは。

そもそも生殖器崇拜の廢絶すべきものたるや論なし。幼稚なる信仰の笑ふべく愚かにして、かつ謬れるは、吾人の言を須たずして、今の博識なる宗教學者のすでに知悉せる所ならん。さらに、これを宗教以外の方面より見るも、かくの如き醜態を露出して、白日公然、衆目に展観せしむるの不可なるは、賢明なる風紀論者の批判を仰がずといへども苟も常識あるものゝ、ひとしく認むる所なるべし。それ、かくの如し。しからば、世の信仰及び風紀を司るものは、速にこの柵を除きて、この石を毀ち、一方、宗教上の迷信を杜絶せしむるとともに、他方、また風紀の壞亂を矯正せんと圖るべきなり。しかるに、彼等は、これを圖らざるのみならず、これに施すに宗教的裝飾を以てして、かへつて、その迷信と壞風とを勸奬せんとするが如きの狀あるは何ぞや、吾人は疑ふ、今の宗教學者及び風紀論者は、いまだ嘗てこれを聞覩せざるか、もしくは、之を聞覩するも、その社會人心に及ぼす悪影響に思ひ至らざるか。

それ、鎌倉は如何の地ぞや。曩昔、大頭將軍、覇府をこゝに創めて、三世九代、治を致したる所、近時、都門の所謂紳士紳商といふもの、來つて驕奢を行ひ、待合風の別莊を建て連ねて、粉々たるこの俗臭、この好山川を穢すといへども、なほ、いまだ、當年の遺跡を存じて、六百年前、英雄起るのところ、修史家詩人が懐古吟咏の資を富ますに足るものあり。殊に、鶴が岡の祠は八幡公の靈を鎭ずる所、所謂鎌倉時代の紀念、多くこの處に存じ、その形勝、その所藏、修史家詩人ならざるものをして、なほかつ、低徊に堪えざらしむ。

かくの如きの地、かくの如きの醜物あり。いづくんぞ、八幡公の尊靈をけがして廟畔の風致を損ふ所なしとせんや。さらに、築土を隔てゝその隣なる所を見れば、神奈川縣尋常師範學校あり。師範學校は如何の棲ぞ、後年子弟敎育の任に當るものを養成する所にあらずや。これらの學徒、晩餐後出でゝ、この境內を散歩する時、この石に對して起す所の聯念は如何のものぞ。敎育上の影響、豈ひとりこれのみならんや。都下中小學校の學徒、毎歳春秋、遠足行軍してこの地に來り、來遊の都人、また多く幼童を伴ふ。これらの學徒幼童もし、これを指して、その所以を問ふものあらば敎師父兄は何の辭を以て答へんとするか。さらに、七里が濱には、外人の別墅あり、その棲む所の外人、この奇異なる宗敎的裝飾を見て、極東の半文明國、なほ、いまだ野蠻の域を脱せずと刺らば、わが同胞は、これに對して否定するの理由を有するか。女人石あるがために、社會人心に及ぼす所の害弊、かくの如く多し。しかも、この地に遊ぶ政治家、學者、宗敎家、新聞記者、これを見るも、恬として敢て顧みることなし。是に於て、無智の徒は、依然として、その迷信を悛めず、女人石はなほ頑として、その醜態を露出せり。風俗壞亂を以て、文學的著作の發賣を禁止する內務大臣の下、死骨の奉迎に熱中して、何がし堂の建立に力むる宗敎家あるの日、かくの如き蠻習、かくの如き醜物の存するを見るは、豈奇々怪々のことにあらずや。

社會の敎育と囚人の敎誨

越後　上田向城

最近統計の示すところによるに、東洋唯一の文明國たる我が大日本帝國は、現に七万の囚人を有するなり。財政豐ならざる我が大日本帝國は、これがために、毎年壹百万圓の費を投しつゝあるなり。七万の人員多しといふべく、百万の金額少しといふべからず。これ此の七万の人、彼等は何故に德義の墻を越えて、罪惡の淵に飛び出したるか、法律の網を破らむとして、却つて鐵窓の下に繫がるゝに至りしか。思うてこゝに至る毎に、吾人は彼等の多數に對して、同情の涙を禁ずること能はざるなり。

彼等の中には、或は色欲痴情のための犯罪者あらむ、或は一派の學者の唱導するが如く、遺傳に基ける先天的犯罪者もこれあらむ、しかも彼等の多くは、實に社會制度の不完全なるよりして、幽囚の苦痛と罪人の汚名とを蒙らざるべからざるに至れるものなるなり。

敎育の設備は、日に月に完備の域に歩武を進めつゝありと雖も、社會の常識は、尙發達の道程にありて、未だ以て健全なりと稱すべからず。從つてその道德の觀念の幼稚にして且つ病的なること、寧ろ憐むべきの狀態にあるなり。彼等の良心は、深く妖雲に鎖されて微光をだに放たず、彼等は未だ彼等の爲しゝ行が、果して善なりや惡なりやをも識別することと能はざるに、早くも國法に縛せられて獄に投せられしなり。

商工殖産の事、その勃興實に振古未曾有と註せられ、金融云々にしてこゝに銀行の増設を觀、石油噴出すべしと傳へられて直に十數の會社成る。しかも勞働者は、常に衣薄く食乏しく家狹きなり。その甚だしきものに至りては、終日必死の勞働も、遂にその饑渇を醫するに足らざるもの多しと聞く。況や、冬にして寒を防ぎ雨にして濕を避くるが如きに於てをや。此くの如くにして、彼等無知の徒は、他に自ら衛るの途を見出すこと能はざるがため、遂に法を犯し人を傷くるに至れるなり。

無知なるがために惡をなし、空腹なるがために罪を犯し、一たび牢獄に繋かれたる彼等が、満期放免せらるゝや、眞に前非を後悔して正業に就かむと欲するも、社會はこれを前科者として、敢てこれと交涉しこれと親善するを好まざるなり。否却つて此の悔悟せる人を待つに大惡人を以てし、彼をして永く彼の空腹を繼けしめむとす。こゝに於て悔悟せる前科者は、一は社會の冷酷を恨み、一はその生命を維持せむがために、再び三びその罪を重ぬるに至るなり。

七万の囚人、其の多くは此くの如き事情の下に生れしなり。毎年百万圓の經費、その多くは此く如きものに向つて費されつゝあるなり。事のこゝに至りしもの、今の社會はその費の最も多くに任ずることを辭すべからざるなり。若しそれ彼等をして、改過遷善の實効を擧けしめ、再犯三犯せしめざらむと欲せば、內、彼等囚人の教悔を怠る能はざるは言を待たざるところ。而して犯罪の原因の多數が、彼等の無知と彼等の空腹とにありとすれば、犯罪を未發に防がむがためには、外社會を教育して、社會の常識を健全ならしむると共に、社會の道德的觀念を發達せしめざるべからず。二回三回罪を重ねしめざらむがためには、適當なる方法を設けて、満期出獄を保護せざるべからざるなり。

曾て、本誌上現今の囚人教誨の効果甚だ少き原因を探りて、第一教悔師の數少きこと、第二教誨師の手腕大ならざること、第三看守に教誨感化的精神缺如せること、の三點にあることを見たりき。然り囚人をして改過遷善せしめむがために、神儒佛耶の各數より、各監獄署に派遣せる教誨師の總數、なほ二百名に上らず。是等の教誨師、また悉く達識高德にして、偉大なる感化力を有せる人のみなりとは言ふべからず。加ふるに、看守押丁の類が、毫も教誨感化の精神を有せざるを以てす、謂はゆる囚人教誨の効果、擧からざること當にそのところなり。而して吾人は、更に他の一原因を見出すことを得たり、何ぞや、曰はく、教誨の回數多きに過ぐること、即ち是れなり。凡そ美味佳肴と雖も、しば〳〵これを食すれば、遂にその美その佳を感ぜざるが如く、教誨もしば〳〵これを施せば、如何に熱心に如何に巧妙なるものと雖も、彼等の耳これに馴れて感激せず、遂に或は傾聽せざるに至らむも知るべからず。殊に平凡なる現時の謂はゆる教誨の如きは、教誨の回數多きに從ひて、その教材に窮乏し、たま〳〵以て自己の無學を暴露して、信を囚人に失ふに至らむ。

勿論しば〳〵囚人に接するは、囚人の個性稟賦を知悉し、これを感化しこれを教導するに於て、最も重要なることなれば、若し高德にして偉大の感化力を有し、親しむべくして狎るべからざる底の教誨師あらむか、吾人は成るべく多く囚人に接せむことを冀ふべしと雖も、現在の狀態に於ては、寧ろ教誨の回數を減じ、囚人が教誨に饑え渇きたる時、乃ちこれを施すを以て、最もその宜しきを得たるものと信ずるなり。然るに現在の教誨は、曰はく總囚教誨、曰はく個人教誨、曰はく分類教誨。更にこれを細別して、特別教誨、請願教誨、入監教誨、出獄教誨、曰はく何、曰はく何。嗚呼、また煩しいかな。

教誨の回數を減ずる時は、改過遷善の効果多かるべきこと此くの如し。ただに然るのみならず、一方に於ては、教誨師の頭數を減ずることを得

べきなり。縦令現在の教誨師は、これを減少する能はずとするも、今後これを増員するの必要を見ざるのみならず、各教誨師は、時間に於て幾多の餘裕を生ずるに至るべきなり。彼等は此の餘裕を利用して、大に爲さざるべからざる事業の多くを有する者なれば、否、彼等をして單に囚人の教誨をなすのみにとゞめしめずして、他に大に爲すところあらしめむがためには、此くの如き餘裕は、當然これを與へざるへからざるなり。惟ふに監獄教悔師の職員は、たゞ囚人を教誨して改過遷善せしむるのみを以て、完きものと思惟するものあらば、そは甚しき誤謬なり。獄內にありて縦令改過遷善せしものと雖も、滿期出獄の後に至りて、社會がこれに正業を與へずむば、彼等は遂に再び三び罪を重ぬるに至るべく、又家あり妻子あるものも、前科者を以て社會の冷酷なる待遇を受けむか、彼等無知なる彼等は、こゝに自暴自棄して重犯を恐れざるに至るべし。彼等を教誨して改過遷善せしめたる教誨師は、彼等悔悟せる前科者をして、再び此の事あらざらしめむがために、一方には免囚保護の方法を設け、一方には時々その所屬監獄署の管內を巡回して、說教に演說に、若しくは前科者の訪問に、出來得る限りに於て重犯の豫防を爲さゞるべからず。殊に犯罪多數の原因が、社會の常識發達せず、社會の道德的觀念幼稚なるがためなりとすれば、教誨師はまた犯罪者無からしめむがために、社會を教育するの覺悟なかるへからず。社會を教育せむがためには、自ら進みてその管內を巡回し、演說說教講話を爲すが如きは、斷じて辭すへからざるなり。此くの如くにして、內には教誨感化の法備り、以て囚人を改過遷善せしめ、外には免囚保護場ありて、彼等をして饑渴の憂なからしめ、演說說教は各所に開かれて、無知の人民をして人道の何たるかを知らしむるに至らむか、佳良の成績を得むこと、期して待つべきなり。

免囚保護といひ、社會教育といふ。是れ獨り監獄教誨師のみこれに任ずべきものにあらずして、宗教家教育家の、一日もこれを等閑に付し去るべきことにあらざるなり。吾人また、啻に口に、手に足に、勞を厭はず苦を辭せず、敢て微力をこれに致し來り、將來またます〳〵その歩武を進め、その効果を擧げむことを期するものなり。然るに吾人が、今特に監獄署教誨師に對してのみ、その多くを求むる所以のもの、一は彼等が他の宗教家教育家に比して、甚だ便利にして且つ適切なる地位にあるのみならず、親しく囚人の教誨に從事して囚人に對する同情も深く、また彼等相互の事情にも明なるがため、一は獄內教誨の効果を社會に彰さむには、內囚人をして改過遷善せしむると共に、外社會制度を完備せしめ、以て內外相應ずるの勝れるあるがためなるなり。二百名に垂とする現任監獄教誨師諸氏、能く吾人の言を容るゝの勇氣と雅量とありや。

短文（課題三万圓の處分）

▲腰纏十萬鶴に乗て楊州に遊ばんと云ひ、後に杜前に酒左右に美人と云ふハ皆これ東洋的遊冶郎の理想のみ、予は廿世紀の青年が猶未だかゝる不用裝無きことを夢想して不正の金錢を慾望し、道路を歩むときも、室に獨坐するときも、終始此念を離れず、時には「アー錢が慾しい」の嘆聲を發するを慨するものなり、此種の青年に限り投機心と僥倖心計りその腦裡に蟠まれり、予に若し三万圓の餘裕あらば彼等の三十人（予一人の知人のみにて此種の人物五十人は有り）に一千圓づゝを分與して投機に手を出さしめ、早きは數月遲きも二三年に失敗に失敗を重ねて、アー予は誤れりと、大後悔をなすの時を作らんとす、人は皆一度此大後悔の時代を經過せざれば人世の妙趣を解し得ざるなり、則ち投機的僥倖的心念

の在る間は、如何なる事業も眞面目なる能はず、その成功も永久なる能はず、その人格も高潔なる能はざればなり、かくして予は三十の眞朋友を得ん（芝白金生）

▲有体に云へば衣食住に汲々たる我は三万圓の金を得たりさせば先づ第一に我家の生計基本として銀行に預る計りである、一家に餘力有て後事業も計畫しよう、親戚故舊をも救はう、これ本末を誤らぬ獨立自尊の主義であると思ふ（K、G）

▲もし僕をして三萬圓を處分せしむれば、僕は音樂研究のために其三分の一を費し、其二分の一を社會改良のために費すであらう、而して音樂の研究は是を海外に於てなし、社會の改良は是を日本に於てなすのだ、そこで、今假りに下等の旅費と中等の生活費とを拂ふとして、一日平均拾圓宛費すさすれば、一萬圓を以て二ヶ年位で海外に於て音樂に關する研究（まづ技術さ歷史を研究し、次に教育、宗教、家庭等に於て、如何に音樂が用ゐられつゝあるか等をも調査す）を遂ぐるのだ、而して殘る二萬圓の中で其一部を割き、音樂に關する書物さ樂器とを海外より購入（無論自分の遊學中に見て置きしもの）し、是を新たに築きし音樂堂へ備へ附けるのだ、音樂堂は東京の眞ん中へ拵らへて、一週に一度位ひ演奏會（此には無論東京音樂學校や明治音樂會の應援を受くるのだ）を開き、適宜の方法でもつて都人士女の參聽を許し、一面に於ては他の腐敗せる場所へ行くを防ぎ、他面に於ては其氣品を高めてやるのだ、彼れ是れさ音樂堂設立のために一萬五千圓（不充分ではあるが）を費して仕まうから、殘るのはもう五千圓しかない、さて其二分の一は少ないけれども積立金さ仕て置いて、他の二千五百圓を以ては、音樂的雜誌を發刊するの資に供し、多少の利益をも得るであらうから、是は積立金の方へ廻して、共に樂宗修務のために費すのである、而して自分は修學中に得たるさころを、勢力のある新聞雜誌へ投書（決して人のやうに原稿料は申受けない）して萎微せる文壇に活氣を添へてやるのだ、斯うばかりでは態々自分で音樂修業に出懸る必用もないやうだが、術も文壇を振はし、社會を改良しやうと云ふには、乃公自ら出馬して奮發せねばならぬわけだ、また右に述べただけでは三万圓の効果も薄いやうだが、僕は何の蚊のさ口先ばかりで社會改良などを叫ばんよりは、まづ日本人の音樂思想を高尚（文學の力を借りて）にして、音樂の力でもつて日本人全体の品位を高めたならば、濁り且つ汚れたる今日の社會は、だん／＼さ光りを放つて來るであらうさ思われる、してみれば三萬圓が社界に貢献するさころまた少なからずであらうと思はれる、僕にもし三萬圓を與れるものがあつたならば、僕は實際に右の如くやつて見せるがどうだ（松蟒生）

▲吾に何の抱負もなければ希望もない、云はゞ半死の孤兒である、三万圓の少金何程の事か爲し得んや、左は去りながら孤兒試みに此金の處分方を識せん、予は予が土地、則ち城の酋長が後を引き受けて女ながらも天晴暫く山城に構て籠り武勇の名を轟かしたる板額女が舊跡鳥坂城の麓に一貧民學校を建設して見たい、程度は乃ち尋常小學より尋常中學迄さして專ら實業に就かしむる方針を執るので政府の學校さ連絡を求めたり徵兵猶豫の恩典杯は決して得たくない、而して教員は予さ志を同くする而も正義廉潔頑固でもよい昔の武士氣質の士に乞て薄給を以て教鞭を採て貰ひ憐れの貧民に普通教育を與へ、自分は貧民窟の神樣と呼はれて見たい、ソレハ三万圓の金を以て建設維持するとが出來るので其算入表は朝飯前の事である、併し不幸予が請に應して與るゝ教員がなければ到底駄目だ、故に予は今一策がある即ち吾邦に三大偉人を養成して見たい、レハ大學卒業の學力を有し意志堅全に身体强健なる者三人を撰抜し來て一人に各一万圓を與へて其一人を世界第一の工藝家とならしめ、一人を世

界唯一の大哲學者とならしめ、宇宙の眞理此哲學者の所論の下に否應云はざらしめ而して今一人をば英邁博覧深智高德親鸞の如き大宗教家を出だし、星亨の如き者も平沼專蔵の如き者も將た又大勳位侯爵伊藤博文樣の如き者も乃至外邪異見の徒をして皆な渇仰の頭をうなたれて信心篤き念佛者とならしめる程のコノ三大偉人を養ふの學資に此三万圓を費さは定めて愉快の事てあろふ、嗟之は越後の片邊鳥坂城趾の麓に住める死識死財死抱負死希望の予が熱誠眞面目なる三万圓の處分方である（叶覺）

▲以て僕が年來の素志中央亞細亞に探検を試みん哉（碧山）

▲余は一昨年臺灣にて熱病を煩ひ、篤き看護婦の介抱にて九死に一生を得たるものである、以來金さへ許せば親類縁者はをろか到るところに説き勸めて女子に看護婦になる樣にし、その資金を出だしたく思へり（和泉善治郎）

▲我に三萬圓あらしめば、これを擧げて、月島丸遭難者の遺族に贈らむ。（一船員）

▲東京市を離るゝこと三十分乃至は一時間の歩行時間の距離ある田舍、成るべくは大森近傍に余が居宅を設け、其土地も他人のものならず、自己の所有とし其住居は二階作りにて五六間あり、宅地は二百坪計りとし宅地家屋に投ずるに一万五千圓、他の一半を正確なる資本に廻はし、家族は質素に幸福に暮らし、有ゆる方面に向つても頭を低げず腰を下げずして濟ますの生活をなしたし、これ僞善無く白狀する余の心事なり、（丸の内の腰辨當）

▲我に三萬圓を持たしめば、將に二三の友を拉して、亞細亞大陸の山河を跋渉し、天然の偉人と相語り、大に東洋的元氣を養はん。（今西鄉）

▲予の祖父は、院家色、内陣酒に、餘間碁打、飛檐學問、平僧法談、と僧階に就て人品を評したが、學者の既往を見れば此評に當ると澤山である、則ち資本の澤山あるものには家庭からが面白くない、心も躰も弱きもの計りで、無資産家に人物の卵が多ひ、故に此三万圓の利分で無學資の子弟十名を選拔し完全に就學せしめたひ、又選拔するには私心のない而も此道に專心なる教育熱心家に一任してほしい、（石徹白）

短文出題記者白す

今回の出稿者は例月より多きに拘らずその大多數は揭ぐること能はざるを憾みとす何となれば前數種の外は出題の時に注意せるに拘はらず悉く眞面目の答案を投ぜずして出放題の漫言ばかりなればなり、只其中甚からざるもの四五丈けを特典を以て左に採録せん

▲僕の懐に、今現に三萬圓あるならば、直に神田の錦輝館を買入れて、東亞佛教會の連中の、ごぎもを引き抜いてやらう。（蕎佛子）

▲三萬圓、若しあつたら何とか使ひ道もわからうが、倒に振つても鼠さも言はない境界では、そんなことを考へて居るどころか、「明日どうして米を買はうか」が先決の大問題である。しかし、强ひて言へなら言ひもしやう。日はく、二三年分の米味噌醬油に薪炭たどんを買ひ込んで、店賃の三百圓ばかりも、大屋のデコボコ頭へぶツけて、それでも殘りがあツたら、誰でも勝手次第に持ツて行け。（九尺二間房）

▲三萬圓を資本として高利貸となり、平沼專蔵の向ふを張ツて、貴族院議員とならむ。（アイス）

▲一個一萬圓づゝのメダルを造り、これを明治の三傑に贈らむ。明治の三傑とは、星亨、平沼專蔵、中村彌六、即ち是れ。（公盆子）

▲若し忙しい時に人の來ないやらにする方法、及び、朝寢をしたい時に、太陽を出さないやうな工夫をして吳れるものがあつたら、三萬圓やる。（專賣屋）

▲辻待ちして、水ッ鼻をすゝりながら震へて居る都下六萬の車夫を、日比谷原頭に會せしめ、これに與ふるに各金五拾錢を以てし、繩濃簾に矢大臣を極め込ませて、どぶろく數椀に腹鼓を打たしめむか。（蹣跚園）

▲三萬圓を一日の齒代に拂ッて、借り得らるゝ丈の人力車を借り上げ、以て世の安車快走を喜ぶ出來星紳士を苦しむも、また甚だ妙ならずや。（徒歩連）

▲我は一大人名辭書を編纂し、卷頭まづ我が肖像と噓八百の大々的詳傳とを揭げ、これを遺して後世の歷史家を苦しめむと欲す。此の費用概算三萬圓。（獨尊子）

次の課題（二月十二日締切）（三月十二日締切）

憐なる出來事

生來最も憐れに感じたる自身の遭逢し又は目擊せる出來事一個

日本將來の音樂に就て

通　信

航西通信第一號

藤　井　宣　正

謹啓、此の間は、わざ〳〵横濱迄御見立て下され難有存候、さて、十一月二日は、野生が四年前に埼玉中學へ赴任致し候日に有之候處、同月同日に休職の命を蒙り、天長節の御式を奉行後、辭令を發表致し候に、生徒等は同日運動會を兼れたる送別會を催ふし、烟火を打ち揚げ、餘興を行なひ、且つ、光信か浦島子を彫刻したる、黃金製飾磁石を（代五十圓ホドトノ事）贈與致し候、其心底は金錢にて測度すべきものに無之、誠に喜はしく感し申候、これを、生が寺の檀頭にて、かつ友人なる大橋氏に示し候處、此飾を十二圓の銀時計に附するは相應せずとて、自用の金時計を貸與致しくれられ、急に胸間が光り出し紳士然と致し來り候、尤も、胸中は昔より紳士と御承知被下度候、浦和の官民か合同にて送別の宴を張り與れ候時、あまり御馳走になり過ぎて風邪を引越し、五日ほど籠居候爲め、手おくれとなりし事少なからず、且、兼て起稿中の、國文中の佛教語字典の原稿材料を整理して、妻端枝、義弟弘圓、從弟大等の三人に完結出版の事を委する爲めと、眞美大觀の說明起稿の爲めとに、飄然湘南の地に旅行致し、また此間に寫眞を取る事を練習致候か、是は不日印度へ參り、佛跡提影の準備と御承知被下度、然るに失敗は、器械「コダーク」にて、窓板を開きて「シャター」をやるべきを、開けずに寫して種版を廻轉致し候爲め、原板を徒費致し、大に先生に笑はれ申候も、印度邊ではなくて先仕合と奉存候、其後、存外上手と相成候間、追ては差上、貴紙に自慢致したきものと存候、相州より歸り候處、東京の安田、川上、兩君より書狀參り居り、廿九日には、中年會にて、橋本圭君、坪谷善君、大橋乙羽君の歡迎を兼れ、瀨尾昌宗君、（醫學士にて今度生等と同船獨乙へ眼科の研究に往く人）及び、生の送別會を開くとの事にて、富士見軒に、波多野傳三郎君、牧野子爵、入澤達吉君等の中年もの二十餘人集會致し候、此會は、一名大食會とも申し候か、之は會費に限ある故、多量の方面より命名せしものには無之、何もかも喰ふ、「スープ」の出ざる先に菓物に手を出す人などのあるより、口惡きものが申觸れ候ものならんが、其名か得意氣に各會員の口より出候にて、會況御推知相成り度、主客などの區別は會費

の上にも無之、昔々勝手の氣炎を吐き散し申候、乙羽君の寫眞談に、少々後れを取り候も、何分大まい牛百圓を氣張りて生も器械を求め候事故、何に獲さ「トランク」の中へ入れて持參致候、印度の佛像の薄暗き圖が、信書中に有之候はゞ、生の技術の程度如何を御撿定相成度候、

十二月二日の午後三時に、浦和を出立致候矢先に、埼玉私立教育會より、生が該會事業に盡力せし功に酬ゆる爲さ號し、金線の眼鏡を寄贈し來り候、是は此社會の金鵄勳章さ可申も、實は寸効も無之、タヾ駄法螺を吹きしのみ、何やら、眼の邊か急にピカツキ來りし爲、人目恥かしき様に感じ候も、滊車が上野へ着き候頃は、やゝ平氣さ相成り申候、埼玉中學の教職員、高等女學校長等は、上野迄追蹤し來られ候儘、待合茶屋（怪しき所に非ず、停車場前の洋館なり）に「シャンペーン」代用の麥酒を傾けて手を別ち申候、當夜は、島地默雷師方に一泊仕候、是は生か、過る明治十三年の春、今の澁谷、元の飯塚善作君さ、男兒立志出郷關を歌ふて東京へ上り候節、草鞋を脫き候家なれば、其緣起にて厄介に相成り候、

三日は晴天にて大悅仕候、島地家御一族、長岡春一君、要、義弟等に送られて、朝八時新橋に着致候、生は、元も今も坊主なれど、途中地方中學に居り候爲め、見送被下候人々は誠に種々雜多にて、石黑翁、牧野公、島田翁の如きより、大學の教授、文部省の御役人、中學の教員、地方の政客、東京の新聞屋、本屋、雜誌屋、佛教學林の先生、生徒、高等師範の先生、大學の角帽連、築地門跡の御寺さま、實に色々に御座候、乍去、比較的女性の少なかりしは、未だ惡人濟度の力に乏しき故と御推察被下度、品川より服部文學士さ合し申候、同君の北京籠城談は、船中にて聞き取り可申上候、横濱にて本船に乘り込み候は午前十一時頃にて、正午、に開行致候、生は、服部瀨尾の二君と一室を占領致し、別に工學士丹羽鋤彥君あり、是は、生の同鄉人故廣川工學士さ同學の由にて、船中先つ四學士出來申候間、時に學士會を催す事と致候、尙、船中第一の失敗者は丹羽君なるも、これは天機を漏すの恐あれば差控へ申候、遠州洋、紀州沖、共に波高かゝりしも、生は四人中、一番丈夫、三食は元より、茶菓もやり申候間、先々御安心被下度候、

四日午後五時神戶へ着、諏訪山本願寺說教所へ立ち寄り、香港以西の暑衣に用ゆべき浴衣、五枚ほど新調を賴み、直に、三宮停車場へ驅けつけ、茨木在の如是村に利井明朗翁を訪問、五日の午前三時迄、茶にだまされて談話致し候、

五日朝九時、利井翁と同行京都へ參り、大洲鐵然翁と語談の上、伏見三夜莊に、本願寺老法主を拜訪致候、日暮、從弟姬宮大等を待合せ、桃山停車場に利井翁に別れ、奈良へ夜の八時頃參り候、服部君先つ嫩草山下の武藏野に宿を取りて俟ち居り候、外國へ土產にと、奈良人形を、船長へ鼻藥にさ、齊丹よしを求め申候、鹿の呦々たる聲は松濤の爲に聞えず、嵐はふきすさび候も、前夜の疲勞に熟睡致候、利井翁が、紙衣一領を贐にと贈られ候を着服致候爲め、寒氣はさのみ覺え不申候、

六日は興福寺を訪問致し、法隆寺へ參り、寺の佐伯定胤君は親友故、中飯の馳走に相成り候、上宮太子に奉別し、法寶物拜觀の上、大阪を經て神戶へ歸り候、最早、日本のお金は毛布夏帽等の買入に盡きたれば、空財布を振りて服部君と共に、諏訪稅關所に厄介に相成申候、

七日朝、早起出立の用意に取掛り居り候處、昨日の風雨に妨けられ、出帆一日延期さ申來り候間、散髮など致し、稅關へ遊に參り候、是は同窓櫻井鐵太郞氏が其主人たるに由り、明日は其小汽船にて因幡丸に赴かん下心さ御察し被下度、見送り呉候方々への禮狀やら、種々の通信の認め方に半日を費やし、午後五時よりは自由亭の饗宴に赴き申候、是は床次（トコナミ）

竹次郎と申す縣の書記官、前記櫻井市の助役、漆畑春吉等、十餘の大學の同年連が、生等の爲に催ほし候送別會にて、さすがに、神戶の紳士連は大金持のみにて、會費などは徵發不致候、話は七年前、或は十年前の事にて、此に述べ候ふも、興味は有之間敷候得共、自分等には甚だ面白く、「ストーブ」に對して寄宿舍に在りし時、賄所より薪を奪ひ來りし事、煖爐上にて燒芋を造りし事などを話し出し、皆々懷舊の情に淚をたれ、否、笑を催ほし候、さて、明日はいよ〱日本の土を踏仕舞（當分ナレド）と考候時は、どうやら鼻もにぶり申候、これは、悟りても凡夫の境界なれば故鄕に在ます病母はじめ、親類舊故の事、日夕交遊致し來りし朋友知己、さては是迄そだて候生徒等の事など、陝然腦裏に湧出致し來り申候、先は此度はこれにて失禮致候、同人諸君へ宜敷御傳へ下され度匆々、

明治三十三年十二月七日夜十二時認了

新刊紹介

◉かげろふ集　後藤宙外著　春陽堂發行

宙外氏が貳拾六年以降、國民の友、新著月刊等へ掲載せしかげろふ以下拾餘種の小說を收む。皆、當時、評家の歡迎をうけたるもの、今、敢て余の是非を加ふるを要ひんや。躰裁美麗にして挿畫はた新意匠を出だせり。その文致は言文一致論者の宜しく參考すべきものなるべし、（定價七拾錢）

◉『片われ月』　金子薰園著　新聲社發行

蒲原有明君、金子薰園氏の著『片われ月』一篇を贈りて著者のために評を余に需めらる。余は和歌に於ては門外漢なり。何ぞこれを評し得るの資格あらんや。たゞ一閱過の際、聊か懷に感じたる所をいへば、氏は抒情より抒事に於てその才を長ずるが如し。抒情に於て見るべきものなきにあらざるも、その情を寄するや、必ず風物をかり來つてこれに托す。所謂新詩社一派の歌人、鐵幹氏と共に抒情に力むるが故に、氏もまたその風を承けて抒情的主題を捉へ來れるも、鳳成の才は蔽ふべからず、風物に於て却つて勝る所あるを見る。一言以てその詩風を評すれば曰く繪畫的、「てる月にひれふる魚のかげ見えてゆく舟かろし江戶川の水」の如き、この評の中れるを覺ゆ。以上聊か感じたる所を陳べたるのみ、敢て評したりといはんや、すなはち記して有明君に問ふ（錦街生）

◉明治年表　日本橋區裳華房發行

偉人史叢發行部の編纂に成る簡にして其要を得慶應三年より明治三十三年に至る各方面の大事記を袖珍として携ふるを得る至極重寶の著なり（定價三十錢）

◉新小說　第六年第一卷　全

柳浪の松の下露、天外の霜夜、眉山の眞弓槻弓、變哲の道豫々、等の外、附錄として十二名家の談話を載す、例に依て趣味饒かなり

◉鶯ごろも　大阪市南本町　文淵堂發行

小天地の第四號なり、收むる所、宙外のやま里、不孤の小麥畑、坪內博士の書籍雜惑、梁川の詩論一則、不倒の壺坂淨瑠璃、月郊の會心錄、撫々の迫辛丑文壇、抱月の送友文、代水の行雲の歌等あり、關西文運の中堅、號を逐うて益々盛なるは喜ぶべし、（定價二十錢）

◉新文藝　第一卷第一號　東京堂發行

天隨、蝶二、漱石、荔舟四氏の主任となりて發刊する文學雜誌也、發刊の辭に曰く新文藝の發刊は聊か將來の文壇に貢獻せんとする微志に外ならず、吾曹敢て濳するに一日の長を以てし便ち滿天下靑年諸君の爲に識

る所あらんと欲すと、所載記事の要目を擧ぐれば、蕩舟の二十世紀の和歌壇、馮虚のドーデーを論す、漱石のロングフエロー詳傳、龍泉のギヨーテが支說小說評を讀む、天隨の山かげの道芝、蝶二のウヰルヘルム、テル等、讀むべきもの多し、(定價十二錢)

◉女學世界　博文館發行

女學雜誌界の巨鎭新年新發行の雜誌中世人の最も歡迎せるは此誌たるべし(二十錢)

◉急務檄言　高橋秀正著　文學同志會出版

檄言の二字已に耳新らしいづれ國家を深憂する有志家の筆なるらし慷慨正氣至誠愛國掃蕩一洗などの熱字は殆んど每頁に見ゆる樣なり(二十五

保護成蹟　一月十日調查

保護者家宅に寄宿就業する者	五十四人
東京市中に一家を營み獨立自活する者	百十九人
地方に轉任し獨立自活するもの	百五十人
死亡したるもの	十九人
○轉住後目下所在不明の者	四十二人
○保護者家宅より逃亡したる者	二十二人
○再び犯罪せしもの	三十三人

以上○印三項を不良成蹟と見て對照すれば收容總員四三九に對する

良成蹟　十分の八弱
不良成蹟　十分の二强

結婚　出產

就業者二百六十九人(現在寄宿五四を省ける者)

內妻帶したるもの	百五十八人
子女を擧げたるもの	六十五人

職業　種類九十一あり

大工左官鍛冶等の技術者あり車力土方日雇の勞働者あり或は豆賣はんぺん賣講釋師芝居出方見世物師按摩盲人寺男杯也

教育　無教育者最多なり

普通の讀書力あるもの	四十人
稍や讀書力あるもの	百〇五人
皆無のもの	二百九十四人

保護を求め來りし理由を細別すれば

親戚知己の擯斥により	百七十七人
孤獨便る方無きにより	百六十人

●各種麥酒の釀造高

三万七千石	惠比壽	二万七千石	アサヒ
一万六千石	キリン	一万三千石	札幌
六千石	カブト	五千石	東京
二千石	淺田	一千石	富貴
一千石	明治		

其他七種三千石にて合計十一万一千石なり

●酒杯獻酬の廢止　大日本私立衛生會中津支會總會の宴席にも滿場一致の賛同を以て酒杯獻酬を廢止されたるが山口縣下馬關市に於ても近來肺病患者の數を増加し殊に花街に流行劇しきより自然市民にして此病に罹るもの多く何れの宴會にも二三患者の出席せざるはなきより醫師社會には酒杯の交換を禁ずるの擧を厲行しつゝありと謂ふ

●結核病と職業　獨逸に於て調査せる人口千人に就き結核の爲に死亡し幷に百人に就き罹病するものゝ職業別を見るに左の如し

職業	人口千人に付死亡	人口百人に付罹病
塵埃を發せざる職業	三八一、〇	二、三九
塵埃を發する職業	四八〇、〇	五、四三
金屬粉を取扱ふ職業	四七〇、五八	五、八四
銅粉を取扱ふ職業	四〇三、七	五、三一
鐵粉を取扱ふ職業	五〇一、〇	五、五五
鉛粉を取扱ふ職業	四〇三、四三	七、七九
礦物粉を取扱ふ職業	五三七、〇四	四、四二
有機物粉を取扱ふ職業	五六五、九	五、六四
毛布を取扱ふ職業	五五四、一	四、四五
綿布及綿花を取扱ふ職業	五〇七、五	五、三五
木材及紙を取扱ふ職業	五九八、四	五、九六
煙草を取扱ふ職業	四七八、三	八、四七

●年賀狀の數　昨年十二月廿五日より卅日に至る間に於て東京郵便電信本支局が取扱ひたる年賀狀總數一百六十二万三千九百四十五通なり之を卅二年の分一百六十一万九千四百六十通に比するに四千四百八十五通の增加なり、尤も是は特別取扱の分のみ

●印刷物の利益　三十四年度の豫算に依れば印刷局作業の收入は百九十二万圓、之に對する支出は百七十四万圓にして差引き十八万圓の益金を生ずる都合なり

●官線鐵道の營業豫算　三十四年度に於ける官線鐵道の收支豫

算は

收入　二千四万圓
支出　千二百七十二万圓
差引益金　七百三十一万圓

●物價の割合　去十二月中の內國主要品相場利合を調査するに石炭、銅、鐵、綿絲、石油其池都合四十種に就き明治卅年一月の相場を各〻百としたるものゝ平均は百八十一にして之を一昨年十二月の平均百八十九に對比すれば八の下落なりと

●一鄉の私生兒　越後栃尾鄕一町十五ヶ村に於る昨年中の私生兒百三十餘人の多きに及ぶ淫風想ふべし

●教育宗教

●眞宗同盟倶樂部の設置　昨年妙心寺會議の際、誠照寺派管長二條秀源師の發議にて眞宗各派同盟倶樂部を設置す

大日本眞宗各派同盟倶樂部規約

一開宗立教の本旨に基き精神的結合に依り眞宗各派の一致を鞏固にして宗門本來の面目を發揮すること

一言行忠信の金言を恪守し、當相敬愛の教誡を遵奉し、各派一致の實を舉げ佛教護持の責任を全ふすること

一眞宗各派管長及び役員を以て本倶樂部員とすること

一本倶樂部事務所は京都市に設置する事

明治三十三年十一月

眞宗大谷派管長　大谷光瑩
眞宗高田派管長　常盤井堯熙
眞宗興正寺派管長　華園澤稱
眞宗佛光寺派管長　澁谷微妙定院
眞宗出雲路派管長　藤善聽
眞宗山元派管長　藤原善住
眞宗誠照寺派管長　二條秀源
眞宗三門徒派管長　平光圓

●就學兒童增加　最近教育年報に依れば就學兒童割合の增加は男兒は百分の八十五、六、女兒は百分の五十九、四にして之を前年度の割合に比すれば男兒は百分の二、六、女兒は百分の三、八の增加なり。又小中大學及各種學校の數は二万八千七百十七にして、其教員十万〇百〇六人生徒四百五十一萬三千三百三十四人なり。之を前年度の統計に比すれば學校二百〇六、教員七千百十三人、生徒二十六萬五千九百九十三人の增加

第一　學校の類別

	官立	公立	私立	合計
小學校	一	二六、五八八	四〇七	二六、九九七
盲啞院		一	五	七
師範學校	一	四九		四九
高等師範	二	—	—	二
中學校	一	一五六	三四	一九一
高等女學校	一	二九	七	三七
高等學校	六	—	—	六
帝國大學	二	—	—	二
專門學校	三	四	三八	四五
工商農學校	九	二〇六	二一	二三六
各種學校	—	一八	一、三七	一、一四五

合計	二七	二七、〇五一	一、六三九	二八、七一七

第二　教員生徒卒業生

	教員	生徒	卒業生
小學校	八八、六六〇	四、三〇二、六二三	六五一、六八八
盲啞院	四〇	四五八	三四
師範學校	八三九	一二、八九二	五、四五六
高等師範	一一〇	五八〇	一七九
中學校	三、一〇二	六九、一七九	四、二〇六
高等女學校	四五〇	八、八五七	一、三四七
高等學校	三四六	五、〇九〇	九三八
帝國大學	二六七	二、九一三	六七五
專門學校	八九九	一二、六二四	一、六九〇
工商農學校	一、四五一	二四、七一九	三、六一四
各種學校	三、九四二	七三、四六四	一四、七七〇
合計	一〇〇、一〇六	四、五一三、三三四	六八四、七六七

教員中官立學校の外國顧教師は五十二人にして獨逸人十六人、英人十二人、米人六人、佛人六人にて他に朝鮮、露國等に一二人なり。官費又海外留學生一百人にして前年度よりの增加四十二人なり。尚ほ同年度中の教育の經費は中央政府の支出四百二十三萬二千八百一圓、地方税より出支するもの二千七百九十萬五千百六十三圓合計三千二百十三萬七千九百六十四圓なり。

◉大學傳道の着手　福音同盟會にては愈々本月より大學傳道に着手する事となり、先つ全國を十四教區に分ち其中央に支部を置き、夫々教區にて運動の方針を定めん爲め、東海道、近畿、北陸地方には會長本多庸一氏、奧羽、北海道地方に副會長小崎弘道氏、山陽、西海地方には大阪支部長宮川經輝氏の出張せる筈

◉「大學傳道」　新教各派の連合になりし廿世紀大學傳道の機關として題號の如き雜誌出たり毎月二回の發行也

◉菩提會の議案　過日大日本菩提會協議會を開く其議案は一菩提會協贊會を設置する事●皇族を總代に推戴する事●理事以下の改選を爲す方法●拜禮會の準備●東京へ出開帳許否の件●万般準備の爲め一時他より資金を備入るゝ事

◉東亞佛教會　東亞佛教會は釋雲照櫻木谷慈薰、渡邊南隱、北野元峯、南條文雄、村上專精、三浦梧樓、澤柳政太郎等諸氏の發起となり創業資金三萬圓基本金若干とを以て之が維持を計り其目的としては上下に通じて普く布教の道を開く事、宗教の方面より東洋を啓發する事、現時佛教界の情弊を洗滌する事を期し其手段には錦輝館を讓受けて本部とし日曜學校を開く事、日曜法話演説を開く事、健全なる布教師を養成し常に東洋各地を巡化せしむる事、支那語學生を養成する事、博く傳道施本の道を開く事周報を發行する事に定め既に評議員中には森村市左衛門、戸塚文海、森清右衛門、小野金六の諸氏加はり本年早々より釋雲照、櫻木谷慈薰、渡邊南隱の三老宿は之が淨財を得るの一着手として京濱間を托鉢巡回す筈なりと

◉遷座三百年紀念法會　大谷派本願寺にては四月一日より御眞影遷座三百年紀念會を執行す

◉成田の迷信　昨年七月より十二月まで六ヶ月の間に下總成田山に參籠して斷食の祈願を籠めたるもの男二百六十五人女三十四人合計二百九十九人斷食日數は三週間のもの二十七人二週間のもの九十八人一週間のもの百四十六人三日二夜のもの三十六人あり祈願の目的は男にあつては自身の病氣平癒を祈るもの最も多く女にあつては實子の病氣平癒を祈るが多しと

◉主筆　記者病褥に在り本號の編輯不十分を免れず伏して寬恕を願ふ

尋常中學科講義錄

本講義錄揭載の學科は文部省所定の中學全科にして其種目左の如し

●修身 ●倫理 ●算術 ●代數 ●幾何 ●日本歴史 ●東洋歴史 ●西洋歴史
●國語 ●漢文 ●英語 ●作文 ●地文 ●日本地理 ●萬國地理 ●習字圖畫
●物理 ●化學 ●博物 ●附錄（英語、獨逸語、支那語以上三國會話）

右は文部省所定の中學全科にして元來五年間にて修業すべきものなれとも本會は初後二年間にて講修し得る便法を設く

●毎月四號合本二冊發行●望の者は左の入會金及會費を添て申込べし（本年十一月五日第一號發行）入會金廿錢（十一月五日前申込は半額に減ず）會費（月謝）一ヶ月卅五錢●三ヶ月分前納壹圓●半年分貳圓●一年分四圓
●入會者には會員章を授與し貧生には別に特待法あり●規則は郵券二錢寄送次第進呈すべし



發行所 東京駒込哲學館内 中學講習會

京北中學校生徒募集

來四月一年級より五年級まで各級入學を許す入學試驗は三月二十五日より施行す、規則入用の者は郵券二錢寄送すべし

卅四年二月 東京小石川原町十九番地

京北中學校

校長 井上圓了

輔佐 湯本武比古

杉谷佐五郎